一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

日田市高瀬遺跡群の調査　4

寺内遺跡（てらうち）

上野第2遺跡（うえのだいに）

2002

大分県教育委員会

上野第２遺跡調査区全景（南東より）

寺内遺跡出土　青磁碗

序

九州のほぼ中心に位置する日田市は、筑後川の上流域にあたり、弥生時代の吹上遺跡、古墳時代の小迫辻原遺跡など多くの文化遺産が知られているところです。

これまで、一般国道210号日田バイパスの建設に先立って発掘調査された遺跡は9カ所にのぼり、それらの遺跡は日田市の原始・古代から近世にいたる人々の生活の一端を明らかにしてくれました。

この報告書に記録された寺内遺跡・上野第2遺跡もそのうちの1つです。これらの成果が、今後の学術研究ならびに文化財保護に少しでも役立てば幸いです。

最後に、発掘調査から本書作成まで多大なる御指導、御協力をいただきました関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成14年3月29日

大分県教育委員会教育長

石　川　公　一

例　　言

1．本書は、一般国道210号日田バイパスの建設に伴い建設省大分工事事務所（現国土交通省大分整備事務所）の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した日田市高瀬地区遺跡群の発掘調査報告書である。

2．本書に報告する遺跡は、1997（平成9）年度に本調査をおこなった日田市大字石井に所在する寺内遺跡と2000（平成12）年度に本調査をおこなった日田市大字高瀬に所在する上野第２遺跡である。

3．本書の執筆者は次の通りである。

第１章　……松本　康弘
第２章　……松本　康弘
第３章　第１節　……高橋　　徹
第３章　第２節　第３節…松本　康弘
第４章　……山本　恭弘

4．遺構の実測、写真撮影は調査担当、調査員および調査補助員があたり、遺物写真撮影は友岡信彦（県文化課）が担当した。空中写真はスカイサーベイに依託した。

5．出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁文化課文化財資料室において保管している。

6．本書の編集・構成は高橋、山本、松本で行った。また、第３章寺内遺跡の出土遺物の年代観は高橋による。

本　文　目　次

序文
例言

第１章　はじめに ……1
　第１節　調査にいたる経過 ……1
　第２節　埋蔵文化財調査の経過と調査組織 ……2

第２章　地理的歴史的環境 ……7

第３章　寺内遺跡 ……11
　第１節　寺内遺跡の調査経過と概要 ……11
　第２節　調査の成果 ……13
　　１.弥生・古墳時代の遺構 ……13
　　(1) 竪穴跡 ……13
　　(2) 周溝状遺構 ……28
　　２.中近世の遺構 ……30
　　(1) 土壙墓 ……30
　　(2) 溝状遺構 ……31
　　(3) 井戸状遺構 ……37
　　３.その他の遺物 ……40
　第３節　小　結 ……41

第４章　上野第２遺跡 ……65
　第１節　上野第２遺跡の調査経過と概要 ……65
　第２節　調査の成果 ……69
　　１.竪穴住居跡 ……69
　　２.土坑 ……72
　　３.土壙墓 ……76
　　４.甕棺墓群 ……78
　　５.掘立柱建物跡 ……101
　　６.溝状遺構 ……107
　　７.火葬墓 ……107
　第３節　小　結 ……108

挿　図　目　次

第１章　はじめに

第１図　寺内・上野第２遺跡位置図……1

第２図　日田バイパスの路線と遺跡……5

第２章　地理的歴史的環境

第３図　日田市主要遺跡分布図……9

第３章　寺内遺跡

第４図　寺内遺跡路線内位置図　……11

第５図　寺内遺跡遺構配置図　……12

第６図　１号竪穴住居跡実測図　……13

第７図　１号竪穴住居跡出土遺物実測図　13

第８図　２号竪穴住居跡実測図　……14

第９図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図　14

第10図　３号竪穴住居跡実測図　……15

第11図　３号竪穴住居跡出土遺物実測図　15

第12図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図　16

第13図　４・５・６号竪穴住居跡実測図　16

第14図　５号竪穴住居跡出土遺物実測図　17

第15図　７・８号竪穴住居跡実測図　……17

第16図　７号竪穴住居跡出土遺物実測図　18

第17図　８号竪穴住居跡出土遺物実測図　18

第18図　９号竪穴住居跡実測図　……19

第19図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図（1）19

第20図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図（2）20

第21図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図 20

第22図　10号竪穴住居跡実測図　……20

第23図　12号竪穴住居跡実測図　……21

第24図　12号竪穴住居跡出土遺物実測図（1）　22

第25図　12号竪穴住居跡出土遺物実測図（2）　23

第26図　13号竪穴住居跡実測図　……24

第27図　13号竪穴住居跡出土遺物実測図（1）　24

第28図　13号竪穴住居跡出土遺物実測図（2）　25

第29図　14号竪穴住居跡実測図　……25

第30図　14号竪穴住居跡出土遺物実測図 25

第31図　15号竪穴住居跡実測図　……26

第32図　16号竪穴住居跡実測図　……26

第33図　17号竪穴住居跡出土遺物実測図 27

第34図　17号竪穴住居跡実測図　……28

第35図　周溝状遺構実測図　……29

第36図　周溝状遺構出土遺物実測図　……29

第37図　土壙墓出土遺物実測図　……30

第38図　土壙墓実測図　……30

第39図　溝状遺構配置図　……31

第40図　１号溝出土遺物実測図　……31

第41図　１・３・４号溝実測図　……32

第42図　３号溝出土遺物実測図　……33

第43図　１号溝配石実測図　……33

第44図　２・８・９・10号溝実測図　……34

第45図　石組土坑実測図　……35

第46図　５・６・７号溝実測図　……36

第47図　井戸状遺構実測図　……37

第48図　井戸状遺構出土遺物実測図（1）38

第49図　井戸状遺構出土遺物実測図（2）39

第50図　その他の遺物実測図　……40

第４章　上野第２遺跡

第51図　上野第２遺跡調査区位置図　……65

第52図　上野第２遺跡周辺地形図　……66

第53図　上野第２遺跡遺構配置図　……67

第54図　上野第２遺跡埋葬遺構配置図　…68

第55図　1号竪穴住居跡実測図……69

第56図　2号竪穴住居跡実測図……70

第57図　2号竪穴住居跡炉跡実測図……70

第58図　3・4号竪穴住居跡実測図　……71

第59図　4号竪穴住居跡出土遺物実測図…71

第60図　5号竪穴住居跡実測図……71

第61図　土坑出土遺物実測図　……73

第62図　土坑実測図（1号土坑～9号土坑）　…74

第63図　土坑実測図

（10.11.13.14.15号土坑）　……75

第64図　３号土壙墓出土遺物実測図　……76

第65図　土壙墓実測図　……77

第66図　１号甕棺墓実測図　……78

第67図　１号甕棺実測図　……79

第68図　２号甕棺墓実測図　……80

第69図　２号甕棺実測図　……81

第70図　３号甕棺墓実測図　……82

第71図　３号甕棺実測図　……83

第72図　４号甕棺墓実測図　……84

第73図　４号甕棺実測図　……85

第74図　５号甕棺墓実測図 ……86
第75図　５号甕棺実測図 ……87
第76図　６号甕棺墓実測図 ……88
第77図　６号甕棺実測図 ……88
第78図　７号甕棺墓実測図 ……89
第79図　７号甕棺実測図 ……89
第80図　８号甕棺墓実測図 ……90
第81図　８号甕棺実測図 ……91
第82図　９号甕棺墓実測図 ……92
第83図　９号甕棺実測図 ……93
第84図　10号甕棺墓実測図 ……94
第85図　10号甕棺実測図 ……95
第86図　11号甕棺墓実測図 ……96
第87図　11号甕棺実測図 ……97
第88図　その他の甕棺実測図（1） ……98
第89図　その他の甕棺実測図（2） ……99
第90図　1号掘立柱建物跡実測図 ……101
第91図　1号掘立柱建物跡出土遺物実測図 …102
第92図　2号掘立柱建物跡実測図 ……102
第93図　3号掘立柱建物跡実測図 ……103
第94図　4号掘立柱建物跡実測図 ……103
第95図　5号掘立柱建物跡実測図 ……104
第96図　12号土坑実測図 ……105
第97図　12号土坑出土遺物実測図 ……106

表　目　次

第１章　はじめに
第１表　日田バイパス埋蔵文化財調査の経過 …3

第２章　地理的歴史的環境
第２表　日田市主要遺跡名……8

第３章　寺内遺跡
第３表　寺内遺跡竪穴一覧表 ……42
第４表　寺内遺跡出土遺物観察表（1） …44
第５表　寺内遺跡出土遺物観察表（2） …45
第６表　寺内遺跡出土遺物観察表（3） …46
第７表　寺内遺跡出土遺物観察表（4） …47
第８表　寺内遺跡出土遺物観察表（5） …48

第４章　上野第２遺跡
第９表　4号竪穴住居跡出土遺物観察表…71
第10表　土坑出土遺物観察表 ……73
第11表　３号土壙墓出土遺物観察表 ……76
第12表　甕棺観察表……100
第13表　1号掘立柱建物跡出土遺物観察表　102
第14表　12号土坑出土遺物観察表 ……107

カ　ラ　ー　図　版　目　次

巻頭
上野第２遺跡調査区全景（南東より）
寺内遺跡出土青磁碗

第３章　寺内遺跡
カラー図版１　寺内遺跡A調査区全景 ……51
寺内遺跡中世墓……51

第４章　上野第２遺跡
カラー図版２　上野第２遺跡調査区全景…111
甕棺墓群と土壙墓 ……111

挿入写真目次

第４章　上野第２遺跡
写真１　１号甕棺墓……78
写真２　２号甕棺墓……80
写真３　３号甕棺墓……82
写真４　４号甕棺墓……84
写真５　５号甕棺墓……86
写真６　６号甕棺墓……87
写真７　７号甕棺墓……89
写真８　８号甕棺墓……90
写真９　９号甕棺墓……92
写真10　10号甕棺墓……84
写真11　11号甕棺墓……96

写真図版目次

第３章寺内遺跡
図版１　１号竪穴跡……52
２号竪穴跡……52
３号竪穴跡……52
図版２　３号竪穴跡遺物出土状況……53
４・５・６号竪穴跡……53
７・８号竪穴跡……53
図版３　９号竪穴跡……54
10号竪穴跡……54
12号竪穴跡……54
図版４　12号竪穴跡遺物出土状況……55
13号竪穴跡……55
13号竪穴跡遺物出土状況……55
図版５　14号竪穴跡……56
16号竪穴跡……56
17号竪穴跡……56
図版６　周溝状遺構（北から）……57
周溝状遺構（東から）……57
中世土壙墓青磁椀出土状況……57
図版７　１・３・４号溝……58
石組土坑……58
５・６・７号溝……58
図版８　寺内遺跡出土遺物１……59
図版９　寺内遺跡出土遺物２……60
図版10　寺内遺跡出土遺物３……61
図版11　寺内遺跡出土遺物４……62
図版12　寺内遺跡出土遺物５……63
図版13　寺内遺跡出土遺物６……64
第４章　上野第２遺跡
図版14　１号竪穴住居跡と１号火葬墓…112
２号竪穴住居跡……112
３号竪穴住居跡と
４号竪穴住居跡検出状況……112
図版15　４号竪穴住居跡……113
２号竪穴炉跡……113
１号土抗……113
図版16　３号土抗……114
６・７号土抗……114
８号土抗……114
図版17　土壙墓と10号土坑……115
石鏃出土状況……115
1号掘立柱建物跡……115
図版18　２号掘立柱建物跡……116
３号掘立柱建物跡……116
４号掘立柱建物跡と12号土抗　116
図版19　掘立柱建物跡……117
12号土坑遺物出土状況……117
図版20　上野第２遺跡出土遺物１……118
図版21　上野第２遺跡出土遺物２……119
図版22　上野第２遺跡出土遺物３……120
図版23　上野第２遺跡出土遺物４……121

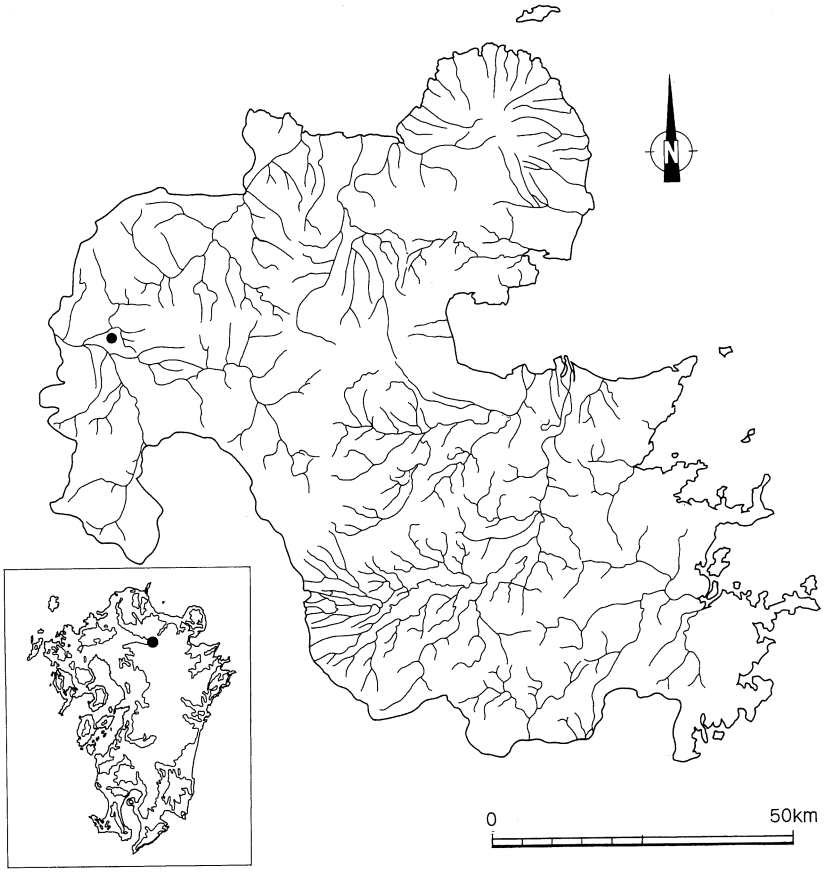
第１章　はじめに

第１節　調査にいたる経過

一般国道210号は、福岡県久留米市を起点とし、大分県日田市を経て大分市にいたる九州中部を横断する主要幹線道路である。しかし交通渋滞が激しいために幹線道路としての機能は低下しつつあった。特に日田市内では、九州横断自動車道の開通にともなう交通量の増加と、沿道の都市化の進行により、それは現実のものとなりつつあった。

このような事態に対応して計画されたのが日田バイパスであり（第２図）、建設省九州地方建設局（現国土交通省九州地方整備局）大分工事事務所により1977（昭和52）年度に事業着手された。計画区間は日田市大字石井字串川から大字日高字小ケ瀬にいたる延長5．3kmである。1987（昭和62）年度からは用地着手がおこなわれ、さらに1988（昭和63）年度には工事に着手し、東半分の延長3.1kmについては1993（平成5）年12月3日に完成し、供用を開始した。

大分県教育委員会では、日田バイパスの路線が遺跡の存在する可能性の高い台地上を貫くことと、この地域が奈良時代には石井駅がおかれ古代官道にあたる可能性があることから、路線内の遺跡の保存措置が必要と判断し、建設省九州地方建設局大分工事事務所と協議を開始した。そして、1987年1月に路線内の遺跡分布調査を実施し、その結果、大部遺跡(1)、手崎遺跡(2)、琴平山遺跡(3)、高瀬深ノ田遺跡(4)、陣ヶ原辻原遺跡(5)、上野第１遺跡(6)、上野第２遺跡(7)、寺内遺跡(8)、護願寺遺跡(9)の9遺跡（第２図）について発掘調査を実施することになった。今回は、そのうち上野第2遺跡（7)、寺内遺跡（8）の２遺跡について報告する。



第１図　寺内・上野第２遺跡位置図（1/125万）

第２節　埋蔵文化財調査の経過と調査組織

第1表を参考にしながら年度をおって日田バイパスの埋蔵文化財調査の経過を述べる。

1988（昭和63）年度　本年度は日田バイパス関連の発掘調査の初年度である。まず用地買収の終了した高瀬遺跡(4)の試掘調査を実施した。

1989（平成元）年度　前年度に続き高瀬深ノ田遺跡(4)の本調査と琴平山遺跡(3)、陣ヶ原辻原遺跡(5)、上野第１遺跡(6)の試掘調査を行なった。『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』を刊行した。

1990（平成２）年度　陣ヶ原辻原遺跡(5)、上野第１遺跡(6)東原地区の本調査と工事用道路に関って誠和神社裏遺跡と後藤家墓地の確認調査を行なった。上野第１遺跡では「豊馬豊馬」の文字を刻んだ石の重りが出土した。この年の調査概要は『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』に収められている。

1991（平成３）年度　本年度は上野第１遺跡(6) 野間地区の試掘調査と大部遺跡(1)、手崎遺跡(2)の本調査を行ない、『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』を刊行した。

1992（平成４）年度　上野第１遺跡(6)米田地区の試掘調査と上野第１遺跡(6)東原地区・野間地区・平原地区の本調査を行なった。この年の調査概要は『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』に収められている。

1993（平成５）年度　本年度は上野第１遺跡(6)米田地区・平原地区、手崎遺跡(2)の本調査と上野第２遺跡(7)の一部試掘調査を行ない、『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』を刊行した。

1994（平成６）年度　本年度は整理作業を行ない、高瀬深ノ田遺跡(4)、陣ヶ原辻原遺跡(5)、誠和神社裏遺跡と後藤家墓地の調査内容を収録した『日田市高瀬遺跡群の調査１』（「一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」を刊行した。

1995（平成７）年度　この年も引き続き調査報告書刊行に向けて整理作業を行なった。

1996（平成８）年度　本年度は１月に寺内遺跡(8)の試掘調査を実施した。弥生時代と考えられる竪穴住居跡が認められたため、引き続き本調査に入り３月をもって本年度分の調査を終了した。また、大部遺跡(1)、手崎遺跡(2)の整理作業も継続して行なわれた。

調査組織は以下のとおりである。

調査主体　大分県教育委員会　田中恒治（教育長）
調査総括　後藤一郎（教育庁文化課課長）
調査主任　渋谷忠章（教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第2係係長）
調査担当　高橋　徹（　　同　　副主幹）
整理担当　田中裕介（　　同　　主査）

第１表　日田バイパス埋蔵文化財調査の経過

No.	遺跡名	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	備考
1	大部				▲●				◆	◆	■					
2	手崎															
3	琴平山		▲													試掘調査のみで終了
4	高瀬	▲	●					◆■								高瀬深ノ田遺跡と改名
5	陣ケ原		▲	●				◆■								陣ケ原辻遺跡と改名
	誠和神社裏			▲●				◆■								工事用道路
	後藤家墓地			○				◆■								工事用道路、確認調査のみ
6	上野第１		▲	●	▲	●	●		◆	◆	◆					
7	上野第２					▲								▲●	■	
8	寺内									▲	●				■	
9	護願寺												▲			試掘調査のみで終了
	概報			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ								
	本報告							Ⅰ			Ⅱ			Ⅲ	Ⅳ	

1997（平成９）年度　引き続き寺内遺跡(8)の本調査を実施した。弥生・古墳時代の竪穴跡や中世の土坑墓などが確認された。また、大部遺跡(1)、手崎遺跡(2) の調査内容を収録した『日田市高瀬遺跡群の調査２』「一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」を刊行した。

この年度の調査組織は以下のとおりである。

調査主体　大分県教育委員会　田中恒治（教育長）
調査総括　後藤一郎（教育庁文化課課長）
　　田原基之（　　同　参事兼課長補佐）
調査主任　清水宗昭（教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財第2係係長）
調査担当　松本康弘（　　同　　主任）
整理担当　田中裕介（　　同　　主査）
調 査 員　永井　実（　　同　　主任）

1998（平成10）年度　本年度から上野第１遺跡(6)の報告書刊行に向けて整理作業を始めた。

1999（平成11）年度　昨年度に続き、上野第１遺跡(6)の報告書刊行に向けて整理作業を行なった。

2000（平成12）年度　本年度は６月に上野第２遺跡(7)の試掘調査を実施し、弥生時代の甕棺墓を検出したため、10月から本調査に着手し、甕棺墓群や奈良時代と考えられる掘立柱建物などを調査し、12月をもって終了した。

また、上野第１遺跡(6) の調査内容を収録した『日田市高瀬遺跡群の調査３』（「一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」を刊行した。

調査組織は以下のとおりである。

調査主体　大分県教育委員会　田中恒治（教育長）
調査総括　山本芳直（教育庁文化課課長）
　　伊藤正行（　　同　　参事兼課長補佐）
　　清水宗昭（　　同　　参事兼課長補佐）

調査主任　栗田勝弘（教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第2係係長）
調査担当　村上久和（　　同　　副主幹）
　　山本恭弘（　　同　　主査）
整理担当　田中裕介（　　同　　主査）
調 査 員　松本康弘（　　同　　主査）
　　衛藤麻衣（　　同　　嘱託）
　　野崎哲司（　　同　　嘱託）
　　野口典良（　　同　　嘱託）

2001（平成13）年度　今年度は遺物の整理作業を行ない、上野第２遺跡(7)、寺内遺跡(8)の調査内容を収録した『日田市高瀬遺跡群の調査４』（「一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ」の印刷を発注した。

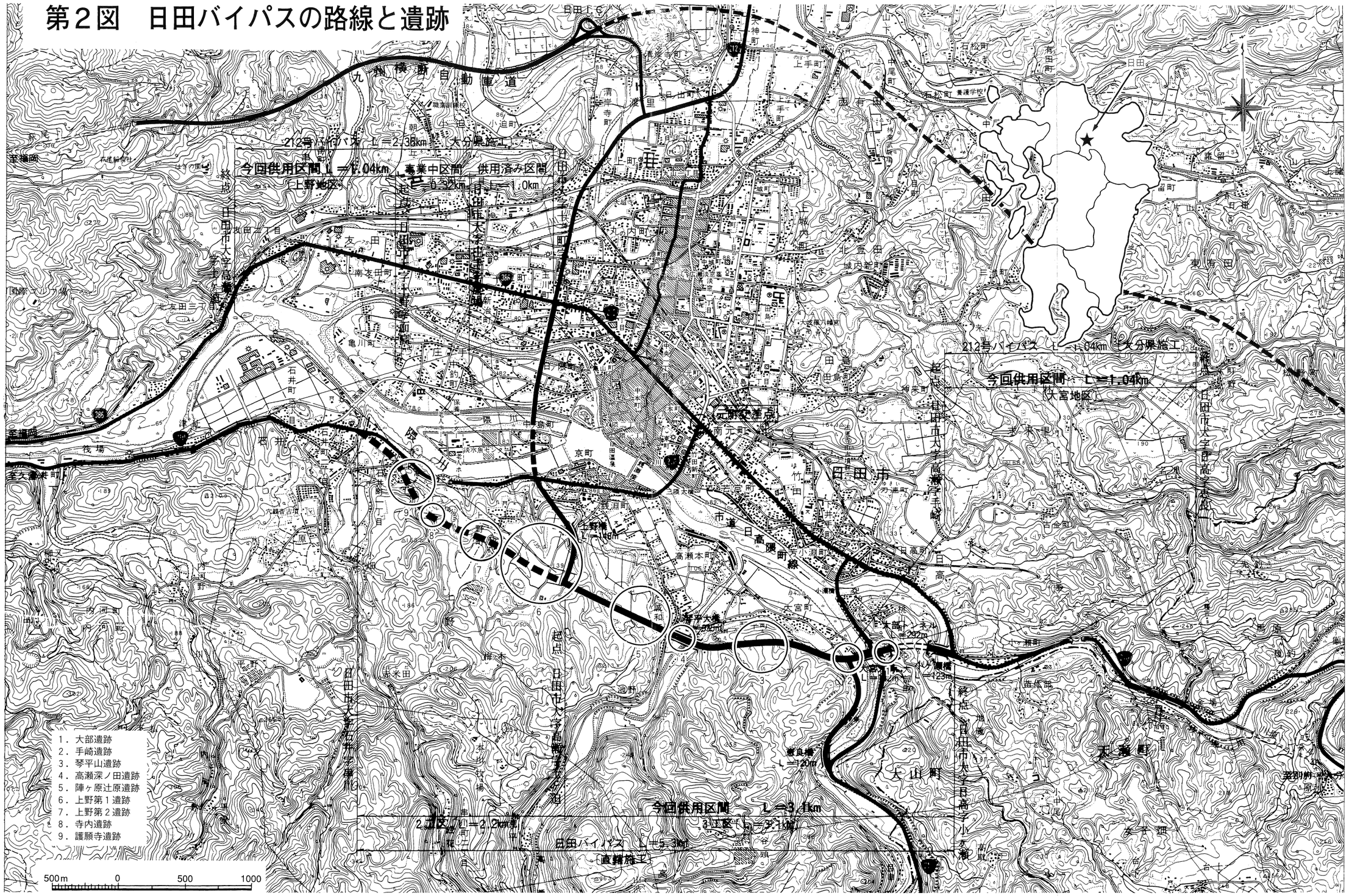
今年度の、調査組織は以下のとおりである。

調査主体　大分県教育委員会　石川公一（教育長）
調査総括　工藤正徳（教育庁文化課課長）
　　麻生祐二（　　同　　参事兼課長補佐）
　　清水宗昭（　　同　　参事兼課長補佐）
調査主任　栗田勝弘（教育庁文化課受託事業担当主幹）
整理担当　高橋　徹（　　同　　一般事業担当主幹）
　　山本恭弘（　　同　　受託事業担当主査）
　　松本康弘（　　同　　主査）

≪参考文献≫

田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査１』（一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ）1995　大分県教育委員会
田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査２』（一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ）1998　大分県教育委員会
田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査３』（一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ）2001　大分県教育委員会

第２図　日田バイパスの路線と遺跡



第２図　日田バイパスの路線と遺跡

第２章　地理的歴史的環境

寺内遺跡、上野第２遺跡が所在する日田市は、大分県の北西部に位置し、福岡県と県境を接する。周囲を一尺八寸山や五条殿、月出山岳等の山岳に囲まれた盆地を形成している。盆地中央部を東から西に流れる三隈川は、玖珠川、大山川や花月川などと市内で合流し、福岡県へと入り、九州最大の河川となる筑後川となる。このため水系的に北部九州とのつながりが強い。日田盆地中心部はこの三隈川と多数の支流によって沖積地を形成しており、盆地の周囲を取り巻く山岳は、新第3紀層を基盤とする筑紫溶岩により形成され、標高200～300mの高地は耶馬渓溶岩、盆地に面した150m前後の台地は阿蘇溶結凝灰岩で形成されている。寺内遺跡はこの阿蘇溶結凝灰岩の低位段丘面に、また上野第２遺跡は中位段丘面にそれぞれ立地している。日田市はこの三隈川の周囲に開けた地域を中心としており、西に筑後川を下ると福岡県杷木・朝倉へ、東に遡ると玖珠盆地にいたる。大山川を南へ遡ると熊本県小国町から阿蘇へ、北の大石峠を越えると豊前平野へと至る。このように日田は、豊前・豊後・筑前・筑後・肥後にいたる交通の要所に位置し、そのため江戸時代には九州を統括する西国郡代が置かれていた。

ここ日田市は、県下でも有数の遺跡密集地として知られているが、遺跡の大多数は台地やその周辺の低丘陵上に集中している。まず旧石器時代の遺物は日田市内各所で採集されており、寺内遺跡、上野第２遺跡の所在する三隈川南岸地域でも、長者原遺跡、平野遺跡、手崎遺跡で確認されている。縄文時代になると遺跡の数も増え、長者原遺跡のほか日田バイパス関連だけでもの手崎遺跡、大部遺跡、誠和神社裏遺跡、上野第２遺跡でも遺物が知られている。

弥生時代になると盆地周辺の台地や河川に沿って多く発見される。なかでも吹上遺跡や小迫辻原遺跡、後迫遺跡等の大集落遺跡が台地上に出現するようになる。高瀬深ノ田遺跡、陣ヶ原辻原遺跡や上野第２遺跡など日田バイパス関連遺跡も同様に沖積地を見下ろす台地上に立地している。

古墳時代になると有田川の微高地上に諸留遺跡の集落跡や、台地上に草場第２遺跡や小迫墳墓群等の墓地群がある。古墳時代後期になると天満１・２号墳や有田古墳など前方後円墳が築かれている。三隈川南岸地域でも寺内遺跡の背後に護願寺１・２・３号墳が築かれ、その後装飾を持つガランドヤ古墳群、穴観音古墳が出現する。

古代・中世になると、律令国家によって一括して西海道豊後国日田郡に編成されている。『豊後国風土記』には5郷の存在が記載されており、『倭名類衆抄』の記載と照合すると在田・夜開・亘理・刃連・石井の5郷であったことがわかる。この5郷は古墳時代以来の地域集団の名残りを留めていると考えられている。今回発掘調査した高瀬地区はそのうち石井郷に含まれ、石井には駅が置かれていたことから、古代官道がこの地区にあった可能性は高い。それを示すかのように手崎遺跡・陣ヶ原辻原遺跡・上野第１遺跡・上野第２遺跡・長者原田迎遺跡(註1)等奈良時代の遺跡が点在している。またこの時期に整備したと思われる日田条里跡の遺構が存在する。盆地内の条里遺構は三隈川から花月川の左岸に展開している地割りで、現在でもおおよその様相は残しているが、三隈川南岸では高瀬条里がある他は明確な条里はない。近世になると、毛利高政等により一時期、大名支配領となるが近世のほとんどを幕府直轄領（天領）として、九州の地理上のみならず政治的中心地としての役割を担ってきた。

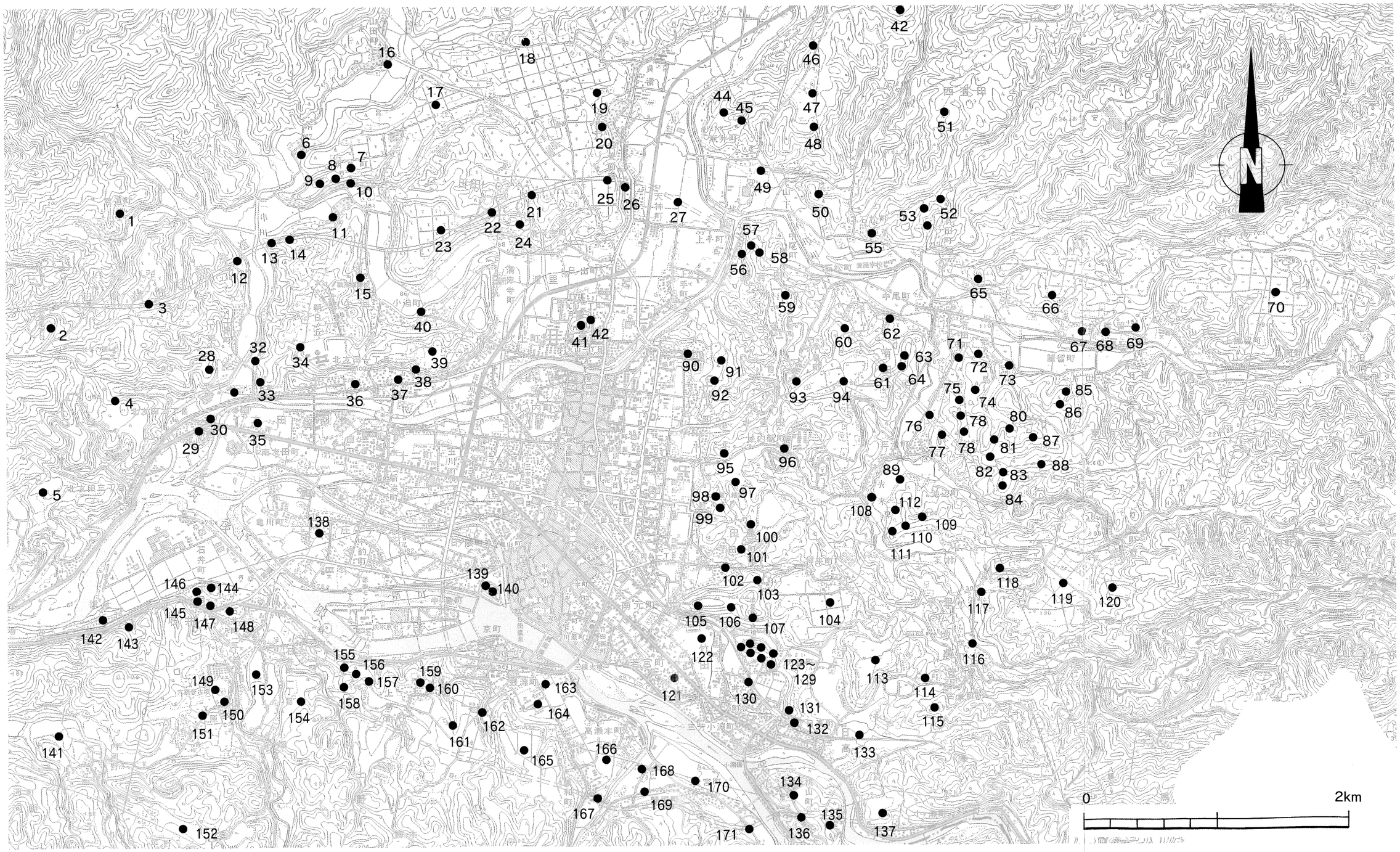
現在の日田市は、1868（明治元）年、明治新政府により日田県となる。しかし、1872（明治4）年大分県の成立とともに、日田県は廃止となり、大分県に編入される。1940（昭和15）年には市制施行によって日田市となり現在に至っている。

註１「長者原田迎遺跡」『日田市埋蔵文化財調査報告書第５集』日田市教育委員会　1992

以上の記述にあたっては特に次の文献を参照した。
『日田市史』日田市　1990
『大分県の地名』日本歴史地名体系45　平凡社　1995
『日田市高瀬遺跡群の調査１』大分県教育委員会　1995

第２表　日田市主要遺跡名

番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名
1	君迫遺跡	44	縫ノ迫１号墳	87	平島横穴群	130	上井手遺跡
2	萩尾遺跡	45	縫ノ迫２号墳	88	片山原遺跡	131	平松遺跡
3	二串西原遺跡	46	葛原古墳	89	森ノ元遺跡	132	東寺横穴群
4	穴原遺跡	47	有田葛原遺跡	90	慈眼山瀬戸口遺跡	133	日高遺跡
5	大見取遺跡	48	寺坂古墳	91	大蔵古城跡	134	千人塚１号墳
6	中ノ前遺跡	49	峰崎遺跡	92	丸山古墳	135	千人塚２号墳
7	朝日宮ノ原遺跡	50	大行司遺跡	93	水目横穴群	136	大部遺跡
8	天満１号墳	51	西有田赤ハゲ遺跡	94	中尾原遺跡	137	小ケ瀬遺跡
9	天満２号墳	52	有田１号墳	95	塚原遺跡	138	徳瀬遺跡
10	天神山横穴群	53	有田古墳	96	湯尻遺跡	139	日隈古墳
11	尾部田遺跡	54	上柳遺跡	97	赤迫遺跡	140	日隈城跡
12	山ノ神（二串）遺跡	55	京田遺跡	98	大波羅遺跡	141	落久保遺跡
13	小迫古墳	56	夕田遺跡	99	薬師堂山遺跡	142	津辻１号墳
14	小迫横穴群	57	夕田横穴墓群	100	丸尾神社古墳	143	津辻２号墳
15	森本遺跡	58	夕田古墳群	101	丸尾古墳	144	隈山遺跡
16	岩崎遺跡	59	佐寺原遺跡	102	会所宮古墳	145	ガランドヤ１号墳
17	山田原遺跡	60	堂園遺跡	103	田島（後山）古墳	146	ガランドヤ２号墳
18	谷ノ久保遺跡	61	大迫遺跡	104	元宮遺跡	147	ガランドヤ３号墳
19	用松原遺跡	62	宮ノ下遺跡	105	鳥羽塚古墳	148	尾園遺跡
20	用松中村古墳	63	中尾１号墳	106	会所山遺跡	149	穴観音古墳
21	草場第1遺跡	64	中尾２号墳	107	会所山古墳	150	倉園古墳
22	草場第2遺跡	65	小寒水遺跡	108	馬形遺跡	151	長者原遺跡
23	小迫辻原遺跡	66	須ノ原遺跡	109	倉迫遺跡	152	平野遺跡
24	本村遺跡	67	世尊寺遺跡	110	ガニタ１号墳	153	尾坪遺跡
25	後迫遺跡	68	城山遺跡	111	ガニタ２号墳	154	上野赤塚遺跡
26	羽野横穴群	69	城山古墳	112	ガニタ３号墳	155	護願寺１号墳
27	日田条里遺跡群	70	ハル遺跡	113	東寺原遺跡	156	護願寺２号墳
28	友田坂本遺跡	71	塔ノ本古墳	114	古金遺跡	157	護願寺３号墳
29	三郎丸遺跡	72	平島古墳	115	抹手遺跡	**158**	**寺内（護願寺）遺跡**
30	三郎丸古墳	73	平島遺跡	116	着来遺跡	159	上野姥塚古墳
31	大内田遺跡	74	祇園原遺跡	117	求来里平島遺跡	160	上野カクネ塚古墳
32	鳥越古墳	75	長迫遺跡	118	亀ノ甲遺跡	**161**	**上野遺跡**
33	片山石棺	76	尾漕遺跡	119	町野原遺跡	162	上野横穴群
34	向原遺跡	77	尾漕古墳	120	奥ノ迫遺跡	163	姫塚古墳
35	荻鶴遺跡	78	尾漕２号墳	121	柳ノ本遺跡	164	銭渕遺跡
36	今泉遺跡	79	狐迫遺跡	122	鬼塚古墳	165	陣が原辻原遺跡
37	岳林寺遺跡	80	石ケ迫遺跡	123	法恩寺１号墳	166	条里跡
38	北友田・吹上横穴群	81	クピリ遺跡	124	法恩寺２号墳	167	高瀬遺跡
39	吹上遺跡	82	有田塚ケ原遺跡	125	法恩寺３号墳	168	惣田塚古墳
40	鍛冶屋廻り遺跡	83	有田塚ケ原１号墳	126	法恩寺４号墳	169	惣田遺跡
41	月隈城跡	84	有田塚ケ原２号墳	127	法恩寺５号墳	170	大宮遺跡
42	月隈横穴群	85	クエト１号墳	128	法恩寺６号墳	171	手崎遺跡
43	芝尾遺跡	86	クエト２号墳	129	法恩寺７号墳	172	



第３図　日田市主要遺跡分布図

「平成７年３月　日田市役所発行『日田市全図1：25,000』より転載」

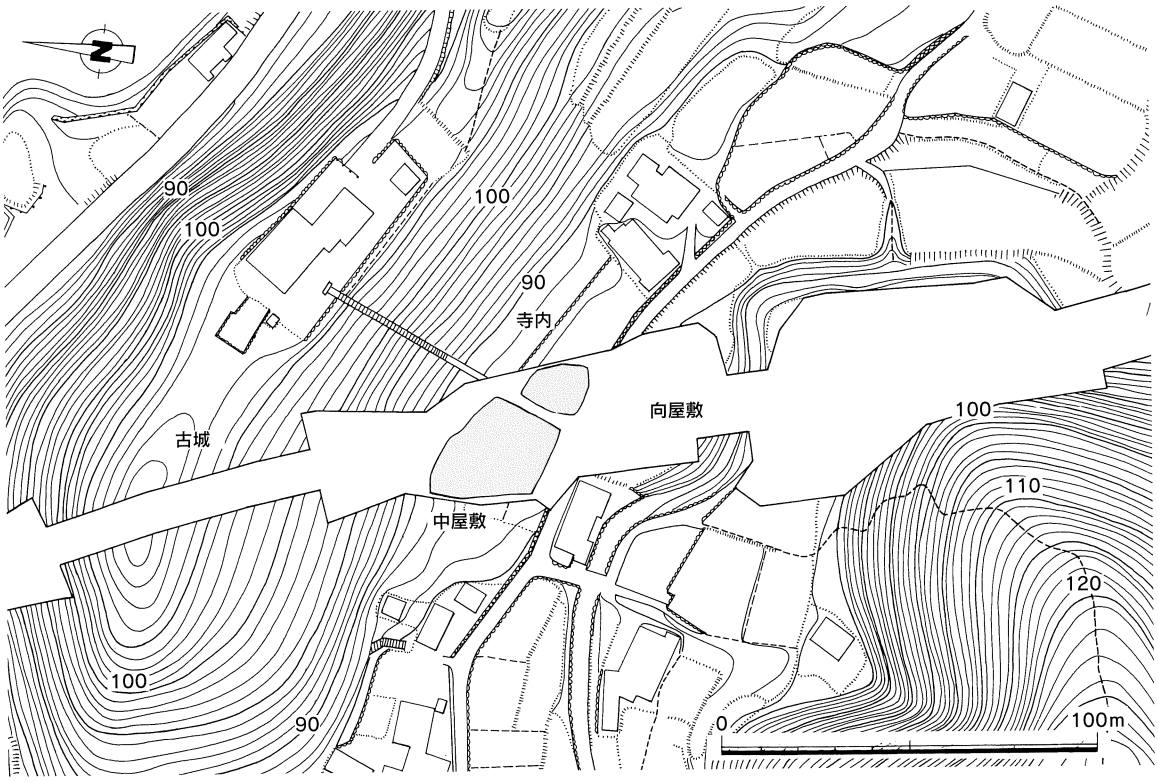
第３章　寺内遺跡

第１節　寺内遺跡の調査経過と概要

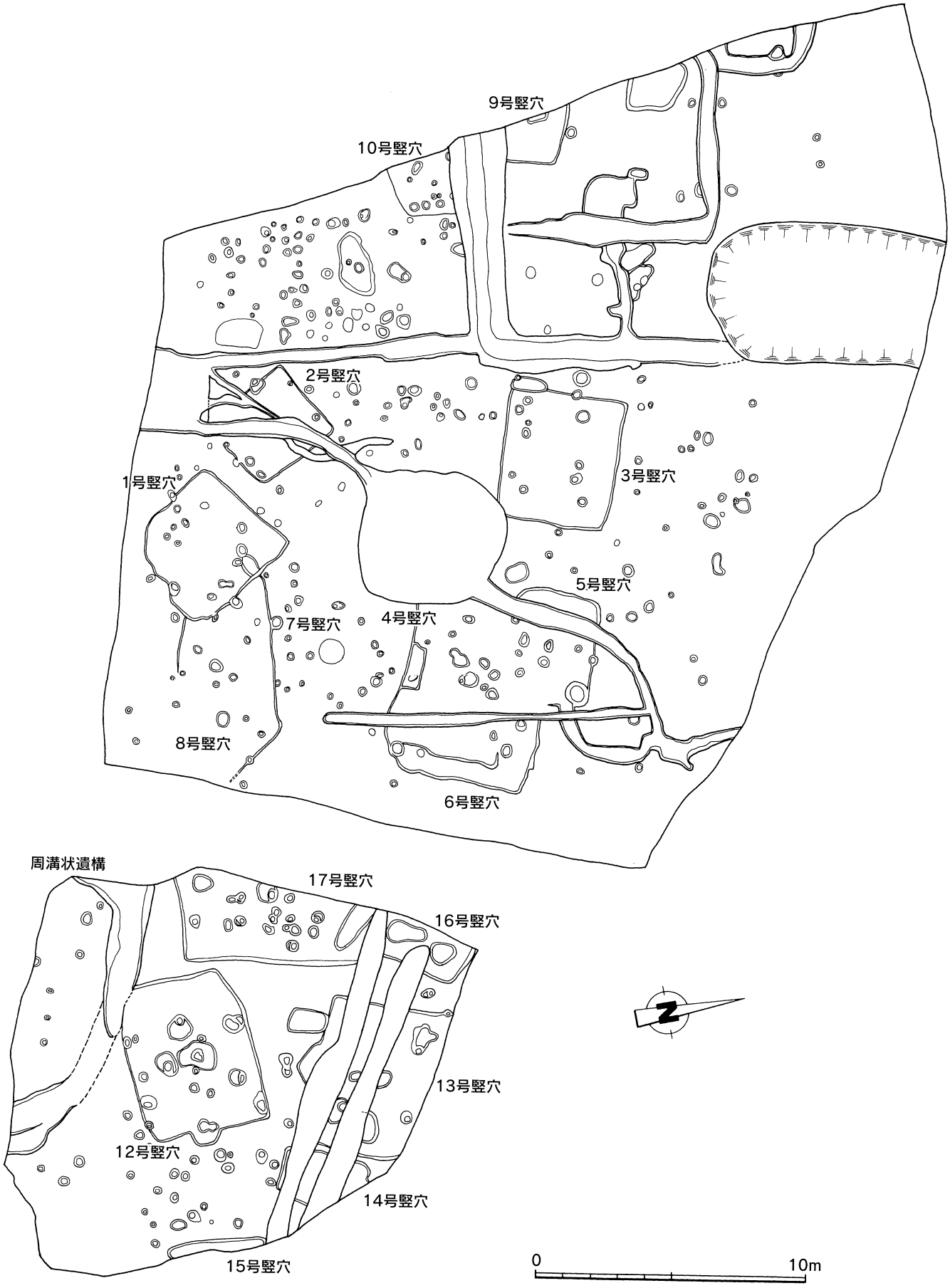
寺内遺跡は、東西に細長く延びる丘陵の狭小な舌状部に営まれた遺跡である。遺跡の南側には、近接して小河川が流れている。当該地区は、国道210号日田バイパスの建設に先立つ分布調査によって、遺跡が存在する可能性を指摘されていた。発掘調査は平成９年１月から始め、重機による表土剥ぎの結果、住居跡等の遺構が検出されたため引き続き本調査を実施することになった。調査面積はおよそ1,000㎡であるが、調査時点において遺跡を横切る護願寺の参道等が未買収であり、また排土の置き場所を確保する必要から、参道西側（A調査区）と東側（B調査区）を二年度に分けて調査することになった。すべての調査が完了したのは平成９年９月である。

本遺跡で検出された主な遺構は弥生～古墳時代の竪穴、中世の土壙墓、近世の家屋跡、小ピット群等である。竪穴遺構は大半が住居跡であるが、遺存状態が悪く、出土遺物の帰属も不確実なものがある。

調査に知見に拠れば、本遺跡で弥生時代後期前半～中頃に比定される３号竪穴住居跡、７号竪穴住居跡に始まり、弥生後期後半・終末、古墳時代初頭・前期と、連続して住居が営まれる。その後も６世紀後半（１号、８号竪穴住居跡）、７世紀と断続的ながら居住地として利用されている。ここで一旦人跡が途絶えるが、中世の土壙墓、あるいは近世の屋敷地として、折々に使われているようである。



第４図　寺内遺跡路線内位置図（1/2000）



第５図　寺内遺跡遺構配置図（1/200）

第２節　調査の成果

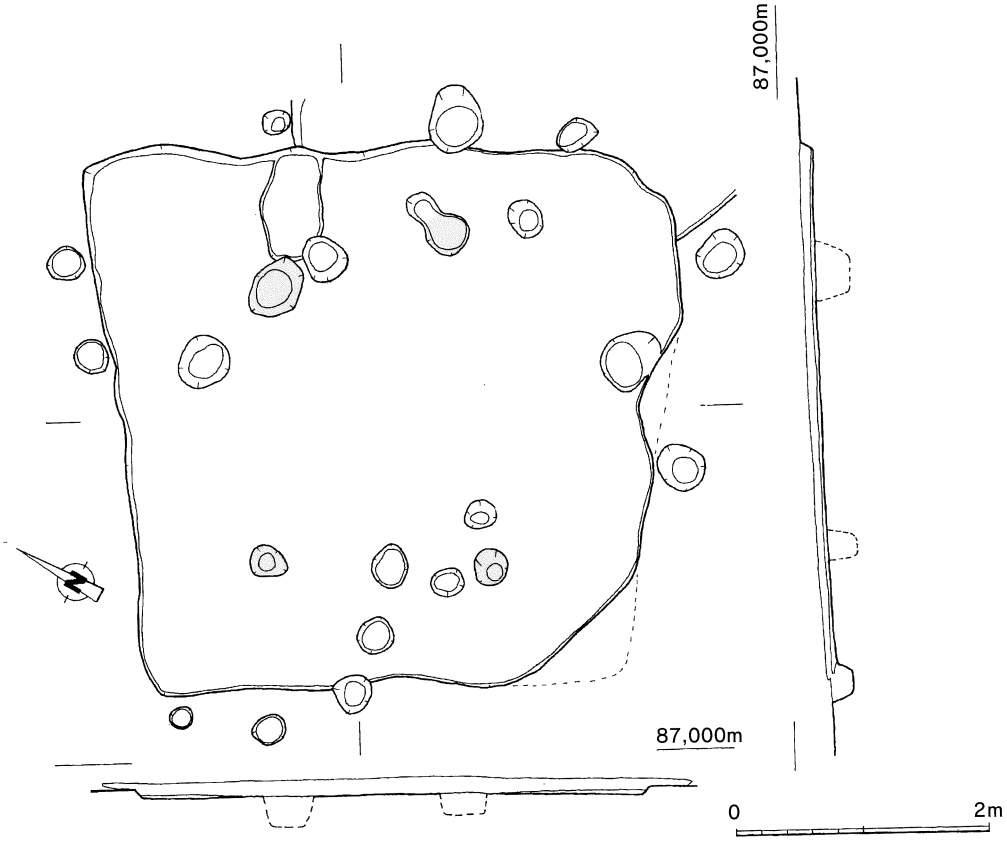
１.弥生時代から古代の遺構

（１）竪穴跡

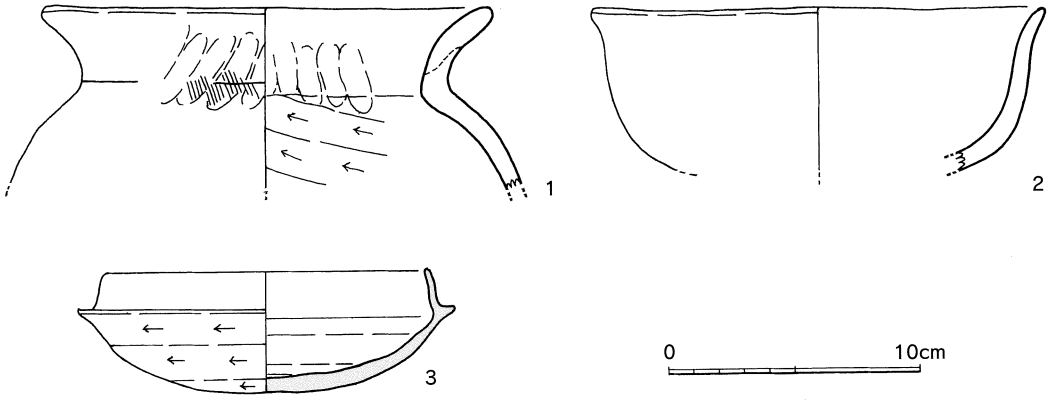
弥生・古墳時代の竪穴状遺構は全部で17基検出された。そのうち竪穴住居跡が11基で、残り６基は小竪穴である。

1）１号竪穴（第６図）

Ａ調査区南側で検出した６世紀後半の住居跡で、弥生時代の７号竪穴を切って作られている。南は地山が下がっているため検出面からの掘り込みが浅く平面形が崩れているが、元々は方形であったと考えられる。規模は南北4.3ｍ東西4.7ｍで床面までの深さは12cmである。床面施設としては柱穴が４本確認されている。深さは約25cmである。



第６図　１号竪穴実測図（1/60）

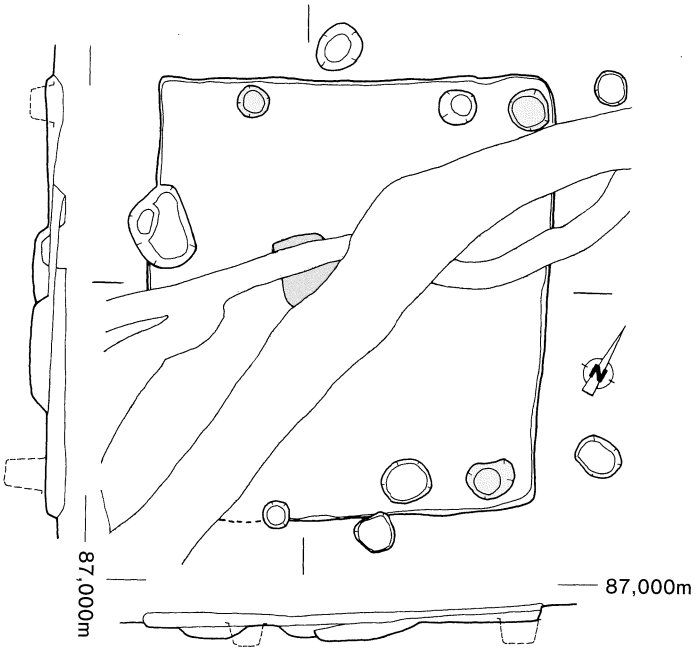


第７図　１号竪穴出土遺物実測図（1/3）

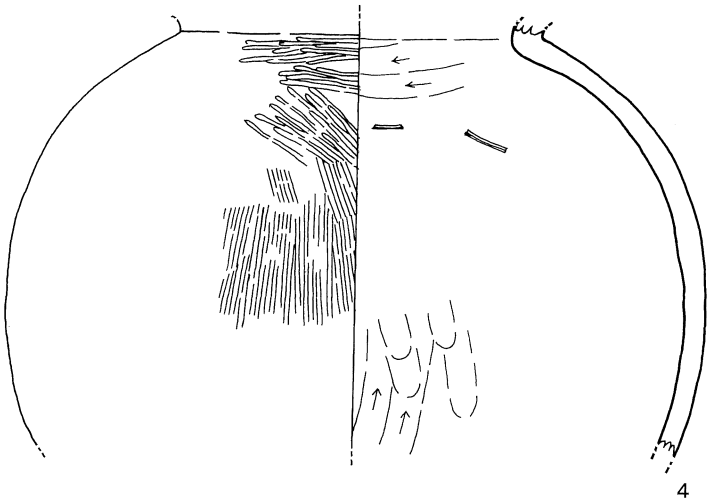
出土遺物（第７図）としては、１は甕形土器で内面にヘラ削り痕が認められる。復元口径は17.8cm。２は土師器坏で口縁部がゆるく外反する。復元口径は18.0cm。３は須恵器坏身で底部に回転ヘラ削り痕を残す。器高4.9cm、復元口径は12.6cm、復元受部径は14.8cmである。

2）２号竪穴（第８図）

Ａ調査区南側で近世の８号・９号・10号溝に切られた形で検出された５世紀前半の住居跡である。平面形は方形で、規模は南北3.5m東西3.1mで床面までの深さは15cmである。床面からは深さは約20cm～30cmの柱穴が３本と炉跡が確認されている。炉跡は直径50cm、深さ20cm。
ここからの出土遺物（第９図）として、４は甕形土器の胴部で丸く張っている。推定最大径は28.0cmで、外面に磨き痕が、また内面にヘラ削り痕がそれぞれ認められる。



第８図　２号竪穴実測図（1/60）　0　2m

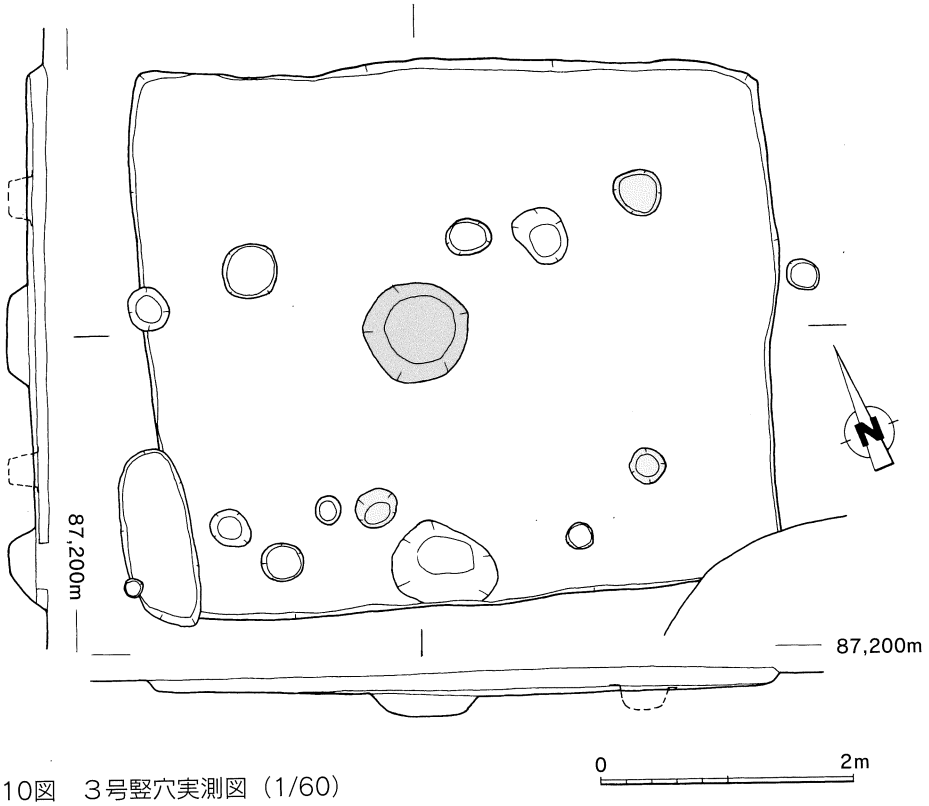


第９図　２号竪穴出土遺物実測図（1/3）　0　10cm

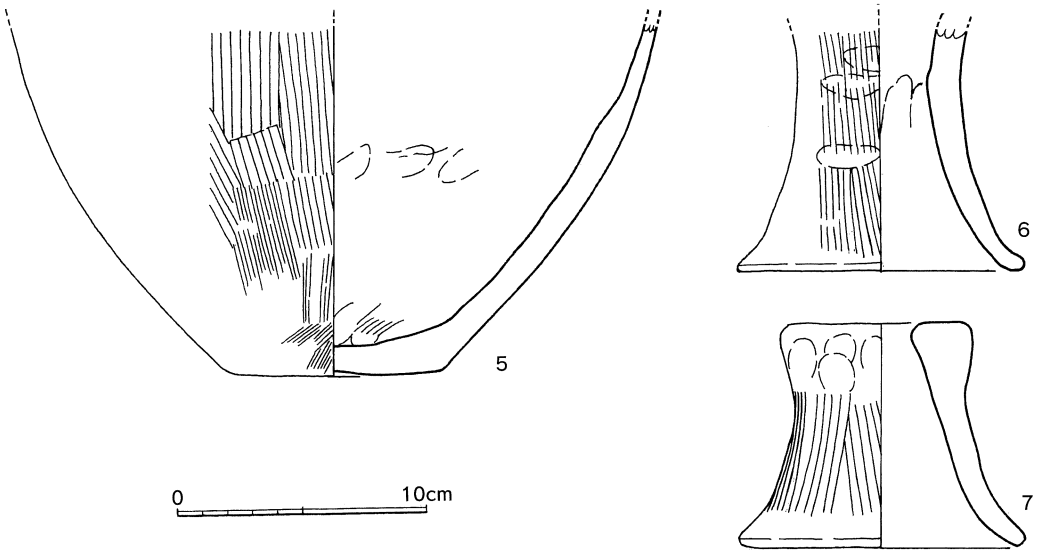
3) ３号竪穴（第10図）

Ａ調査区中央で確認された弥生時代後期前半から中頃の住居跡で、南東部を近世井戸跡に切られていた。規模は南北4.1ｍ東西4.8ｍで、平面形は方形を呈し、検出面から約20cmで平坦な床面に達する。床面の中央部には径　80cmの範囲で炉跡と考えられる焼土が検出された。。柱穴が３本確認されている。深さは約20cmである。

ここからの遺物（第11図）として、５は甕形土器の底部でやや丸みを帯びている。６，７は器台で、調整にはけ目や指頭痕が認められる。



第10図　３号竪穴実測図（1/60）

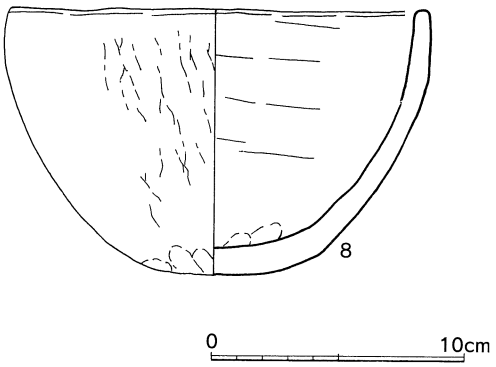


第11図　３号竪穴出土遺物実測図（1/3）

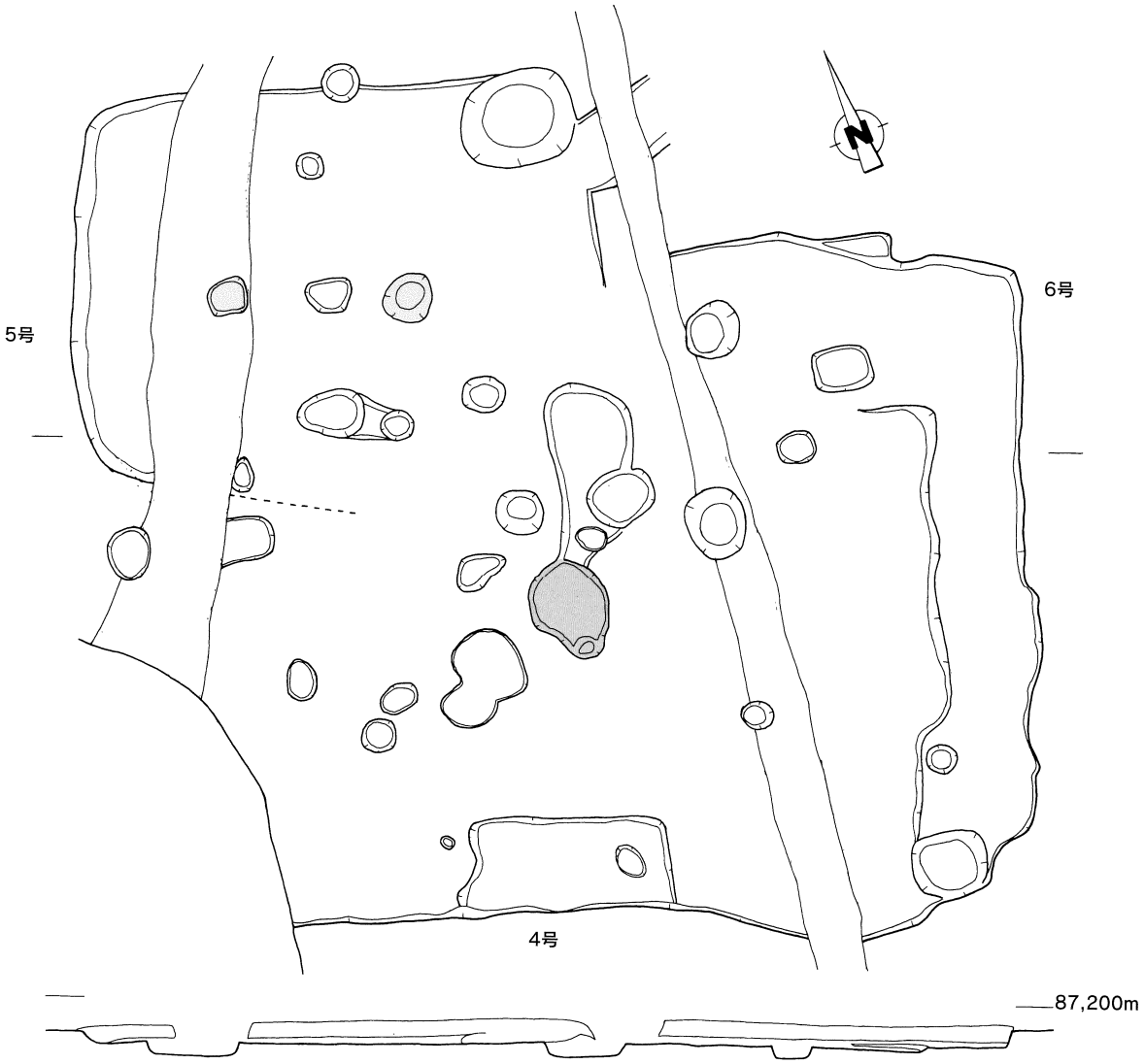
4）４号竪穴（第13図）

Ａ調査区東側で確認された住居跡で、５号竪穴と切りあい関係を持つ。南が４号竪穴、北が５号竪穴である。さらに上部を近世の５・７号溝によって撹乱されている。規模は南北4.2ｍ東西5.8ｍで、平面形は方形を呈し、検出面から約10cmで平坦な床面に達する。床面の中央部には径60cmの範囲で炭化物を多く含んだ土坑があり、炉跡と考えられる。主柱穴と断定できるものは確認されなかった。北側及び東側に幅１ｍ程のベッド状遺構をもつ。

遺物（第12図）８は本遺構の南壁に接する土坑から出土したもので、弥生時代後期終末の鉢形土器である。器高10.5cm、復元口径は16.4cm。



第12図　４号竪穴出土遺物実測図（1/3）

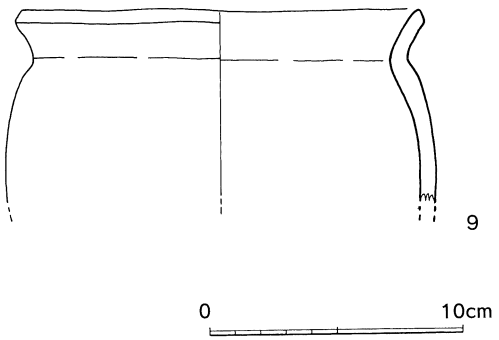


第13図　４・５・６号竪穴実測図（1/60）

0　2m

5）５号竪穴（第13図）

５号竪穴は４号竪穴の北側で切りあって検出された弥生時代後期中頃から後半の住居跡である。上部を近世の５号溝によって撹乱されている。規模は南北3.3m東西4.2mで、平面形は方形を呈し、検出面から約20cmで平坦な床面に達する。炉跡と考えられる土坑は確認されなかったが、主柱穴は２本検出でき、その深さは約50cmである。遺物（第14図）９は甕形土器で口縁部は「く」字状を呈して、若干立ち気味である。口径は15.4cm。



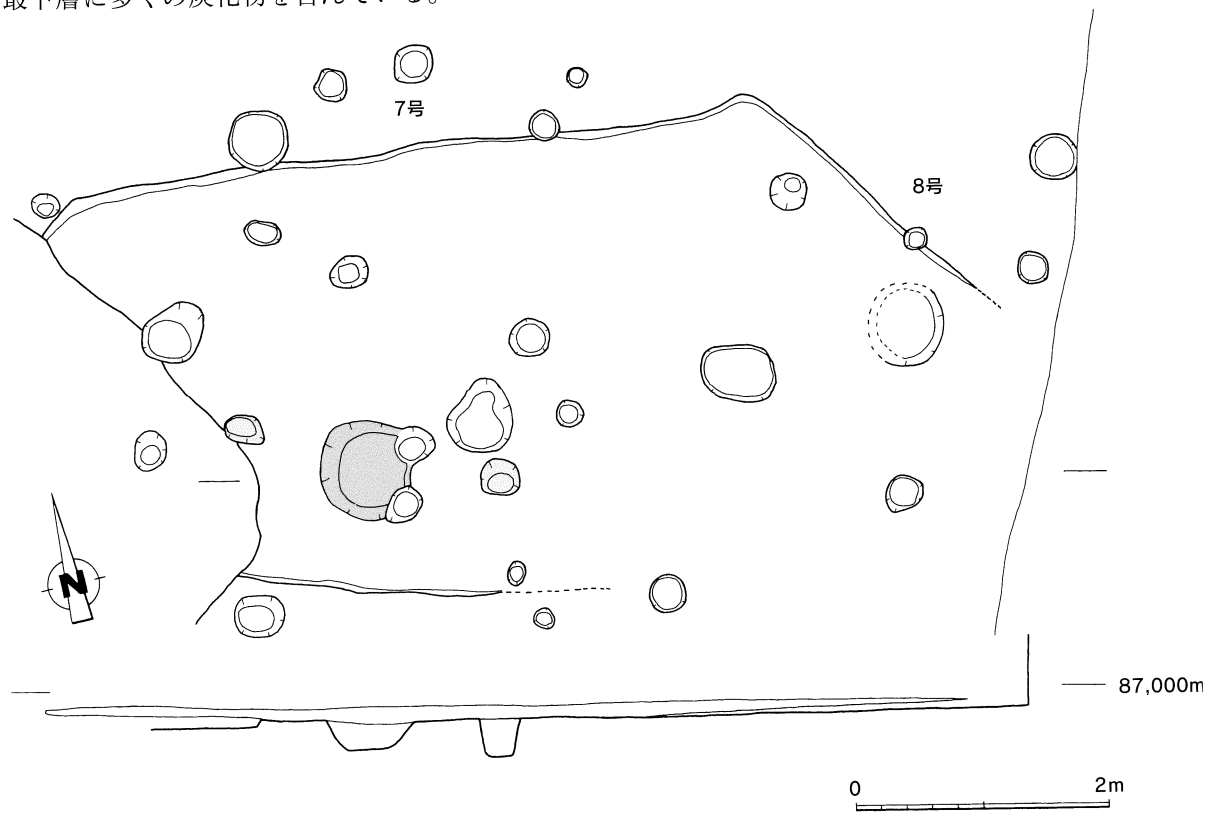
第14図　５号竪穴出土遺物実測図（1/3）

6）６号竪穴（第13図）

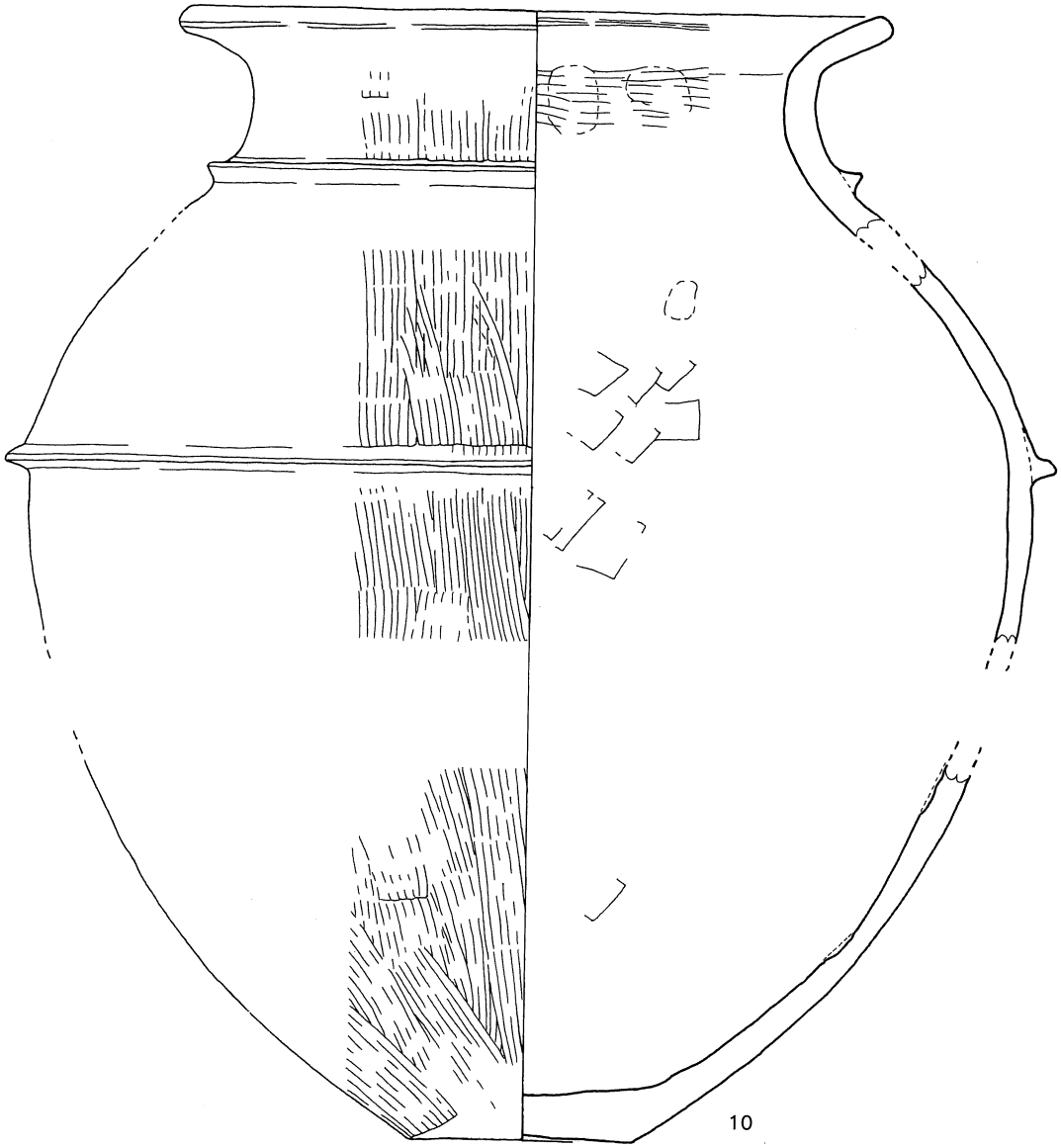
６号竪穴は当初中型竪穴として掘りすすんだが、４号竪穴の一部であると判断した。遺物は、弥生土器の小破片が出土したのみである。

7）７号竪穴（第15図）

Ａ調査区南東側で、西側を１号竪穴に切られ、東側では８号竪穴と切りあって検出された住居跡である。この遺構は検出面からの残りが浅く、平面形の確認は困難ではあったが、方形の住居跡と考えられる。規模は南北3.6m、東西5.4m以上で床面までの深さは15cmである。床面からは深さは約25cm～30cmの柱穴が２本と炉跡が確認されている。炉跡は直径60cm、深さ20cmで、埋土の最下層に多くの炭化物を含んでいる。



第15図　７・８号竪穴実測図（1/60）



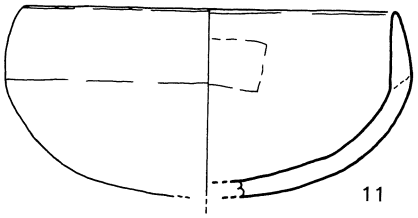
第16図　７号竪穴出土遺物実測図（1/3）

0　20cm

ここからの遺物（第16図）として、10、11は弥生時代後期前半から中頃の壷形土器で、頸部と体部に三角突帯を貼り付ける。復元口径は27.8cm、底部径は9.2cmである。外面にはけ目調整が施されており、頸部内面には指頭痕が認められる。

8）８号竪穴（第15図）

８号竪穴は７号竪穴と切りあって検出された遺構である。この遺構は検出面からの残りが浅く、平面形の確認は困難ではあった。確認できた規模は東壁2.7m以上ということだけで、他の壁は不明である。柱穴・炉跡は検出できず、位置は不明である。



0　10cm

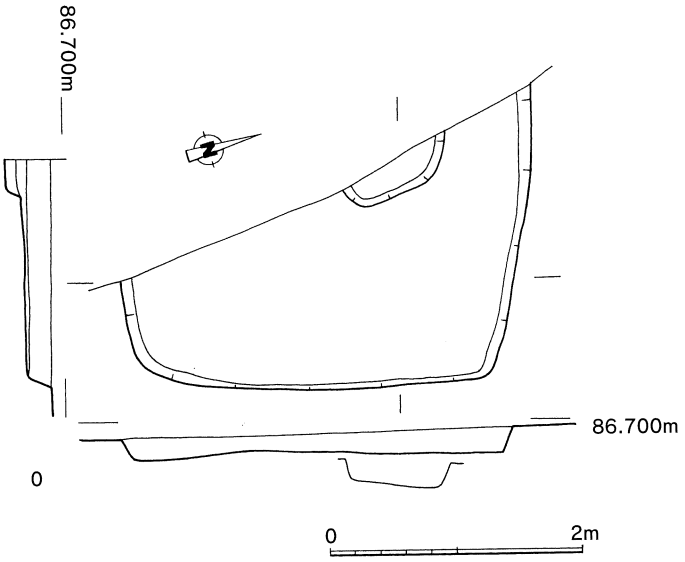
第17図　８号竪穴出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第17図）としては、11は土師器の椀形土器で内面にヘラ削り痕が認められる。復元口径は13.6cm。遺物から６世紀代の竪穴と考えられる。

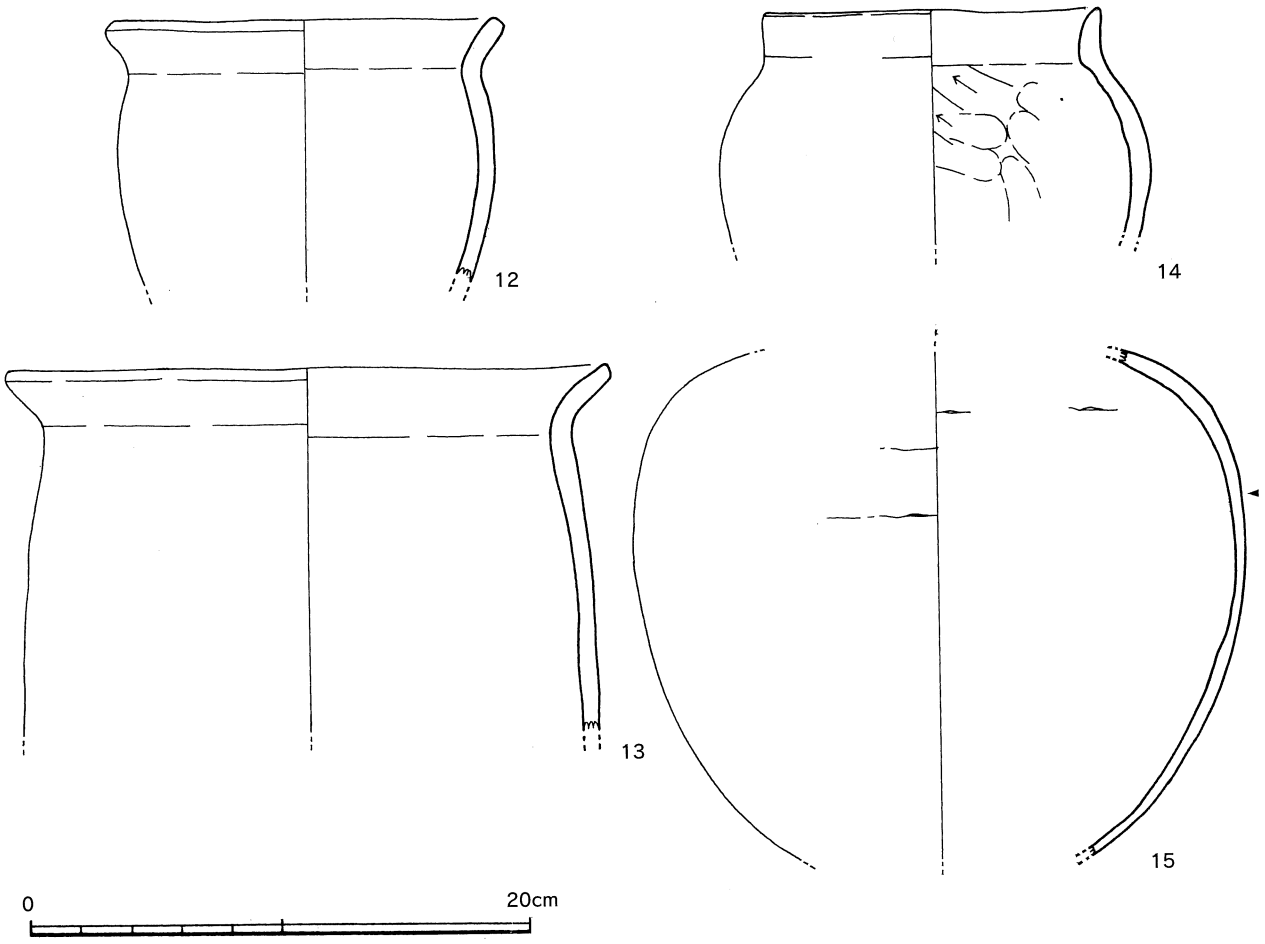
9）９号竪穴（第18図）

Ａ調査区西側で確認された遺構で、西半分は調査対象地外で調査できなかった。また南東部を近世１号溝に切られていた。確認できた規模は東壁3.0mのみで、他は不明である。平面形は隅丸方形と考えられる。検出面から約20cmで平坦な床面に達する。

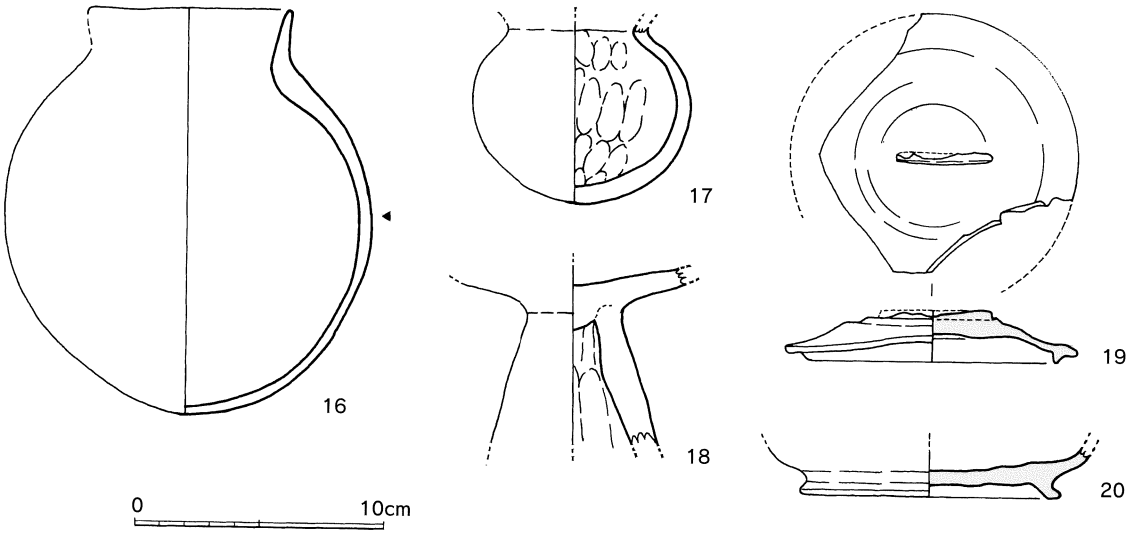
出土遺物（第19.20図）14は外反口縁の土師器の甕形土器で、内面に横方向のヘラ削り痕が認められる。16は小型壷で器高16.3cm、復元口径は7.7cmである。17は小型丸底壷の体部で器高7.5cm以上、体部最大径8.6cm。内面に指頭痕を残す。18は土師器高坏で内面にしぼり痕が認められる。



第18図　９号竪穴実測図（1/60）



第19図　９号竪穴出土遺物実測図（1）（1/3）



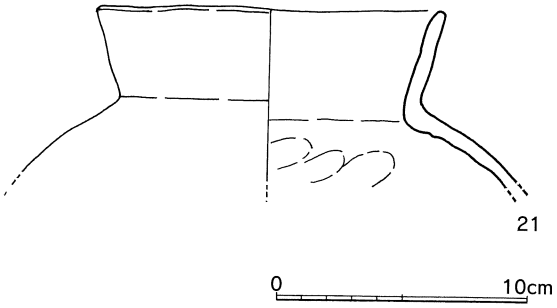
第20図　９号竪穴出土遺物実測図（2）（1/3）

19、20は須恵器で、19は頂部に扁平のつまみを持つ坏蓋で、復元口径は11.2cmである。20は高台付きの坏身である。このうち、12と16が床面直上から出土したことから、この竪穴は弥生時代後期後半のものと考える。

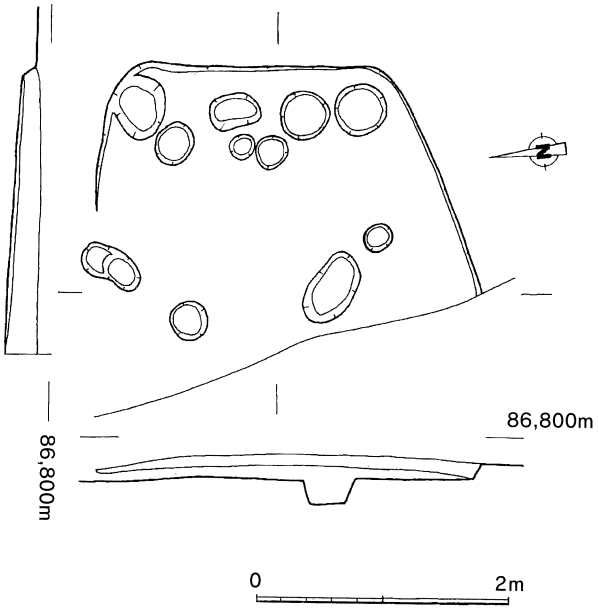
10）10号竪穴（第22図）

９号竪穴と並んで、Ａ調査区西側で確認された遺構で、西半分は調査対象地外で調査できなかった。また北西を近世１号溝に切られていた。確認できた規模は東壁2.3ｍのみで、弥生時代終末から古墳時代初頭の小竪穴である。

出土遺物（第21図）21は土師器の甕形土器で口縁部は直行し、胴は張る。復元口径は13.8cmである。



第21図　10号竪穴出土遺物実測図（1/3）



第22図　10号竪穴実測図（1/60）

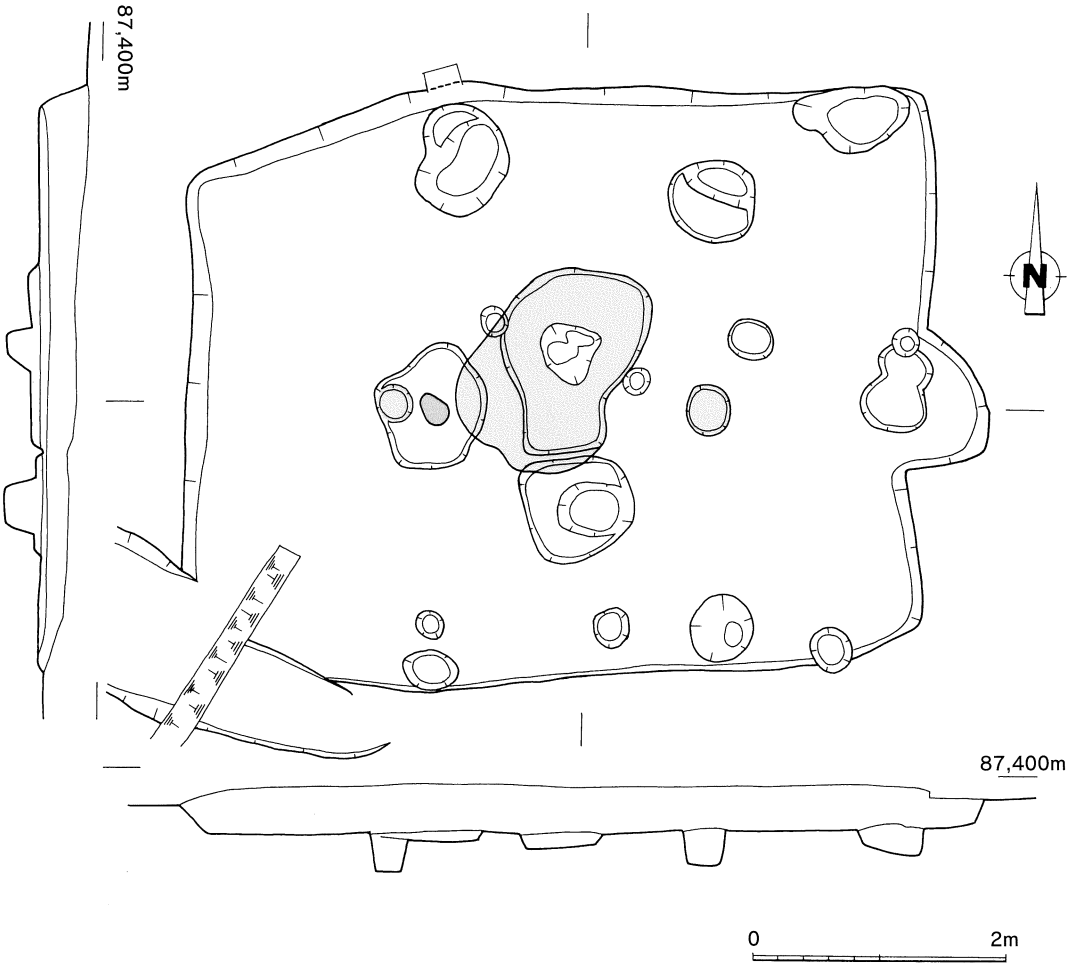
11）11号竪穴

11号竪穴は、Ｂ調査区で12号竪穴と近接してあったが、掘り進めていくうちに12号竪穴の一部であると判断した。したがって、そこからの出土遺物も次の12号竪穴の中で紹介していく。

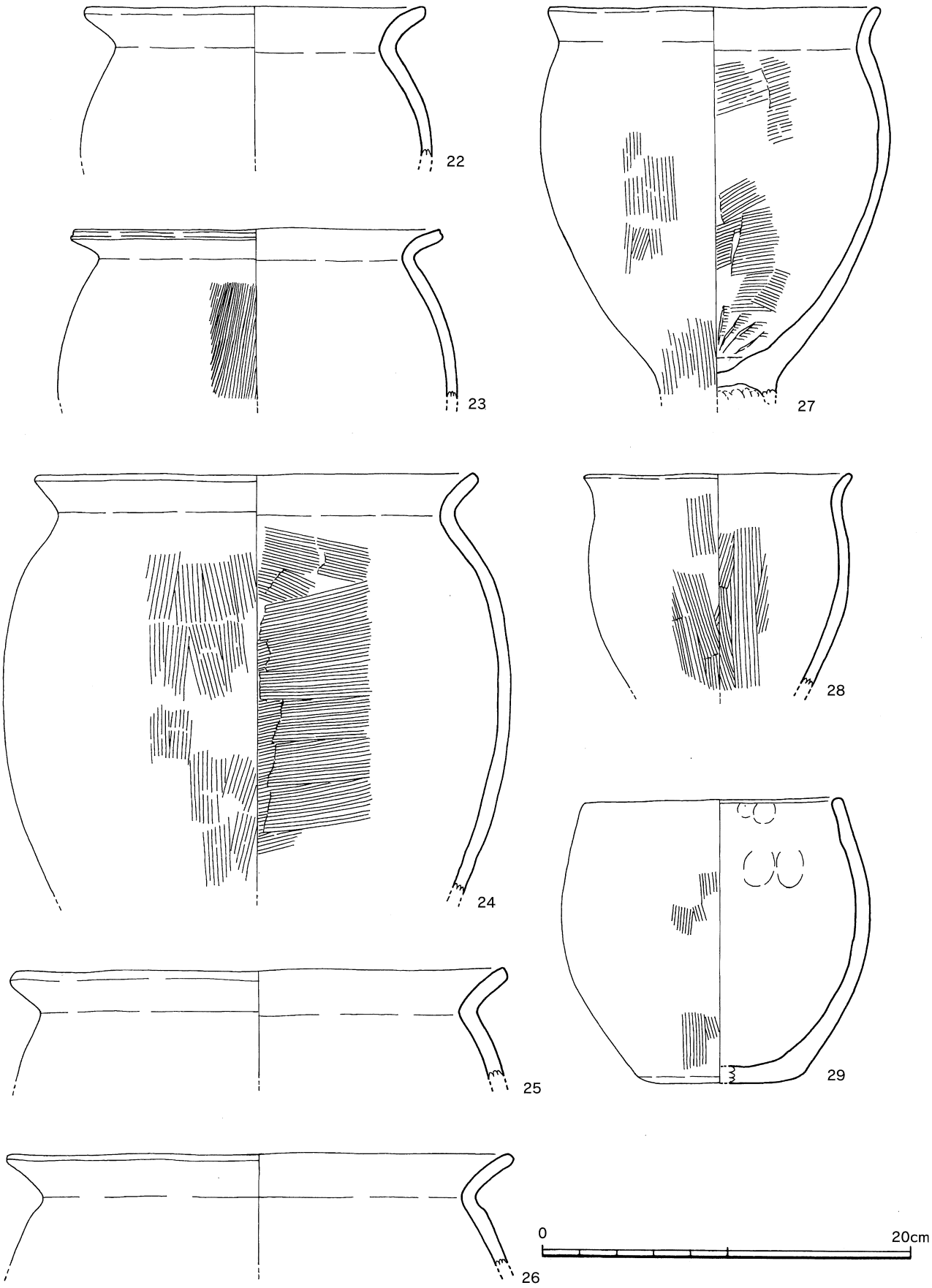
12）12号竪穴（第23図）

この遺構は、B調査区中央で確認された住居跡で、規模は南北4.7m東西6.1mで、平面形は方形を呈し、検出面から約20cmで平坦な床面に達する。床面の中央部には炉跡があり、直径1.6cm、深さ15cmで、埋土の最下層に多くの炭化物を含んでいる。炉跡をはさんで２本の主柱穴が検出され、深さは30cmである。出土遺物から弥生時代後期終末の住居跡である。

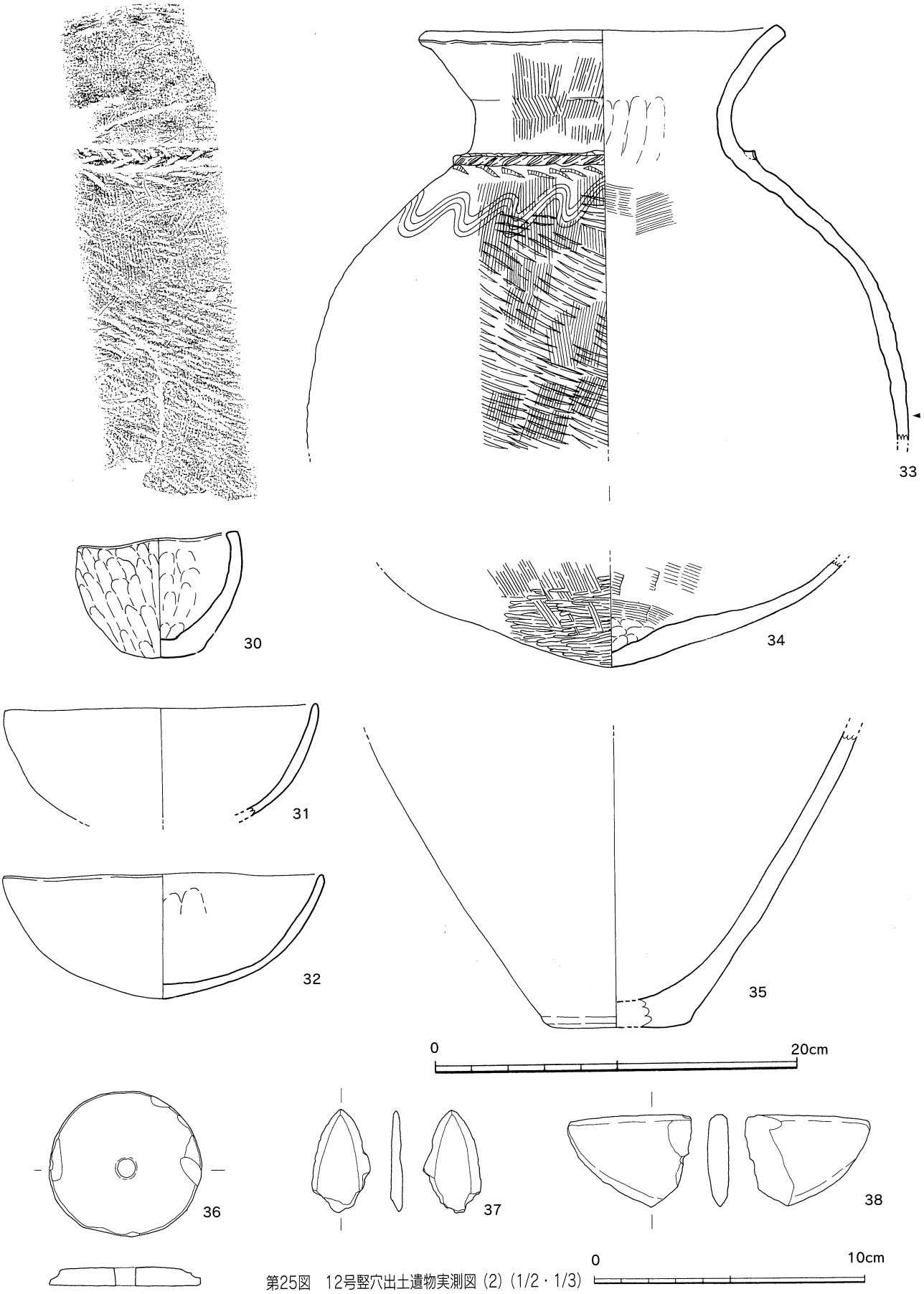
出土遺物（第24、25図）としては甕形土器、鉢形土器、壷形土器、椀形土器のほか、石包丁、石剣等が見られる。22～26、35は甕形土器で、内外面にはけ目調整が見られるものもあるが、大半器面が剥離していて調整不明である。復元口径は18.0cm～27.0cmである。27～29は鉢形土器で、27は下に脚が付くタイプである。器高21.0cm以上、復元口径は17.8cmである。29は口縁部がほぼ直行し体部が半球状に近い。器高15.4cm、口径は13.9cmである。30～32は椀形土器で、30は内面に指頭痕を多く残すもので、平底に近い底部をもつ。31,32は丸底の椀形土器である。33は壷形土器で、口縁部が外反気味に外に開き、胴部が大きく張り出す。頸部に三角突帯を貼り付け、その下部に刻目と波状文を施す。また胴部外面に斜方向のタタキを残し、内面と口縁部は刷毛による調整を主とする。34が近接から出土しており、色調や調整から見て33の底部と考えられる。36は紡錘車で直径は5.5cmほどで、厚みは0.7cm。叩いて成形した後に荒い磨きを施している。38の石包丁は輝緑凝灰岩製である。



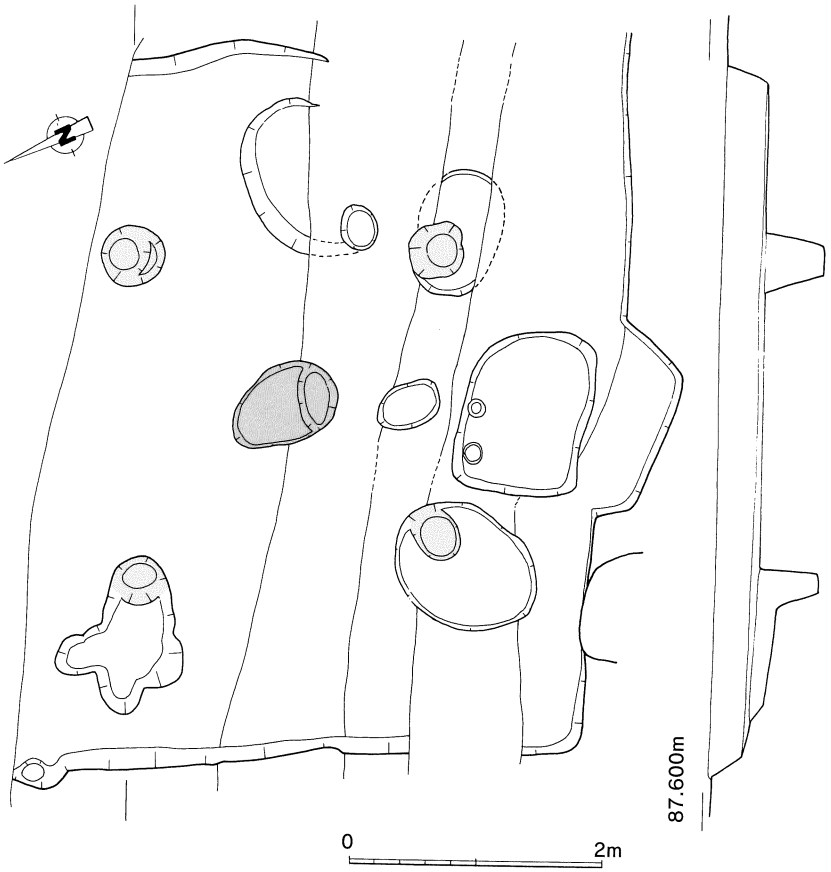
第23図　12号竪穴実測図（1/60）



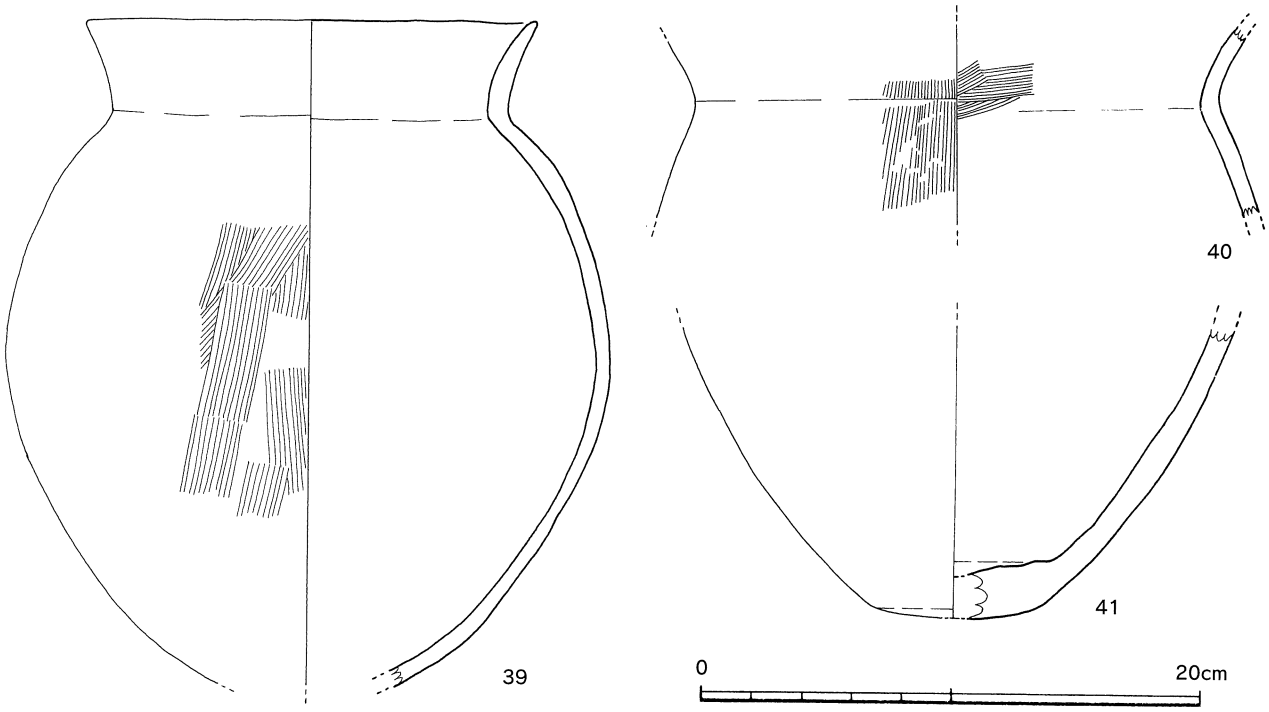
第24図　12号竪穴出土遺物実測図（1）（1/3）



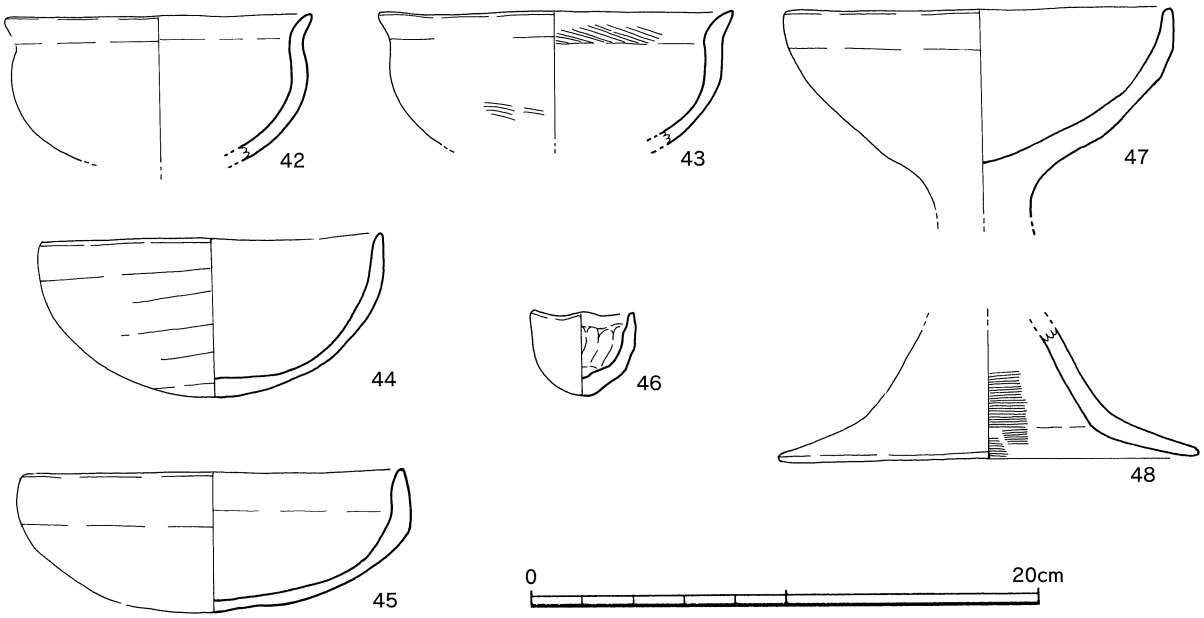
第25図　12号竪穴出土遺物実測図（2）（1/2・1/3）



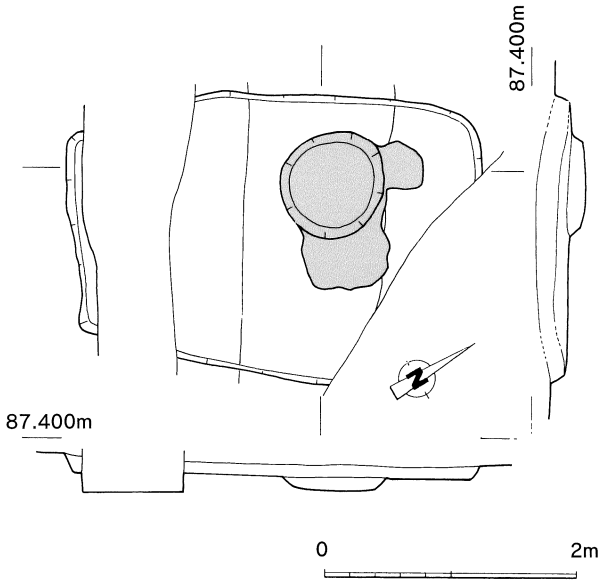
第26図　13号竪穴実測図（1/60）



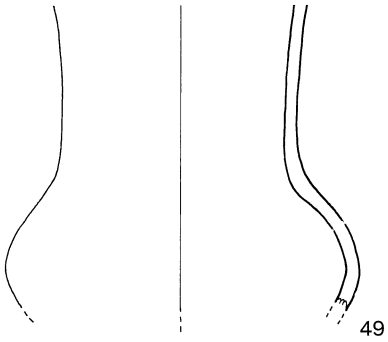
第27図　13号竪穴出土遺物実測図（1）（1/3）

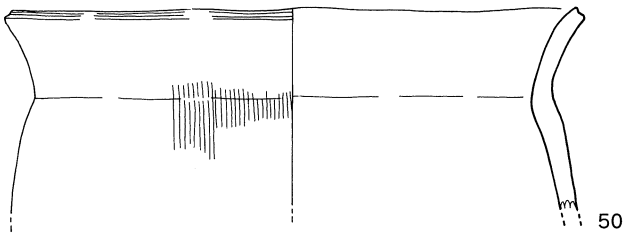


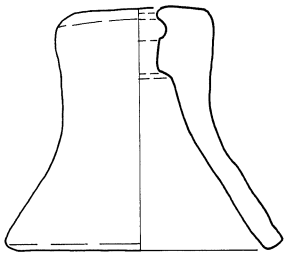
第28図　13号竪穴出土遺物実測図（2）（1/3）

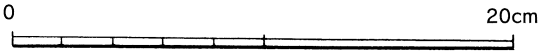


第29図　14号竪穴実測図（1/60）









第30図　14号竪穴出土遺物実測図（1/3）

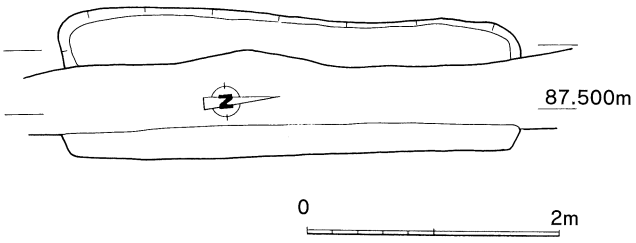
13）13号竪穴（第26図）

13号竪穴は、B調査区北側で確認された弥生時代後期後半から終末の住居跡で、上部を近世の11・12号溝によって撹乱されている。さらに西半分は調査対象地外で調査できなかった。確認できた規模は南壁　5.7mのみで、床面の中央部には径80cmの範囲で焼土、炭化物を含んだ土坑があり、炉跡と考えられる。主柱穴も4本確認でき、そこから規模は南北約5mと推測される。、平面形は方形を呈し、検出面から約　40cmで平坦な床面に達する。

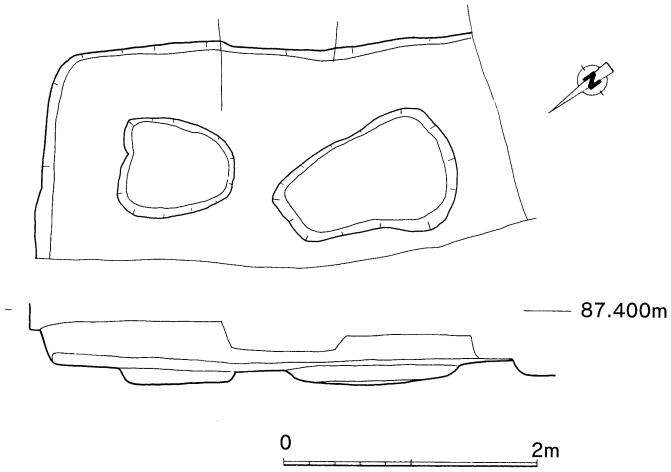
出土遺物（第27、28図）

39～41は甕形土器。39は口縁部が外反気味で胴部はやや張る。41の底部はレンズ状を呈している。

42～45は椀形土器で42、43は口縁部緩やかに外反して、頸部に稜をもつ。内外にナデ調整が施されている。46は手捏ねのミニチュア土器である。内面に指頭痕を残し、体部に比べ口縁部の器壁は薄い。48は高坏の脚部で内面下半に稜線をもち、ゆるく外反する。



第31図　15号竪穴実測図（1/60）



第32図　16号竪穴実測図（1/60）

14）14号竪穴（第29図）

14号竪穴は、B調査区北東側で確認された弥生時代後期後半の小竪穴で、上部を近世の11・12号溝によって撹乱され、さらに北側は調査対象地外であった。確認できた規模は南壁　2.2mのみで、床面の中央部には径80cmの範囲で焼土、炭化物を含んだ土坑があり、炉跡と考えられる。平面形は方形を呈し、検出面から約15cmで平坦な床面に達する。

出土遺物（第30図）49は長頸壷で、口径は10.2cmである。50の甕形土器の胴部は張らない。51の器台はくびれが上部に上がって裾が広がっている。

15）15号竪穴（第31図）

15号竪穴は、B調査区東側で検出された遺構で、ごく一部調査できただけで、大半は調査対象地外であった。確認できた規模は西壁3.4mのみである。

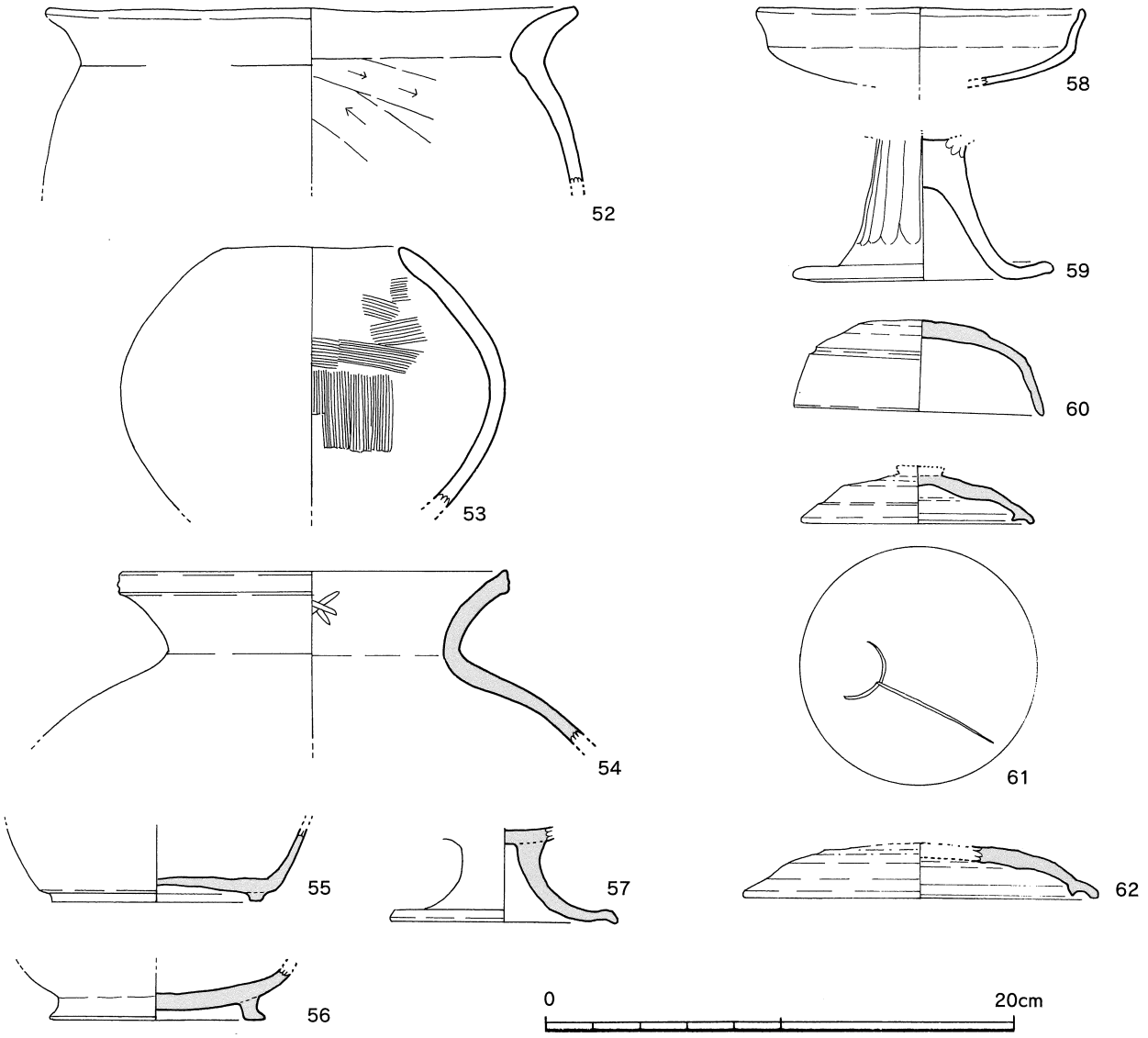
16）16号竪穴（第32図）

この竪穴は、B調査区北西側で確認された遺構で、上部を近世の11・12号溝によって撹乱され、さらに西側は調査対象地外であった。確認できた規模は南北3.3m、東西1.6m。平面形は方形を呈し、検出面から約40cmで平坦な床面に達する。

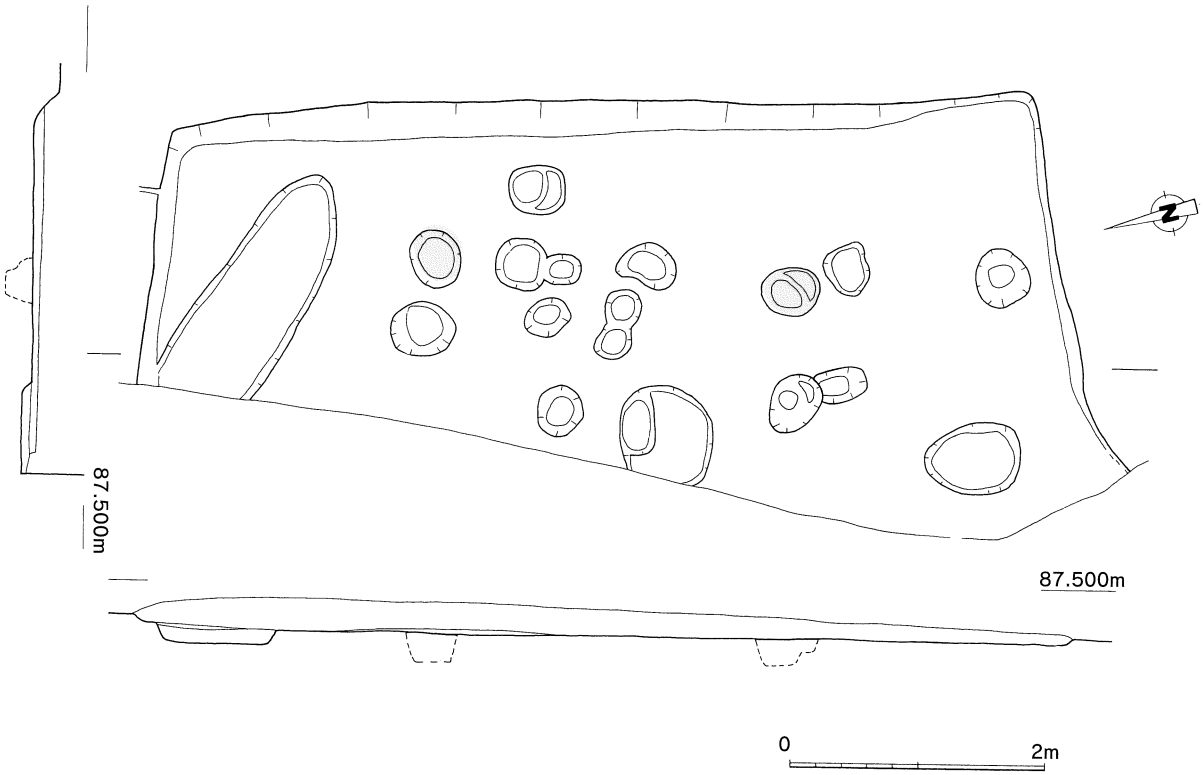
17）17号竪穴（第34図）

17号竪穴は、B調査区西側で16号竪穴と並んでで確認された７世紀後半の住居跡で、一部を近世の12号溝によって撹乱されている。さらに西半分は調査対象地外で調査できなかった。確認できた規模は南壁　6.7mのみで、主柱穴は２本確認できたが、カマドなどの施設は不明である。平面形は方形を呈し、検出面から約20cmで平坦な床面に達する。

出土遺物（第33図）54～57、60～62が須恵器である。54の甕形土器は口縁部緩やかに外反する。内面にヘラ記号を施し、口径は16.2cmである。55、56は高台付き坏身で、口径は９cmほどである。57は高坏の脚部で、脚高は低い。60～62は坏蓋で、60は天井部と口縁部の境に１条の沈線を、さらに天井部には回転ヘラ削りを施している。61、62ともに扁平に近い蓋で、縁辺下に身を受けるための返りがある。62は外面にヘラ記号を施している。52は土師器の甕形土器の口縁部で頸部下半はヘラ削り痕が認められる。53は胴の丸い小型壷で復元胴部最大径は16.5cmほどである。58は土師器の坏身、59は土師器の高坏の脚部で外面にヘラ削り痕、内面には搾り痕が認められる。



第33図　17号竪穴出土遺物実測図（1/3）

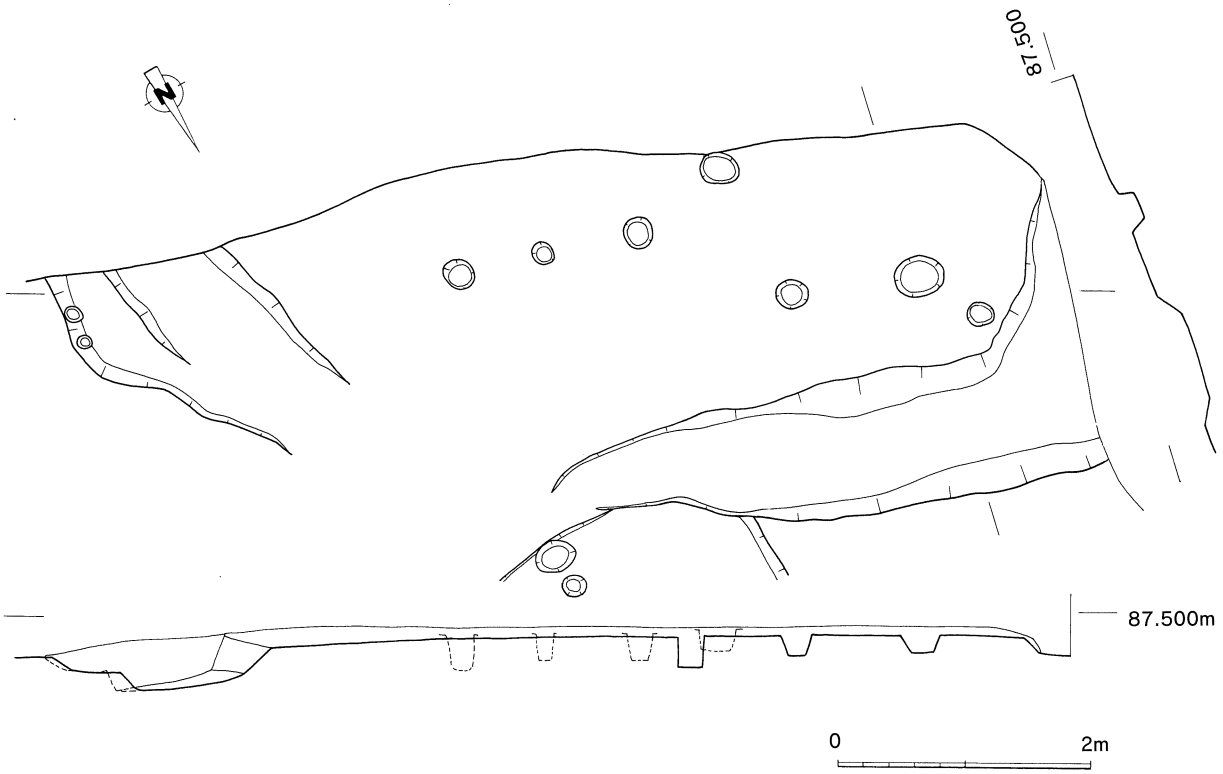


第34図　17号竪穴実測図（1/60）

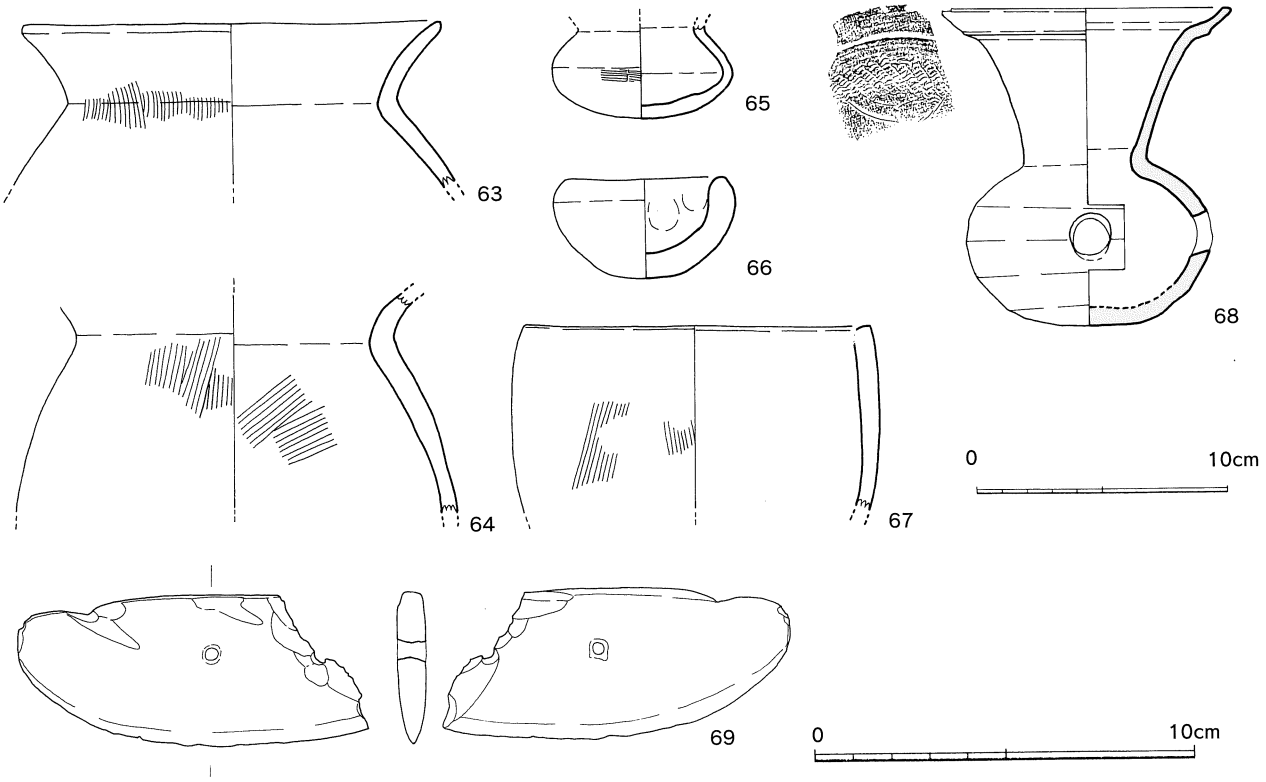
（2）周溝状遺構（第35図）

本遺構は、B調査区南端で全体の４分の１ほどが確認されたのみである。規模は周溝部も含めて、東西約９ｍで、溝の形体はほぼ円形をしている。溝の上面幅は約1.5ｍ、深さ約0.5ｍ、底面幅約0.8ｍで、断面形は逆台形に近い。周溝内側部が南北約２ｍほどしか調査できなかったため、柱穴７本検出したにとどまった。

出土遺物（第36図）63、64は甕形土器でともに刷毛目調整が見られる。65は小型丸底壷の体部で、調整は外面に刷毛目が見られ、内外面とも朱が塗られている。胴部最大径は7.2cmである。66は手捏ね土器で、内面に指頭痕を残している。67は口縁部がほぼ直行し体部が半球状に近い鉢形土器。口径は13.7cmである。68の甕はほぼ完全な状態で出土した。頸部は上方に向かって大きく開き、口縁部と頸部の境目で屈曲し、さらに外方へと延び口縁端部へと続く。体部はやや扁平な球体で、その最大径は中央よりやや上位にくる。孔は若干上向きに穿たれていて、孔径は1.7cmである。頸部下に櫛状工具による連続した施文が見られる。器高12.7cm、口径は11.5cmで胴部最大径は9.7cmである。69の石包丁は輝緑凝灰岩製である。出土遺物から６世紀後半に作られた周溝と考えられる。



第35図　周溝状遺構実測図（1/60）



第36図　周溝状遺構出土遺物実測図（1/3・1/2）

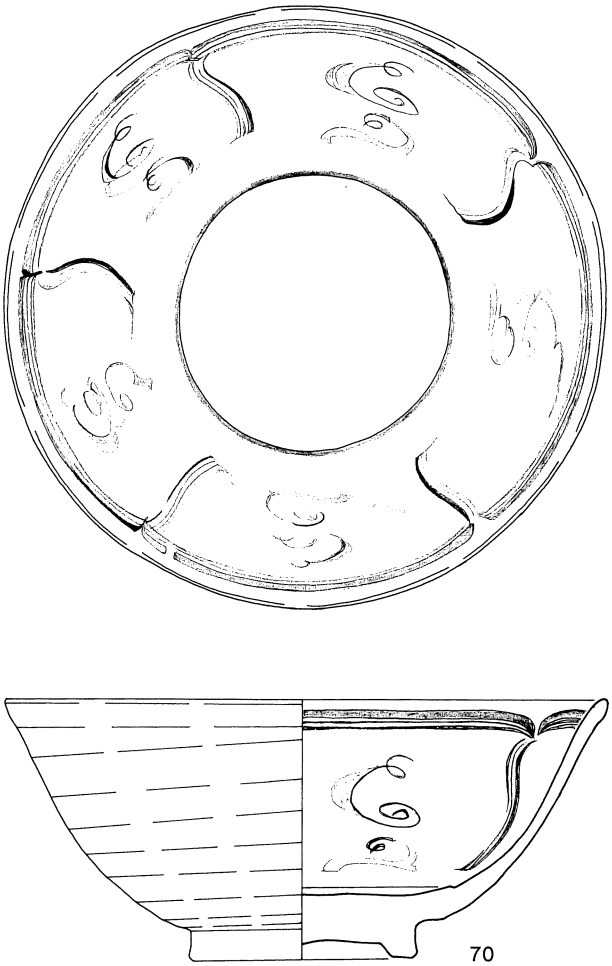
2．中近世の遺構（第38図）

（1）土壙墓

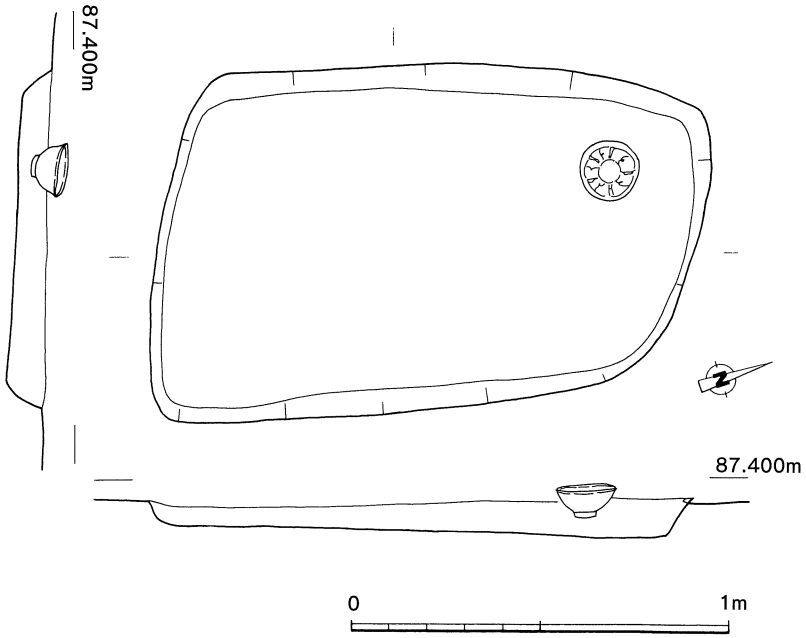
この遺構は、B調査区の中央部やや北よりで検出された中世土壙墓である。土坑規模は東西0.9m、南北1.5m、深さ約20cmで、形体は隅丸長方形である。主軸を南北にとり、床面はほぼ平坦である。土壙墓内からは礫床あるいは釘等木棺の部品、炭敷きも見られなかった。頭位は副葬品の出土状況からみて北方向と考える。

副葬品（第39図）

副葬品は龍泉窯系の青磁椀１点が出土した。口径15.8cm、器高6.9cm、高台径6.0cmで、輪状高台の畳付部から内部以外は全面青緑色の釉がかかっている。文様は内面のみで、体部内面を沈線によって５分割し、その中に飛雲文を片彫りしている。



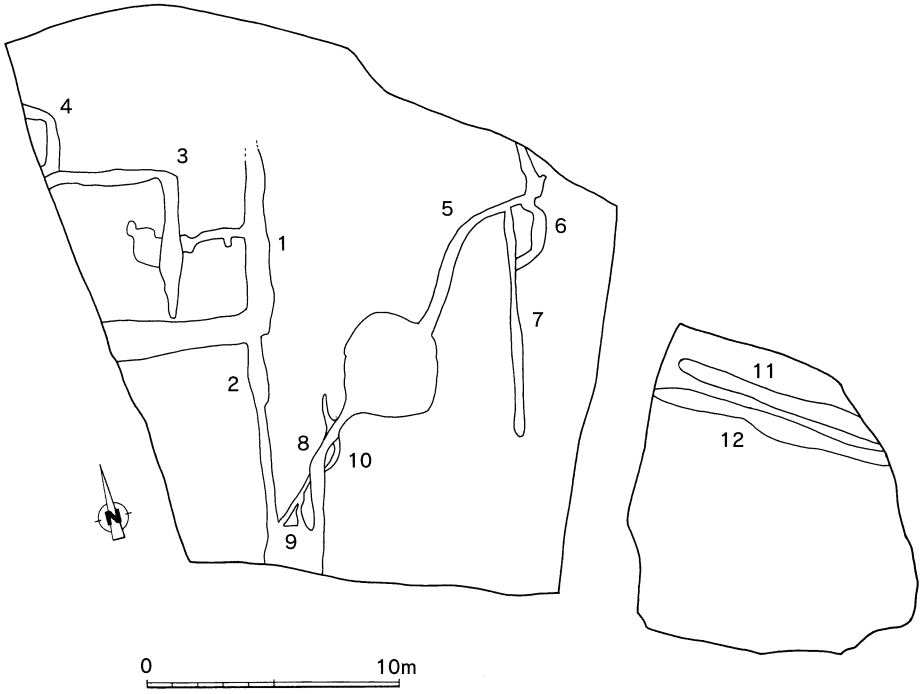
第37図　土壙墓出土遺物実測図（1/2）　0　5cm



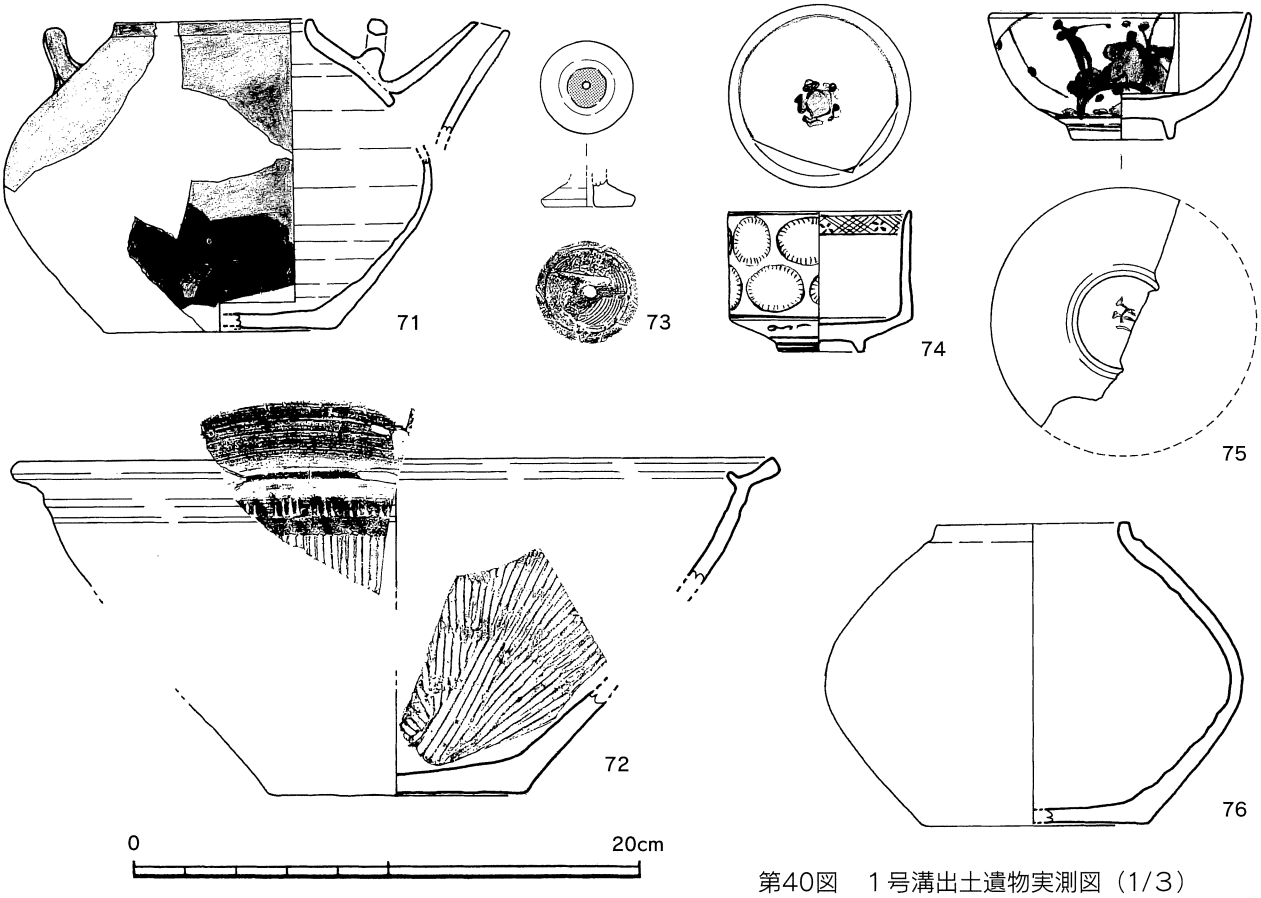
第38図　土壙墓実測図（1/20）

（2）溝状遺構

Ａ調査区から10本の溝状遺構が、またＢ調査区からは２本の溝状遺構が検出された。これらの溝の構築時期はいずれも近世以降である。



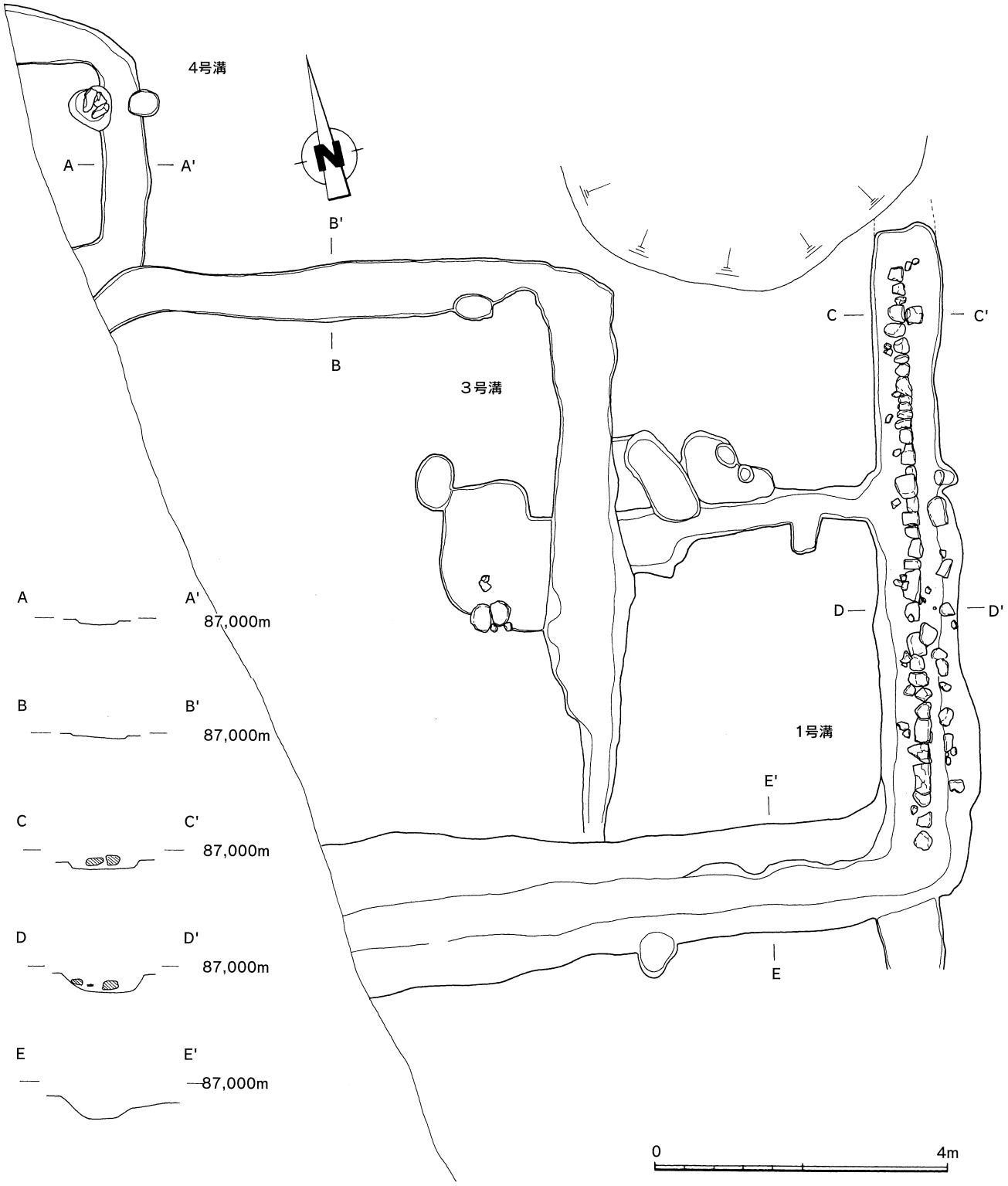
第39図　溝状遺構配置図（1/300）



第40図　１号溝出土遺物実測図（1/3）

1)１号溝（第41図）

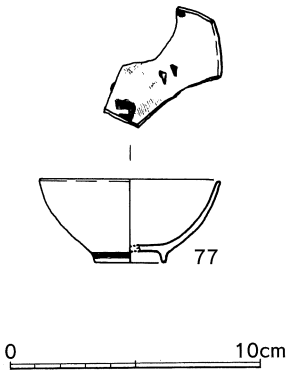
Ａ調査区中央を南北に流れ、３号竪穴付近で直角に西に向きを変え、９・10号竪穴の間を通って調査区外へ進む。南端で２号溝と交わる。北端は新しい撹乱を受けていた。残存長は南北9.4m、東西8.4m、幅は2.0m、断面は深さ10～40cmの浅い皿状である。そのうち、南北部には30cm大の石が１段組で、溝の内側に面を合わせるように並べられていた。（第43図）



第41図　１・３・４号溝実測図（1/80）

また石列の中央部から西に向けて5.6mほど溝が流れているが、溝底のレベルが同じだったため、これも１号溝の続きと考えた。

１号溝からの出土遺物（第40図）としては、71は関西産の陶器土瓶、72は福岡産の擂鉢、73は陶器秉燭の脚部である。74は肥前染付磁器筒形湯呑碗で、見込みにコンニャク印判による五弁花をもつ。75は肥前染付磁器碗で内底部には「大明年製」崩れ銘が描かれている。76は関西産の陶器土瓶である。



第42図　３号溝出土遺物実測図（1/3）

2）３号溝（第41図）

１号溝の北西に１・４号溝を切って作られたのが３号溝である。東西7.0m、南北8.0m、幅1.2m、断面は深さ10～20cmの浅い皿状である。調査区外に向かう手前で屈曲することから、方形に廻る溝であった可能性もある。

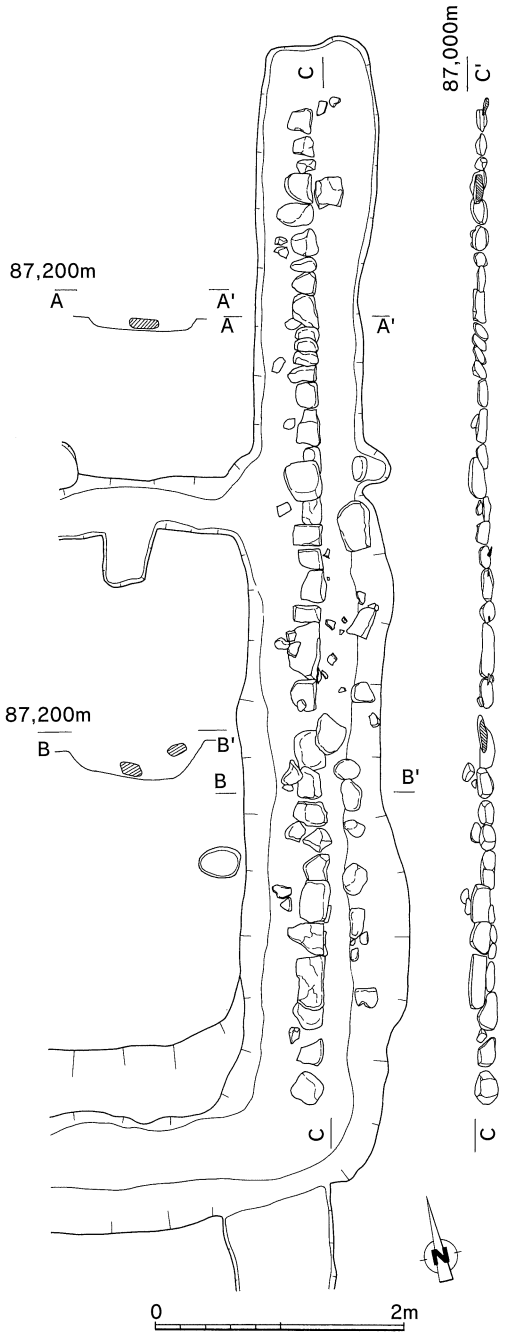
出土遺物（第44図）の77は肥前磁器色絵碗で、19世紀以降の製品である。

3）４号溝（第41図）

Ａ調査区北端で見つかったのが４号溝である。これは３号溝より先に掘られている。西３分の２が調査区外であるため全体の形体は不明であるが、これも３号溝と同様に方形に廻る溝であった可能性もある。南北長は4.1m幅0.8m、断面は深さ10cmの浅い皿状である。ここからは図示できるほどの遺物は出土していない。

4）２号溝（第44図）

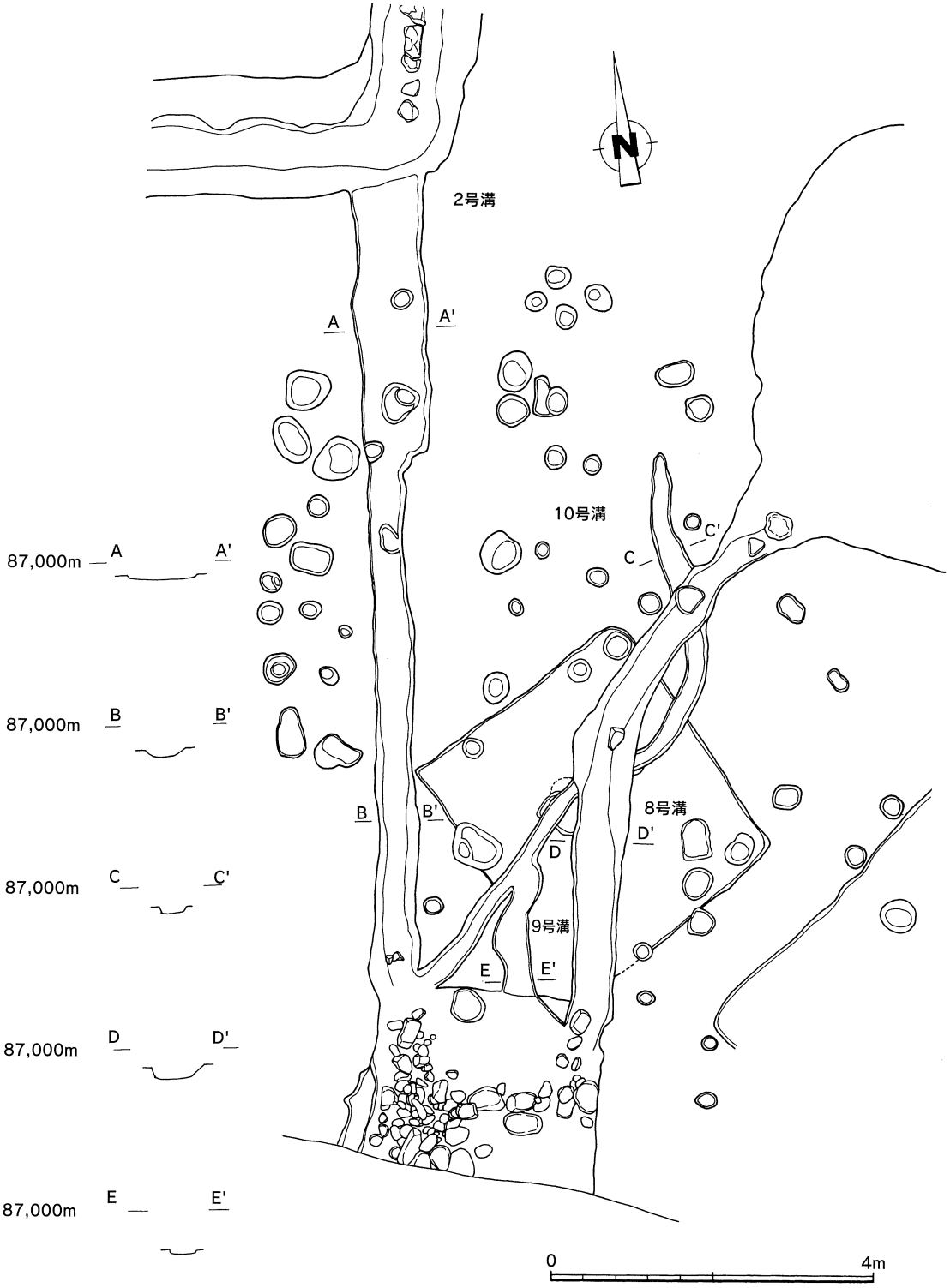
１号溝と北端で接し、そこから南の石組土坑とを繋ぐ、全長10mの溝である。幅0.8m、断面は深さ15cmの浅い皿状である。その底面は北から南に向かって若干傾斜している。ここからも図示できるほどの遺物は出土していない。



第43図　１号溝配石実測図（1/60）

5）８号溝（第44図）

井戸状遺構と北端で接し、そこから南の石組土坑とを繋ぐ、全長7.5mの溝である。幅0.8m、断面は深さ30cmの浅い皿状である。その底面は北から南に向かって若干傾斜している。この溝は２号竪穴を切って作られている。ここからも図示できるほどの遺物は出土していない。



第44図　２・８・９・10号溝実測図（1/80）

6）９号溝（第44図）

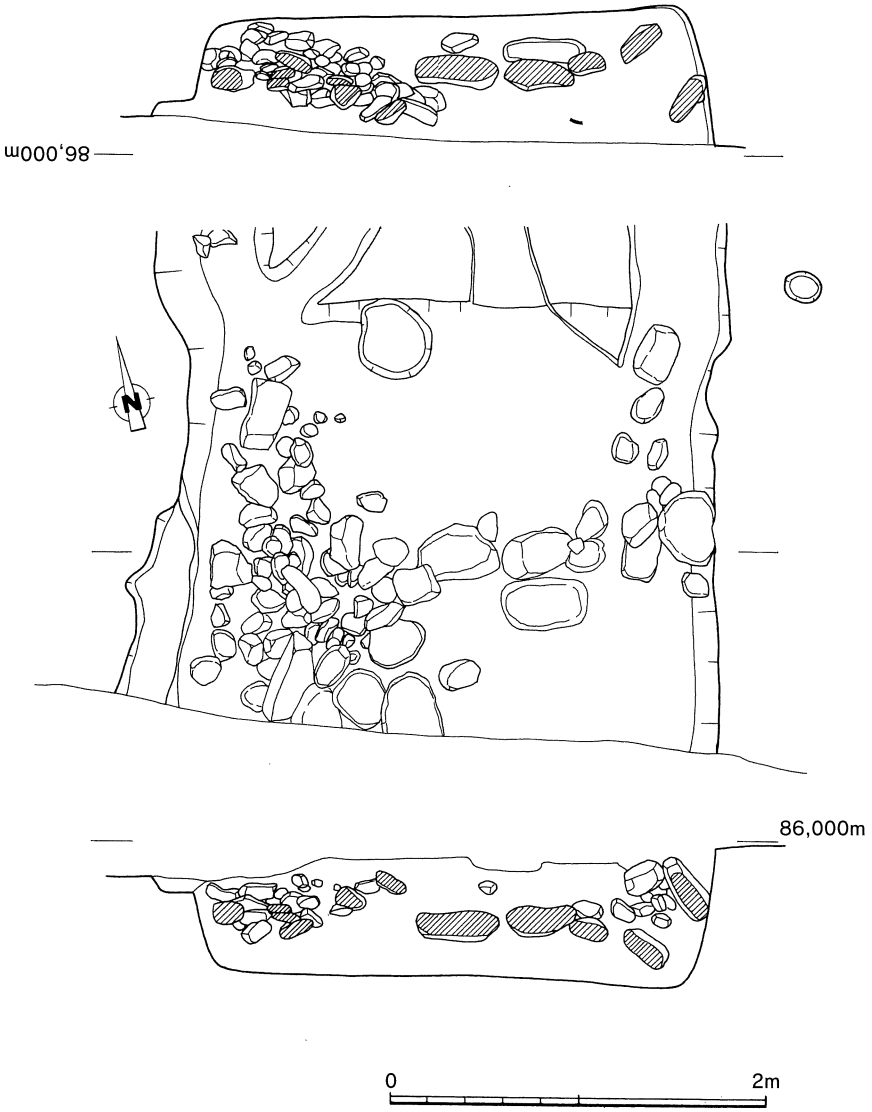
10号溝と石組土坑とを繋ぐ、全長1.5mの溝である。幅0.5m、断面は深さ20cmの浅い皿状である。その底面も他の溝と同様に北から南に向かって傾斜している。

7）10号溝（第44図）

２号溝と８号溝の間にあり、８号溝と交差するように蛇行して、北から南に流れ、最後は２号溝と合流する溝状遺構が10号溝である。この溝は２号竪穴を切って作られ、その後、８号溝に切られている。残存長8.0m、幅0.4m、断面は深さ30cmの浅い皿状である。

8）石組土坑（第45図）

A調査区南で、２・８・９・10号溝が流れ込む先に作られているのが石組土坑である。土坑の規模は東西2.6m、南北は2.4m以上、深さ0.7mである。土坑西寄りに２号溝に沿うように石の列が見られ、南に向かって下がっている。ここからは、図示できるほどの遺物は出土していない。



第45図　石組土坑実測図（1/40）

9）５号溝（第46図）

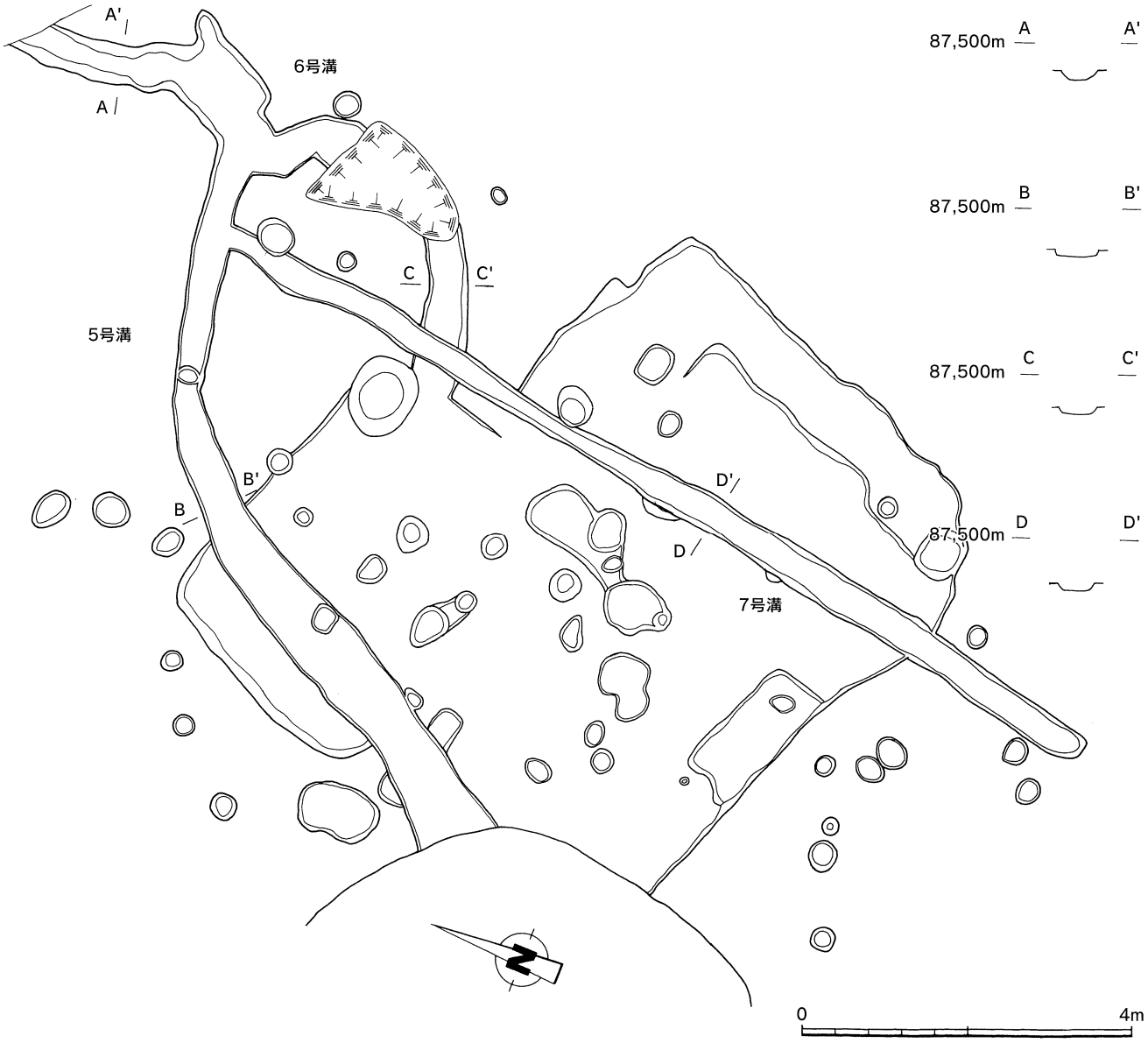
Ａ調査区の北東で検出されたのが、５・６・７号溝である。このうち５号溝は調査区外から南に蛇行して流れ、４・５号竪穴を切って進み、井戸状遺構にぶつかる。残存長13m、幅0.8m、断面は深さ20～50cmの浅い皿状である。

10）６号溝（第46図）

Ａ調査区の北東で５号溝から分かれて、左にカーブを描きながら進み、５号竪穴付近で消滅する溝状遺構である。残存長５m、幅0.7m、断面は深さ30cmの浅い皿状である。ここからも図示できるほどの遺物は出土していない。

11）７号溝（第46図）

Ａ調査区の北東で北端を５号溝と交わり、４・５・６号竪穴を切りながら南に直進する溝状遺構である。残存長11.6m、幅0.4m、断面は深さ25cmの浅い皿状である。



第46図　５・６・７号溝実測図（1/80）

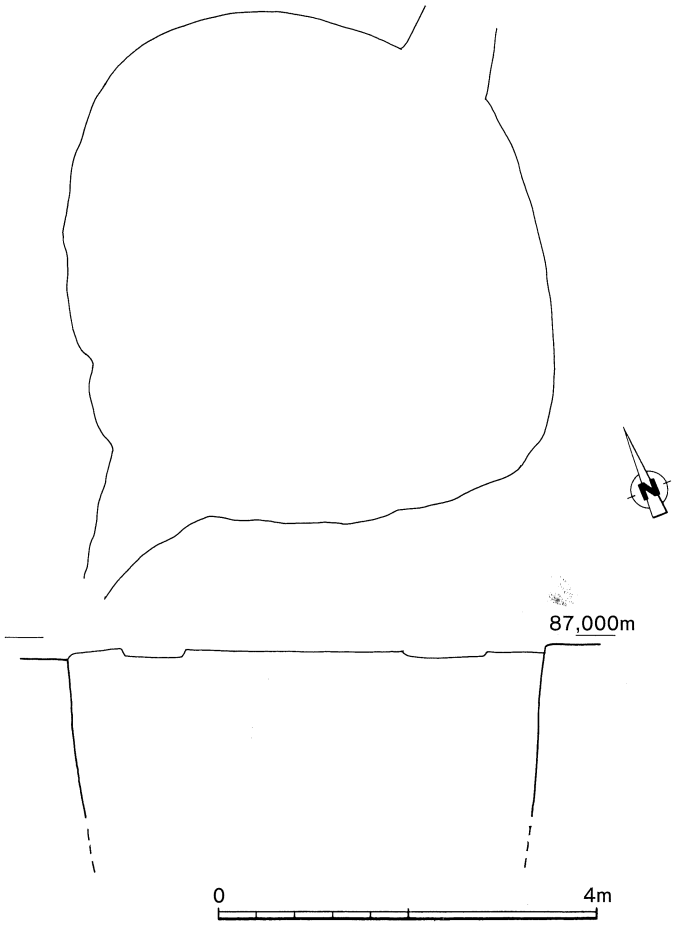
12）11・12号溝（第５図）

Ｃ調査区の北寄りにあり、竪穴遺構を切りながら、調査区を東西に横断する溝状遺構である。北側が11号溝、南が12号溝である。

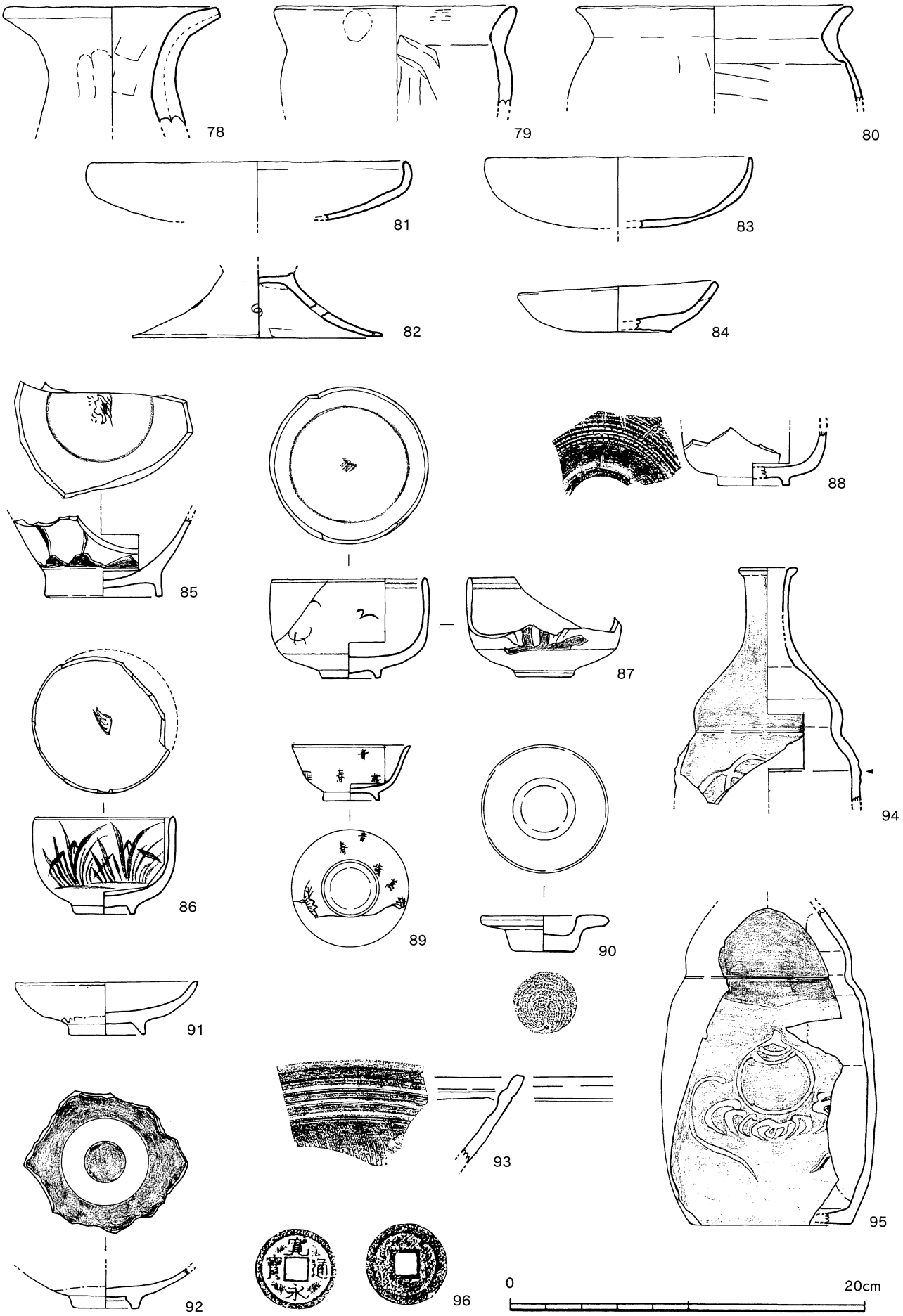
13）井戸状遺構（第47図）

Ａ調査区ほぼ中央部で検出された井戸状遺構は、３・４号竪穴を切って作られているが、５・８号溝との前後関係は不明である。平面形は直径約５ｍの円形で、深さ２ｍ以上である。

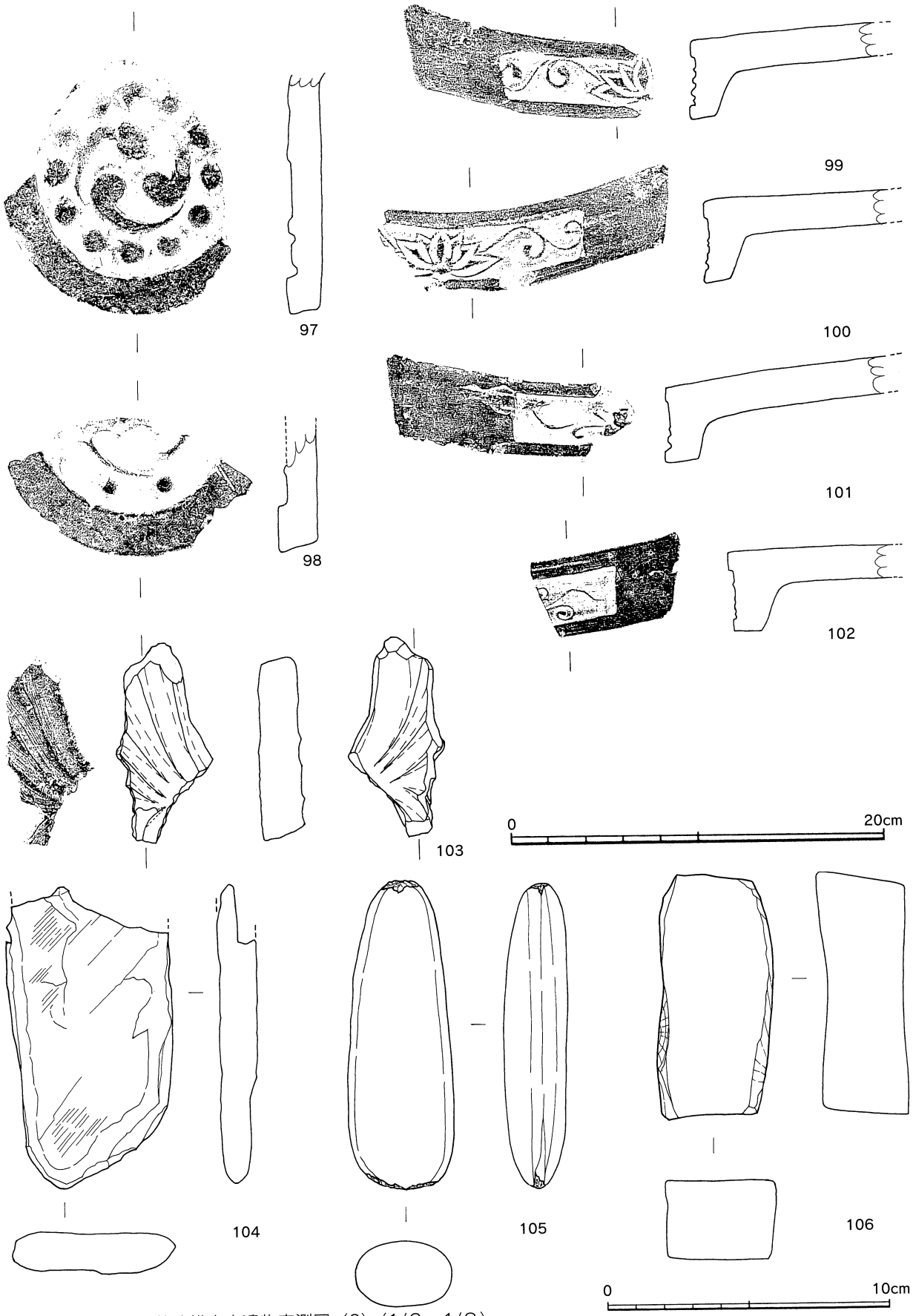
ここからの出土遺物（第48・49図）では、78の器台はくびれ部が上位にあり裾が広がる。79・80は土師器の甕形土器で、内面にヘラ削り痕が認められる。81・82は高坏で82の脚には四方に穿孔がある。83は土師器の椀形土器、84は土師質土器小皿で底部糸切り。85は肥前染付磁器広東碗で製作年代は1780～1810年代である。86・87・89は肥前系染付磁器碗である。88は瀬戸陶器碗で刺突文状のヨコ文様が施されている。90は陶器蓋で底部糸切りがある。91・92は陶器皿で、92は佐賀内野山系のものである。93は福岡産の擂鉢、94・95は小鹿田または小石原焼の陶器萎子徳利である。96は寛文８年（1668）以降の新寛永である。97・98の軒丸瓦は左回転の巴文で、尾は接してない。97の珠点は12個ある。99～102は均整唐草文軒平瓦で、99・100は中心飾りに橘状文をもつ。103は鯱瓦である。104は結晶片岩製の打製石斧、105は玄武岩製の敲石、106は砂岩質頁岩の砥石である。



第47図　井戸状遺構実側図（1/80）



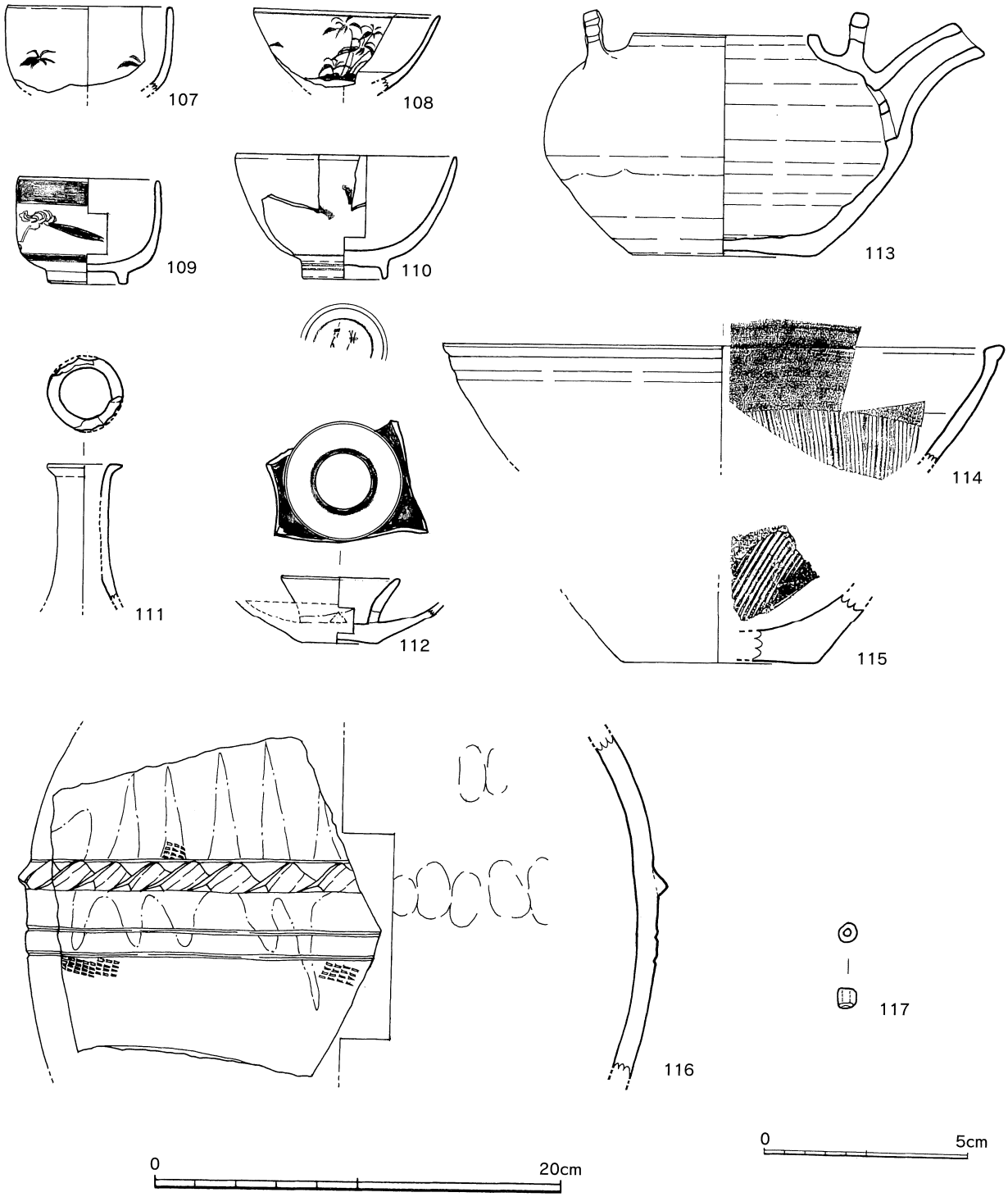
第48図　井戸状遺構出土遺物実測図（1）（1/3）



第49図　井戸状遺構出土遺物実測図（2）（1/2・1/3）

3．その他の遺物

その他、寺内遺跡において表採できた遺物をここで紹介しておきたい。107～110は肥前染付磁器碗であり、108は小広東碗、110は高台内に一重圏線を廻らせ「大明年製」の銘をもつ。111は小鹿田または小石原焼の陶器徳利、112は陶器灯火具で台部つけ根に三角の穿孔がある。113は関西産の陶器土瓶で111～113はいずれも19世紀のものである。114・115は福岡または肥前の擂鉢で、116は唐津焼の陶器甕である。117はガラス製の小玉で色はマリンブルーである。



第50図　その他の遺物実測図（1/3）

第３節　小　結

寺内遺跡は三隈川から石井川が分かれさらにその支流の小河川が流れる谷底の低位に位置している。本調査は平成８年度にA調査区約800㎡、翌平成９年度にその残りとB調査区200㎡を対象として行なわれた。両調査区では縄文時代から中・近世にいたる遺物や遺構が断続的に検出されており、河川の氾濫を受けることの少ない当地が生活条件に適していたことが伺える。

ここで検出した１７基の竪穴をおおまかに弥生時代後期前葉～中葉（Ⅰ期）、弥生時代後期後半（Ⅱ期）、弥生時代後期終末～古墳時代初頭（Ⅲ期）、古墳時代中期（Ⅳ期）古墳時代後期（Ⅴ期）、７世紀後半（Ⅵ期）の六期に分けて、以下、年代を追って説明する。

縄文時代

縄文時代の遺構は検出されていないが、扁平打製石斧等縄文時代の遺物が確認されている。これらは表採資料や後世の遺構内より発見されたものであり、原位置を保つものではないが、このことより、この周辺が縄文時代後期には生活領域の一部であったと言える。

弥生時代後期前葉～中葉（Ⅰ期）

寺内遺跡で人の生活した痕跡が現れるのがこの時期からである。まず調査区中央部に3・７号竪穴住居跡が営まれる。これらの遺構から出土した土器は壷形土器、甕形土器、器台であり、壷形土器（11）や甕形土器（５）の底部は平底からわずかに凸レンズ状になっている。

弥生時代後期後半（Ⅱ期）

この時期の遺構は５・９・13・14号竪穴で、範囲も調査区全体に広がっている。この４基の竪穴は14㎡以下の面積をもつ小型竪穴と約20～30㎡の中型竪穴がある。そして、中型竪穴は中央部に焼土があり、地床炉を形成しており、平面プランは東西に縦長の長方形を呈している。

弥生時代後期終末～古墳時代初頭（Ⅲ期）

この時期の遺構としては４・10・12号竪穴が検出されており、10号竪穴は小型竪穴で、４・12号は中型竪穴である。竪穴の平面プランは長方形でⅠ・Ⅱ期と同様であるが、主軸は若干ずれてくる。これらの竪穴から検出される土器は、壷形土器、小型壷、甕形土器、器台、鉢形土器等がある。12号竪穴の壷形土器（33・34）は平底の名残はあるものの尖底になり、頸部を巡る断面三角の突帯には刻目が加えられる。器面調整は刷毛目と叩きで行なわれている。

ところで、12号竪穴からは立岩産の輝緑凝灰岩製石包丁が出土していることから、弥生時代の終わりまでには、このような狭い谷底地形の場所にも水田開発が及んでいることが伺える（註１）。

古墳時代中期（Ⅳ期）

この時期の遺構には２号竪穴がある。平面プランは正方形で４本主柱を持ち、その中央に地床炉が確認されている。ここから出土した土器（４）は胴部が球状に張り、外面は刷毛目と磨き調整で、内面はヘラ削りが施されている。

古墳時代後期（Ⅴ期）

古墳時代後期の資料は２基の竪穴（１・８号）とその出土遺物である。これらの竪穴はA調査区の南側で並んで検出されている。しかし、床面の施設として本来この時期、カマドが敷設されていても良いはずなのに、この２基とも検出できていない。平面プランはⅣ期と同様、正方形で４本主柱

を持つことが特徴で、これは弥生時代のものとは異なる。また竪穴の主軸もⅢ期までのものと比べてほぼ45度振っている。これらの違いは、寺内遺跡の背後の丘陵上に日田盆地南西部唯一の前方後円墳であり、寺内遺跡を含めた後の石井郷の首長である護願寺古墳群が、この時期に築かれることと無関係ではないであろう。

また、周溝状遺構も礎（68）の形式からこの時期に比定することができる。これは元地権者の長順一郎氏の「この前の道を広げた時に、この場所から鉄刀が出た。」という言葉を考慮すると、径10ｍほどの円墳であった可能性を指摘しておく。

７世紀後半（Ⅵ期）

この時期の遺構としては、中型の17号竪穴が検出されている。この住居跡は東半分の調査しかできておらず、床面施設としては２本の柱穴が確認されただけに留まっている。そして、この時期を最後に、弥生時代後期から連綿と続いてきた寺内遺跡での人々の活動は当分の間、姿を消すこととなる。

第３表　寺内遺跡竪穴一覧表

竪穴	長　辺	短　辺	面　積	主　軸	主柱穴	焼　土	カマド	竪穴内土坑	時期
1	4.7	4.3	20.2	N-52°-E	4本	なし	なし	東壁	Ⅴ期
2	3.5	3.1	10.9	N-58°-E	3本	中央	なし		Ⅳ期
3	4.8	4.1	19.7	N-68°-W	3本	なし	―	南壁	Ⅰ期
4	5.8	4.2	24.4	N-67°-W	不明	中央	―	南壁	Ⅲ期
5	4.2	3.3	13.9	N-66°-W	２本	なし	―	北東	Ⅱ期
7	5.4	3.6	19.4	N-80°-W	２本	中央	―		Ⅰ期
8	2.7以上	不明		N-56°-E	不明	なし	なし		Ⅴ期
9	3.0	2.4以上	7.2以上	N-77°-W	不明	なし	―	北より	Ⅱ期
10	2.5以上	2.3	5.8以上	N-83°-W	不明	なし	―		Ⅲ期
12	6.1	4.7	28.7	N-89°-E	２本	中央	―		Ⅲ期
13	5.7	5.0以上	28.5以上	N-20°-E	4本	中央	―	南より	Ⅱ期
14	3.3	2.2	7.3	N-30°-E	不明	中央	―		Ⅱ期
15	3.4	不明		N-83°-W	不明	なし			
16	3.3以上	1.6以上		N-56°-W	不明	なし			
17	6.7	3.4以上	22.8以上	N-75°-W	２本	なし	なし		Ⅵ期

奈良時代

この地に人々の足跡を直接見て取ることはできないが、近世遺構からこの時代の坏（82.83）が出土していることから、生活領域の一部であったことには間違いない。さらに奥の高瀬の台地上にある上野第1・第２遺跡などではこの時代の集落が広く展開しており、中心はそちらに移動したと考えられる。

中　世

中世の遺構はＢ調査区で検出した土壙墓だけで、屋敷を想定させるようなものは確認できていない。しかしながら、この周辺には「寺内」以外に「古城」「庄司田」「向屋敷」「中屋敷」などの字名

があり（第４図）、そのうち土壙墓が検出されたB調査区が「寺内」に、A調査区が「中屋敷」に、また背後の尾根上が「古城」にあたる。長順一郎氏によれば、「中屋敷」にある近世庄屋屋敷は中世小領主坂本因幡守の居館を貰いうけたもので、中世には坂本氏の居館を中心に横に寺・背後には詰城が配置されていたと推定されている（註２）。土壙墓の時期については、土師質土器等の共伴遺物がないことや竜泉窯系青磁椀の伝世の可能性などを考えたときには厳しいものがあるが、椀そのものの年代観で言うと１２世紀中頃から後半と考えられる（註３）。その他１点ではあるが、近世遺構から底部回転糸切りの土師質土器の坏（84）が検出されており、これは13世紀前半に位置付けられる（註４）ことから、土壙墓は13世紀代と考える。

近　世

この時期の遺構としては12条の溝と１基の井戸状遺構が確認されている。「中屋敷」にあたるＡ調査区は、代々石井村の庄屋を務めた長家の所有地であり、隣には屋敷を想起させる住宅が今も建っている。内部に石を貼って、直角に曲がる１号溝は1800年代に掘られた屋敷の区画溝であり、それより南東側に展開する数条の溝や井戸はその庭と考えられ、近世庄屋屋敷の一部がここに展開していたと推測される。

《註および参考文献》

註１　田中氏も寺内谷底沖積地の開発の開始を護願寺古墳の存在から見て古墳時代とし、石井川河口部付近の上位沖積地の開発を弥生時代までさかのぼると指摘しており、今回の調査はそれを裏付ける結果となった。田中裕介「日田盆地三隈川南岸の考古学からみた開発史」『大分県地方史』第154号　1994

註２　長順一郎「日田地域中世廃寺考」『大分県地方史』第167.168合併号　1998

註３　横田謙次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心にして-」『研究論集４』九州歴史資料館　1978

註４　『伐株山城跡』玖珠町教育委員会　1984

参考文献　『日田市史』日田市　1990

第４表　寺内遺跡出土遺物観察表（1）

No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm				胎土				成形	調整		色調	備考
			器高	口径	底径		石英	長石	角閃	雲母		外面	内面		
1	土師器	甕		(17.8)		砂粒少ない	○		○		積上げ	ナデ、指押え	ヘラ削り、指押え	淡橙褐色	内面にスス付着
2	土師器	鉢	6.7以上	(18.0)		砂粒多い	○		○		積上げ	ナデ		淡橙色	
3	須恵器	坏身	4.9	(12.6)	受部（14.8）	砂粒少ない					ロクロ成形	ヘラ削り後 ヨコナデ	ナデ	青灰色	
4	土師器	壷		頸部（14.6）	胴部（28.0）	砂粒少ない	○		○		積上げ	ヘラ磨き、刷毛目	ヘラ削り、指押え	淡褐色	
5	弥生土器	甕			(8.4)	砂粒多い		○			積上げ	ナデ後刷毛目	ナデ、指押え	黒灰褐色	
6	弥生土器	器台	9.5以上		(11.4)	砂粒少ない	○		○		積上げ	刷毛目	ナデ	明橙色	
7	弥生土器	器台	9.1	6.9	10.8		○	○	○		積上げ	ナデ後刷毛目 指押え	指押え	赤褐色	
8	弥生土器	鉢	10.5	(16.4)		砂粒少ない	○		○	○	積上げ	ナデ、指押え	ナデ、指押え	淡褐色	
9	弥生土器	甕		15.4		砂粒少ない	○	○	○		積上げ	ナデ	ナデ	褐色	
10	弥生土器	壷	45.0以上	(27.8)	9.2	砂粒多い	○	○			積上げ	ナデ後刷毛目	ナデ、指押え	黄褐色	
11	土師器	椀		(13.6)		砂粒多い		○			積上げ	ヨコナデ	ナデ	淡黄褐色	外面にスス付着
12	弥生土器	甕		15.0			○	○	○		積上げ	ナデ	ナデ	黄褐色	
13	弥生土器	甕		23.6		砂粒多い	○	○	○	○	積上げ	ナデ	ナデ	黄褐色	
14	土師器	甕		(13.4)		砂粒少ない	○		○		積上げ	ナデ	ヘラ削り、指押え	淡褐色	
15	土師器	甕	21.0以上		胴部（24.0）	砂粒少ない		○			積上げ	ナデ		淡褐色	
16	弥生土器	小型壷	16.3	(7.7)	胴部　14.6		○	○			積上げ	ナデ	ナデ	淡褐色	外面に黒斑
17	土師器	小型丸底壷	7.5以上	頸部（5.6）	胴部（8.6）	砂粒少ない		○			積上げ	ナデ、指押え	ナデ、指押え	淡褐色	
18	土師器	高坏		頸部（3.8）		砂粒少ない		○			積上げ	ナデ	ナデ、しぼり痕	明淡褐色	円盤充填
19	須恵器	坏蓋	2.0以上	(11.6)		砂粒少ない		○			ロクロ成形	ヨコナデ	ヨコナデ後中央部 不定方向ナデ	灰色	
20	須恵器	坏身			(10.2)	砂粒少ない	○	○			ロクロ成形	ナデ	回転ナデ後中央部 不定方向ナデ	灰色	
21	土師器	甕		(13.8)		砂粒少ない	○	○			積上げ	ナデ	ナデ、指押え	明淡褐色	
22	弥生土器	甕		(18.0)		砂粒多い	○	○			積上げ	ナデ	ナデ	淡褐色	
23	弥生土器	甕				砂粒多い	○	○			積上げ	ナデ後刷毛目	ナデ	淡褐色	
24	弥生土器	甕		(24.0)	胴部　(27.6)	砂粒多い		○			積上げ	ナデ後刷毛目	刷毛目	明黄褐色	
25	弥生土器	甕		(24.7)		砂粒多い	○	○	○		積上げ	ナデ	ナデ	赤褐色	外面に黒斑

第５表　寺内遺跡出土遺物観察表（2）

No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm 器高	口径	底径		胎土 石英	長石	角閃	雲母	成形	調整 外面	内面	色調	備考
26	弥生土器	甕		(27.0)		砂粒多い		○			積上げ	ナデ	ナデ	黄褐色	
27	弥生土器	鉢	21.0以上	(17.8)	胴部　(19.0)	砂粒多い	○	○			積上げ	ナデ後刷毛目	ナデ後刷毛目	淡黄褐色	
28	弥生土器	鉢					○	○			積上げ	ナデ後刷毛目	ナデ後刷毛目	赤褐色	
29	弥生土器	鉢	15.4	13.9	8.7		○	○	○		積上げ	ナデ後刷毛目	ナデ、指押え	赤褐色	外面に黒斑
30	弥生土器	碗	6.8	8.8	4.6	砂粒少ない		○			積上げ	ナデ、指押え	ナデ、指押え	淡灰褐色	
31	弥生土器	碗	6.1以上	17.0		砂粒多い	○	○	○		積上げ	ナデ	ナデ	褐色	外面に黒斑
32	弥生土器	碗	6.8	(17.4)		砂粒少ない	○	○			積上げ	ナデ、指押え	ナデ、指押え	暗灰褐色	外面にスス付着
33	弥生土器	壷		(20.2)	胴部（33.2）	砂粒少ない	○		○	○	積上げ	ヘラ磨き、刷毛目	刷毛目	明淡褐色	
34	弥生土器	壷				砂粒少ない	○		○	○	積上げ	ヘラ磨き、刷毛目	刷毛目、指押え	明淡褐色	外面に黒斑
35	弥生土器	甕			8.2	砂粒多い	○		○		積上げ	ナデ	ナデ	赤褐色	

No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm 高さ	中高	厚さ	重量 g	備考
36	紡錘車	粘板岩	5.6	5.4	0.7		高打で成形した後、荒いミガキを施す。
37	石鏃	頁岩	3.8以上	2.2以上	0.5	5.8	
38	石包丁	輝緑凝灰岩	3.4以上	4.5以上	0.8	22.1	

No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm 器高	口径	底径		胎土 石英	長石	角閃	雲母	成形	調整 外面	内面	色調	備考
39	弥生土器	甕	26.8以上	17.8	胴部　24.2	砂粒少ない	○	○	○		積上げ	ヨコナデ後刷毛目	ヨコナデ	淡黄褐色	
40	弥生土器	甕		頸部（21.0）			○	○			積上げ	ナデ後刷毛目	ナデ後刷毛目	淡褐色	
41	弥生土器	甕			(6.3)		○	○	○		積上げ			淡褐色	
42	弥生土器	椀	5.8以上	12.0		砂粒少ない	○	○	○		積上げ	ナデ	ナデ	褐色	
43	弥生土器	椀	5.3以上	(13.8)		砂粒多い	○	○			積上げ	ナデ後刷毛目	ナデ後刷毛目	赤橙色	
44	弥生土器	椀	6.3	(13.4)		砂粒多い		○			積上げ	ヘラ削り後ヨコナデ	ナデ	明黄褐色	
45	弥生土器	椀	5.5	14.8			○	○	○		積上げ	ヘラ削り後ヨコナデ	ヨコナデ後中央部不定方向ナデ	褐色	
46	弥生土器	手捏ね	3.2	4.0		砂粒少ない		○			手捏ね	ナデ	指押え	明淡褐色	
47	弥生土器	台付き鉢		14.8			○	○	○		積上げ	ヘラ削り後ヨコナデ	ヨコナデ後中央部不定方向ナデ	赤褐色	

第６表　寺内遺跡出土遺物観察表（3）

No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm			胎土					成形	調整		色調	備考
			器高	口径	底径		石英	長石	角閃	雲母		外面	内面		
48	弥生土器	高坏			16.8		○		○		積上げ	ナデ	刷毛目	褐色	
49	弥生土器	長頸壷		10.2			○	○	○		積上げ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	黄褐色	
50	弥生土器	甕		(22.6)			○	○			積上げ	ヨコナデ後 刷毛目	ヨコナデ	褐色	外面に黒斑
51	弥生土器	器台	9.7	6.3	9.8		○		○		積上げ	ナデ　指押え		ナデ	
52	土師器	甕		(22.6)		砂粒多い	○	○			積上げ	ヨコナデ	ヘラ削り後 ヨコナデ	明淡褐色	
53	弥生土器	小型壷		(7.4)	胴部　(16.5)	砂粒多い	○		○		積上げ	ナデ	ナデ後刷毛目	褐色	
54	須恵器	甕		16.2		砂粒少ない					積上げ ロクロ成形	ヨコナデ カキ目	エコナデ 同心円文タタキ	灰色	
55	須恵器	坏身			9.0	砂粒少ない		○			ロクロ成形	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色	
56	須恵器	坏身			9.2						ロクロ成形	ヨコナデ	ナデ		底部ヘラ切り
57	須恵器	高坏			9.8	砂粒少ない	○				ロクロ成形	ナデ	ナデ	灰色	
58	土師器	坏身		(13.8)		砂粒少ない		○			積上げ			明黄褐色	
59	土師器	高坏			脚部11.0	砂粒少ない					積上げ	ナデ後ケズリ	ナデ後ケズリ	淡褐色	
60	須恵器	坏蓋	3.9	10.7		砂粒少ない	○	○			ロクロ成形	ヨコナデ ヘラ削り	ヨコナデ	灰白色	
61	須恵器	坏蓋	2.3以上	9.6		砂粒少ない	○	○	少		ロクロ成形	ヨコナデ ヘラ削り	ヨコナデ	灰色	ヘラ記号
62	須恵器	坏蓋		15.0		砂粒少ない					ロクロ成形	ヨコナデ ヘラ削り	不定方向ナデ	灰色	
63	弥生土器	甕		16.3			○	○			積上げ	ナデ後刷毛目	ナデ	淡褐色	
64	弥生土器	甕		頸部12.6			多	○	○		積上げ	ナデ後刷毛目	ナデ後刷毛目	褐色	
65	土師器	小型丸底壷			胴部　7.2	砂粒少ない	○		○		積上げ	ナデ後刷毛目	ナデ、ヘラ削り	赤褐色	内外面とも朱
66	土師器	手捏ね	4.0	6.2		砂粒少ない	○	○	○		手捏ね	ナデ	指押え	赤褐色	
67	土師器	鉢		13.7		砂粒少ない	○	○	○		積上げ	ナデ後刷毛目		黄褐色	
68	須恵器	瓶	12.7	11.5	体部　9.7			○			ロクロ成形	ヘラ削り後 ヨコナデ	ナデ	灰色	頸部に櫛描波状文

第７表　寺内遺跡出土遺物観察表（4）

No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm 高さ	中高	厚さ	重量 g	備考
69	石包丁	輝緑凝灰岩	9.1以上	4.1	0.7	47.3	

No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm 器高	口径	底径	調整 外面	内面	備考
70	竜泉窯系	青磁碗	6.9	15.8	6.0		飛雲丈	12C代
71	関西	陶器土瓶	12.2	7.8	9.2	緑釉、白釉、鉄釉	白釉、無釉	19C代
72	福岡？	擂鉢		(30.0)	10.2			19C代？
73	陶器	秉燭	1.1以上		3.7			中心に軸の穿孔 底部に回転糸切り
74	肥前	染付磁器碗	5.5	7.2	3.4	雪輪文	コンニャク印版	18C後半
75	肥前	染付磁器碗	5.0	10.2	4.0	松竹梅		18C後半「大明年製」崩れ銘　二重圏線
76	関西	陶器土瓶	11.8	(6.8)	(9.0)			
77	肥前	色絵磁器碗	3.3	7.2	2.8			19C代　一重圏線

No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm 器高	口径	底径	胎土	石英	長石	角閃	雲母	成形	調整 外面	内面	色調	備考
78	弥生土器	器台		(11.8)		砂粒少ない	○	○	○		積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙褐色	
79	土師器	甕		(13.4)		砂粒多い	○	○	○		積上げ	ヨコナデ	ヘラ削り後 ヨコナデ	淡橙褐色	内面にスス付着
80	土師器	甕		(15.4)		砂粒多い	○	○	○		積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色	
81	土師器	椀		(17.6)		砂粒少ない	○	○			積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙褐色	
82	弥生土器	高坏			13.8	砂粒多い	○	○	○		積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙褐色	４ヶ所に透かし穴
83	土師器	椀		(14.8)		砂粒少ない	○	○			積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙褐色	外面にスス付着
84	土師器	坏	2.9	11.0	5.8	砂粒少ない	○	○	○		ロクロ成形	ヨコナデ	ナデ	淡橙褐色	底部糸切り

No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm 器高	口径	底径	調整 外面	内面	備考
85	肥前	染付磁器碗			(6.4)			1780～1810年　広東碗
86	肥前	染付磁器碗	5.4	(7.6)	3.4	菖蒲		19C前半～中頃
87	肥前	染付磁器碗	5.5	(8.6)	3.2			18C後半　一重圏線
88	瀬戸	陶器碗			(4.2)			19C代
89	肥前糸	染付磁器碗	3.1	6.5	3.1	文字「春、青、歳、萬、壽」		19C前半
90		陶器蓋		3.6	7.0			19C代　底部糸切り

第８表　寺内遺跡出土遺物観察表（5）

No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm 器高	口径	底径	調整 外面	内面	備考
91	弥生土器	陶器皿	2.9	(10.2)	4.2			19C代
92	佐賀内野山系	陶器皿			3.7			17C末～18C前半
93	福岡？	擂鉢						19C代
94	小石原か小鹿田	陶器萎子 徳利		(3.2)	胴部（10.2）	黒釉、灰釉		19C代　イッチン掛け
95	小石原か小鹿田	陶器萎子 徳利			(9.0)	黒釉、灰釉		19C代　イッチン掛け
96	瓦	軒丸瓦						左回転巴文
97	瓦	軒丸瓦						左回転巴文、珠点12個
98	瓦	軒平瓦						均整唐草文
99	瓦	軒平瓦						均整唐草文
100	瓦	軒平瓦						均整唐草文
101	瓦	軒平瓦						均整唐草文
102	瓦	鯱瓦						

No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm 長さ	幅	厚さ	重量 g	備考
103	銅銭	寛永通宝	2.3	—	0.1	2.6	新寛永
104	打製石斧	結晶片岩	10.7以上	5.8	1.4	141.0	
105	敲石	玄武岩	11.0	3.5	2.3	159.0	
106	砥石	砂岩質頁岩	8.6	4.0	2.7	192.8	

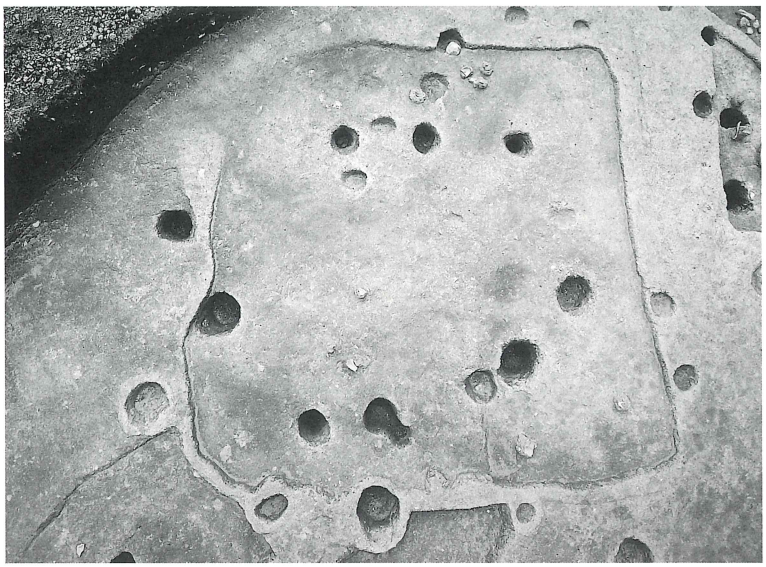
No.	種別	器種	規格（ ）は復元径・cm 器高	口径	底径	調整 外面	内面	備考
107	肥前	染付磁器碗	4.2以上	(8.0)				1820～1860年　小丸碗
108	肥前	染付磁器碗	3.8以上	(9.2)		笹		18C末　小広東碗
109	肥前	染付磁器碗	5.2	(6.8)	3.8	菊花		1820～1860年　小丸碗
110	肥前	染付磁器碗	6.1	(10.8)	4.2			18C前半　「大明年製」二重圏線
111	小石原か小鹿田	陶器徳利		3.6		黒釉		19C代
112		陶器灯火具	3.3	5.8				19C代
113	関西	陶器土瓶	10.8	(9.2)	(9.2)	黒釉、鉄釉		19C代
114	福岡、肥前	擂鉢		(27.6)				19C代
115	福岡、肥前	擂鉢			(9.6)			19C代
116	肥前	陶器甕			胴部（31.0）			19C代

写　真　図　版

寺内遺跡A調査区全景

寺内遺跡中世土壙墓

図版　1



1号竪穴跡

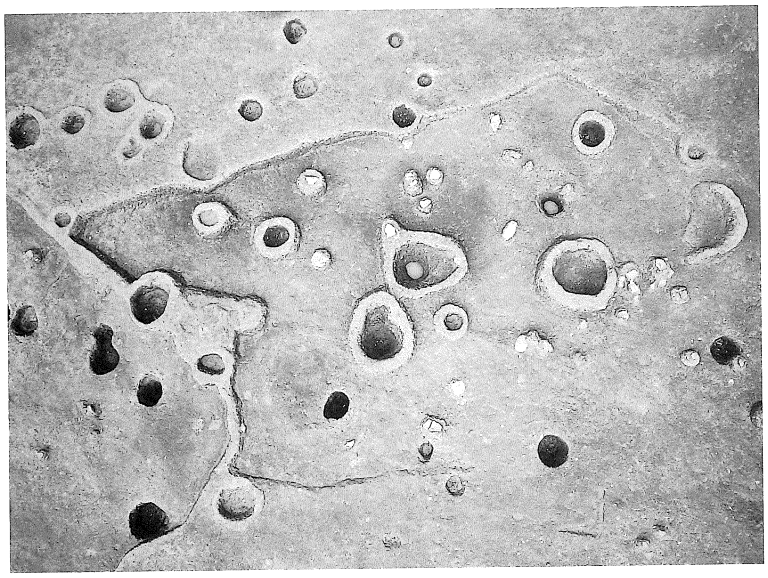
2号竪穴跡

3号竪穴跡

図版　2

３号竪穴跡遺物出土状況

４・５・６号竪穴跡



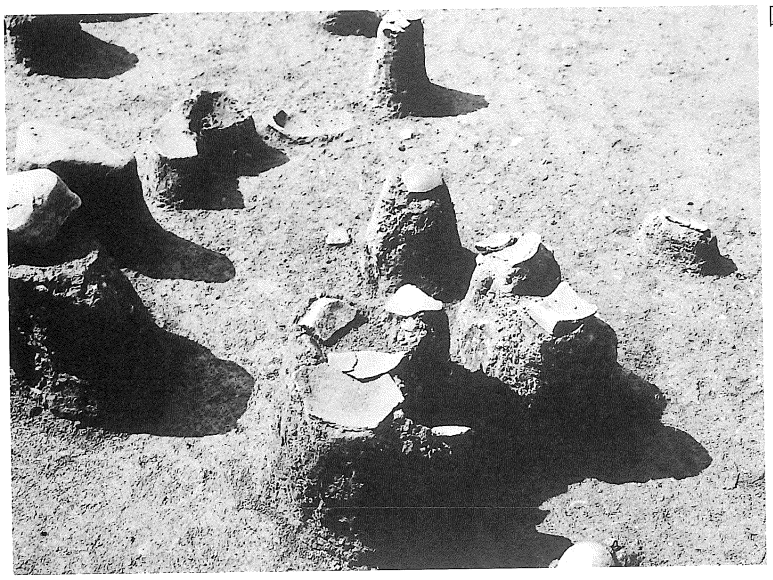
７・８号竪穴跡

図版　3

９号竪穴跡

10号竪穴跡

１２号竪穴跡



12号竪穴跡遺物出土状況

13号竪穴跡

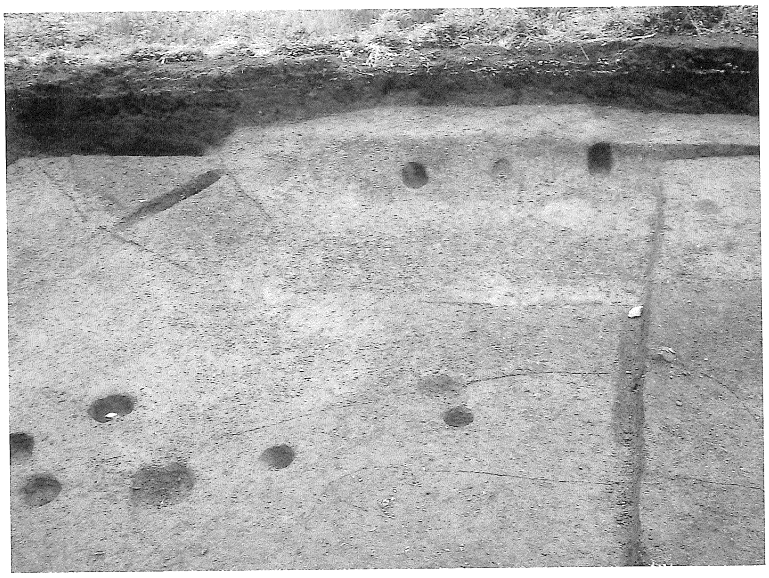
13号竪穴跡遺物出土状況

図版　5

１４号竪穴跡

１６号竪穴跡

１７号竪穴跡

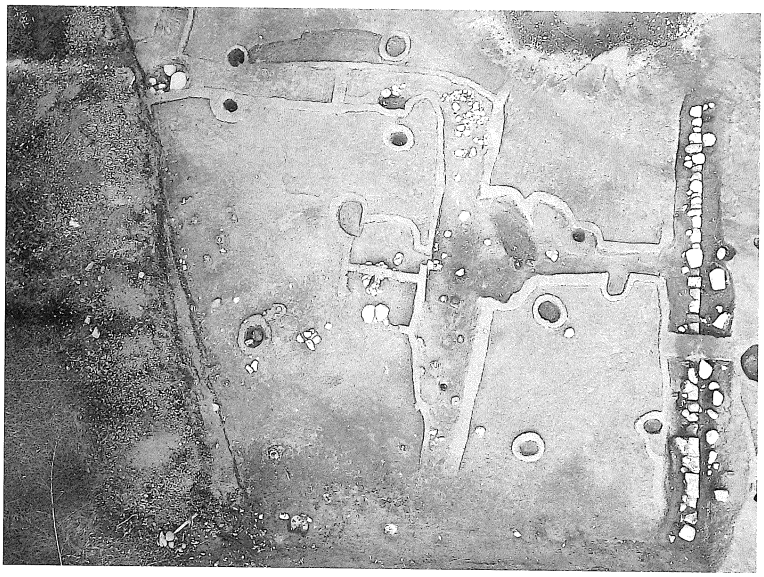


周溝状遺構（北から）

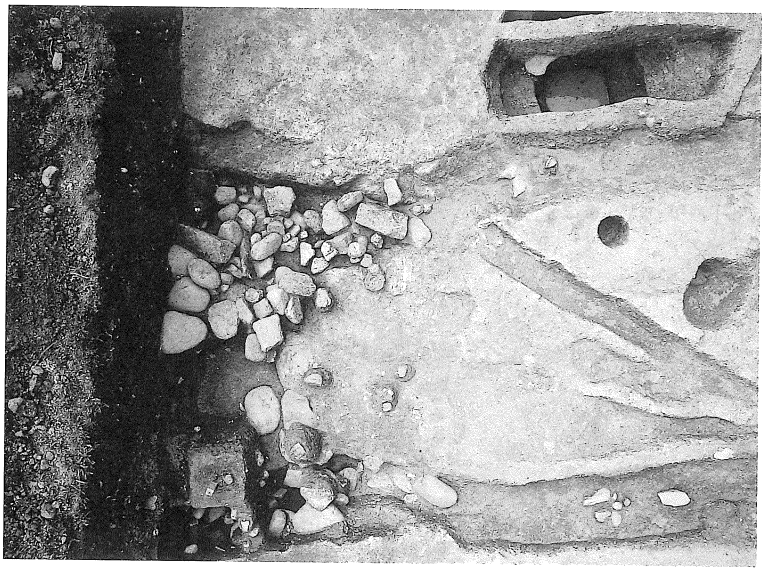
周溝状遺構（東から）

中世土壙墓青磁椀出土状況

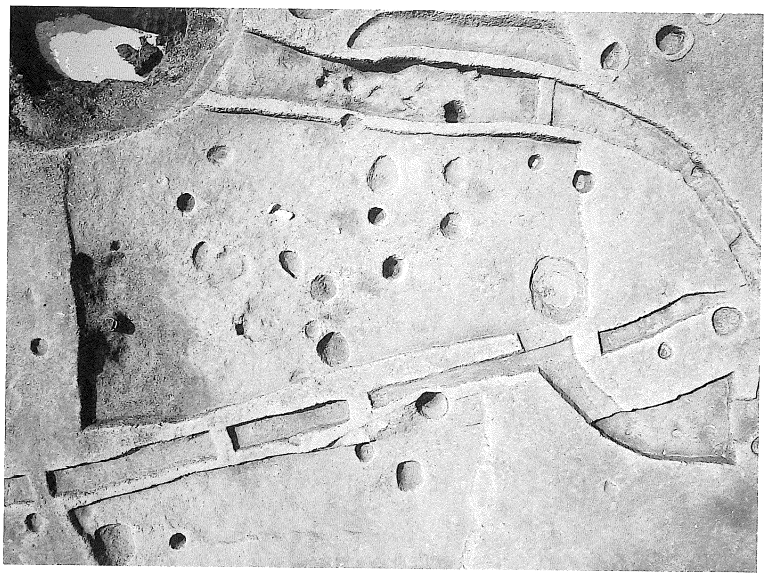
図版　7



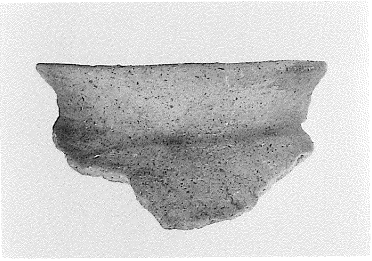
1・3・4号溝

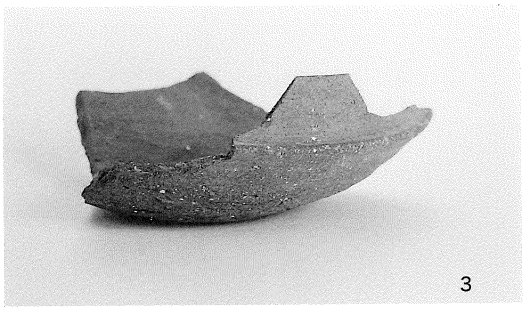


石組土坑



5・6・7号溝

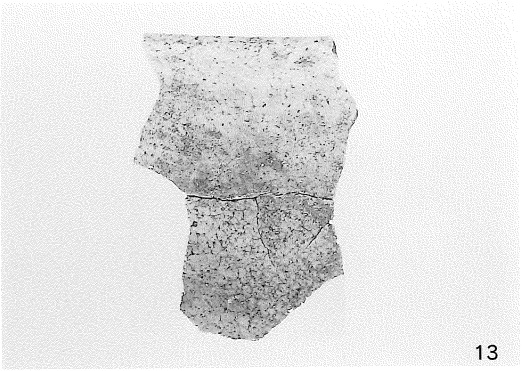

1


3

7

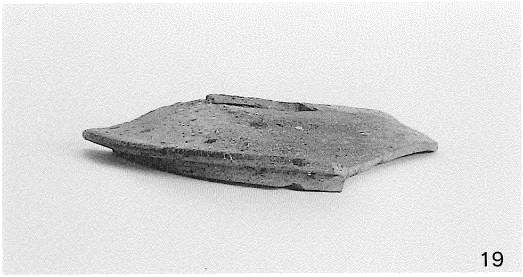
8

11


13

16

17


19

寺内遺跡出土遺物１

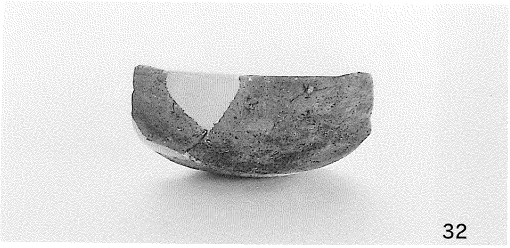
図版　9

23

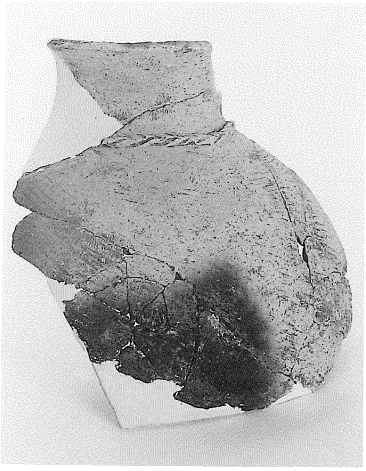
29

24

30


32

25


33

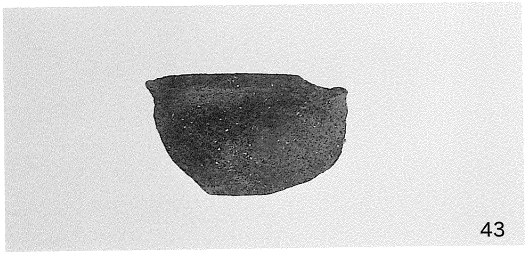
26

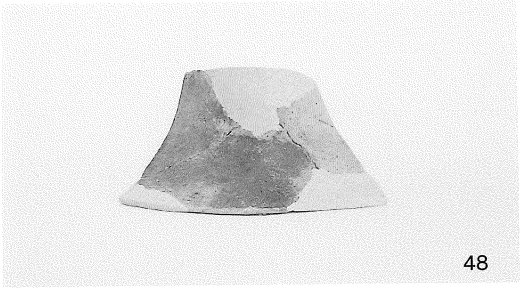
34

寺内遺跡出土遺物２

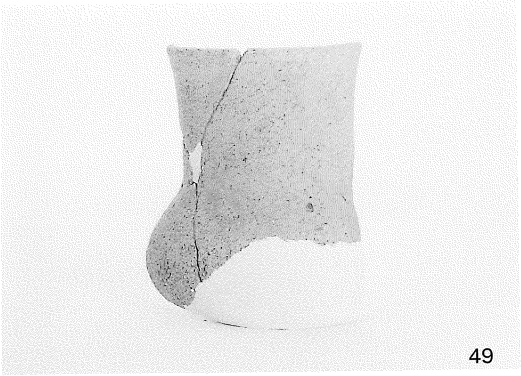
39

47


43


48

44


49

45

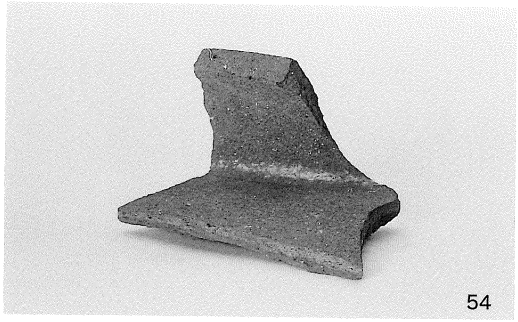
51

46

52

寺内遺跡出土遺物３

図版　11

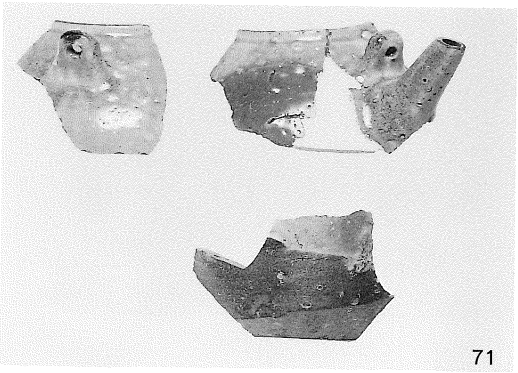

54

65

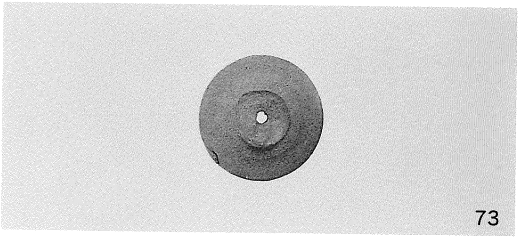
55

68

57


71

59

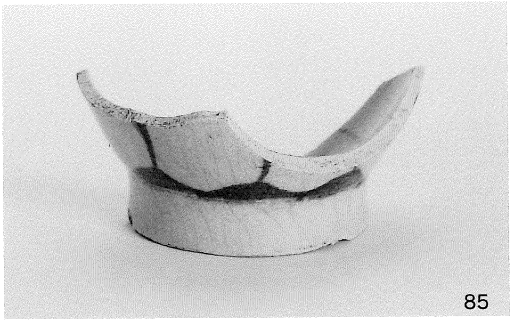

73

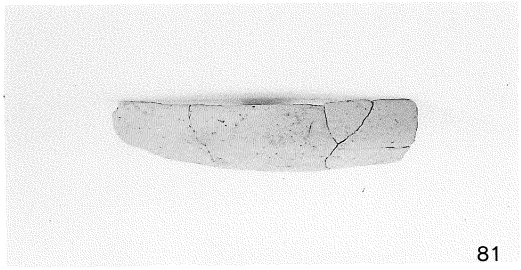
61

74

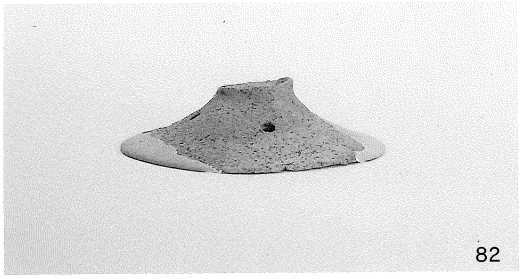
寺内遺跡出土遺物４

75

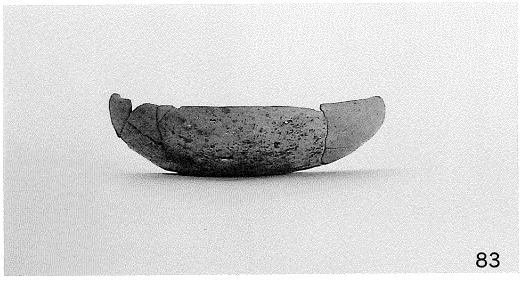

85


81

86


82

87


83

90

54

54

寺内遺跡出土遺物５

図版　13

94

111

112

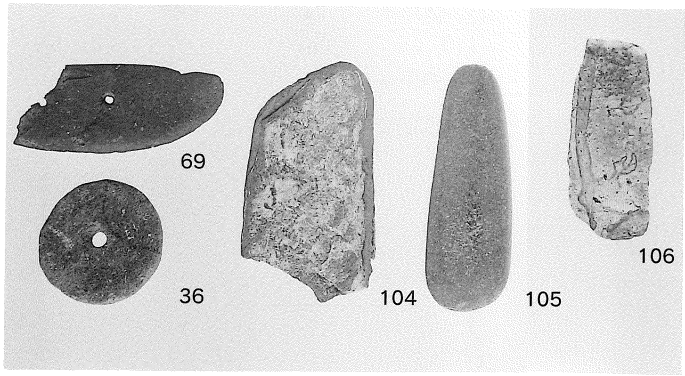
95

113

109

116

110



寺内遺跡出土遺物６

第４章　上野第２遺跡

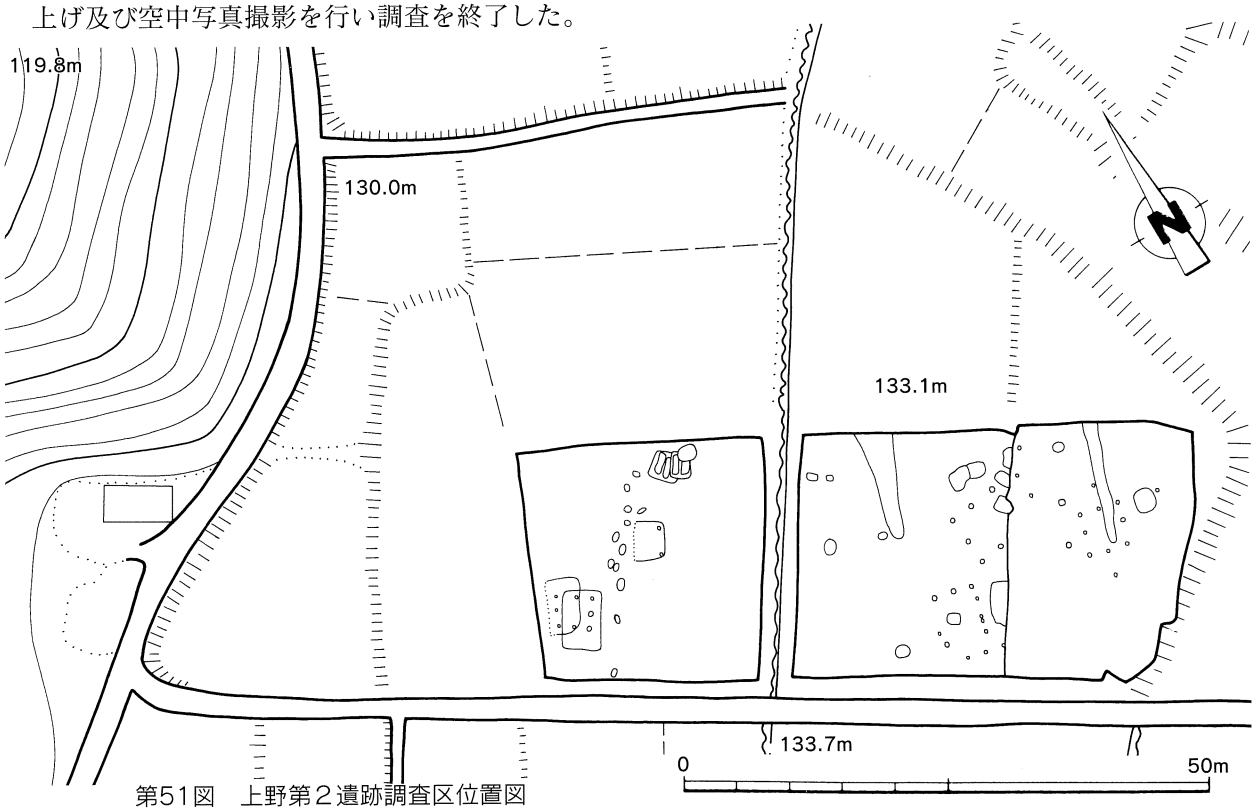
第１節　上野第２遺跡の調査経過と概要

上野第２遺跡は、一般国道210号「日田バイパス」として計画された日田市大字高瀬字土迫と大字石井字串川を結ぶ区間の中にあり、谷を挟んで東側には「上野第１遺跡」が、丘陵地を越えて西側には「寺内遺跡」が立地している。上野第２遺跡の所在する日田市上野町字向原（むかいばる）は、日田市三隈川の南岸にあたる「原（はる）」とよばれる阿蘇熔結凝灰岩で形成される台地の一部である上野台地の南西部にあたっている。向原一帯は標高130～150m程度の丘陵地が周囲に広がり、バイパス建設予定地は南から北へと続く丘陵地の緩斜面の中腹にあたり、東側は谷筋に向かって地形が傾斜し、西側へも緩やかに傾斜している。

向原付近の土地利用に関しては、近世より明治時代にかけて山林として利用されていたものが大正時代の「耕地整理事業」によって水田化され、現在でも丘陵地周辺からの自然の湧水と灌漑設備を利用した水田耕作が行われ、西側一帯は山林として利用されている。

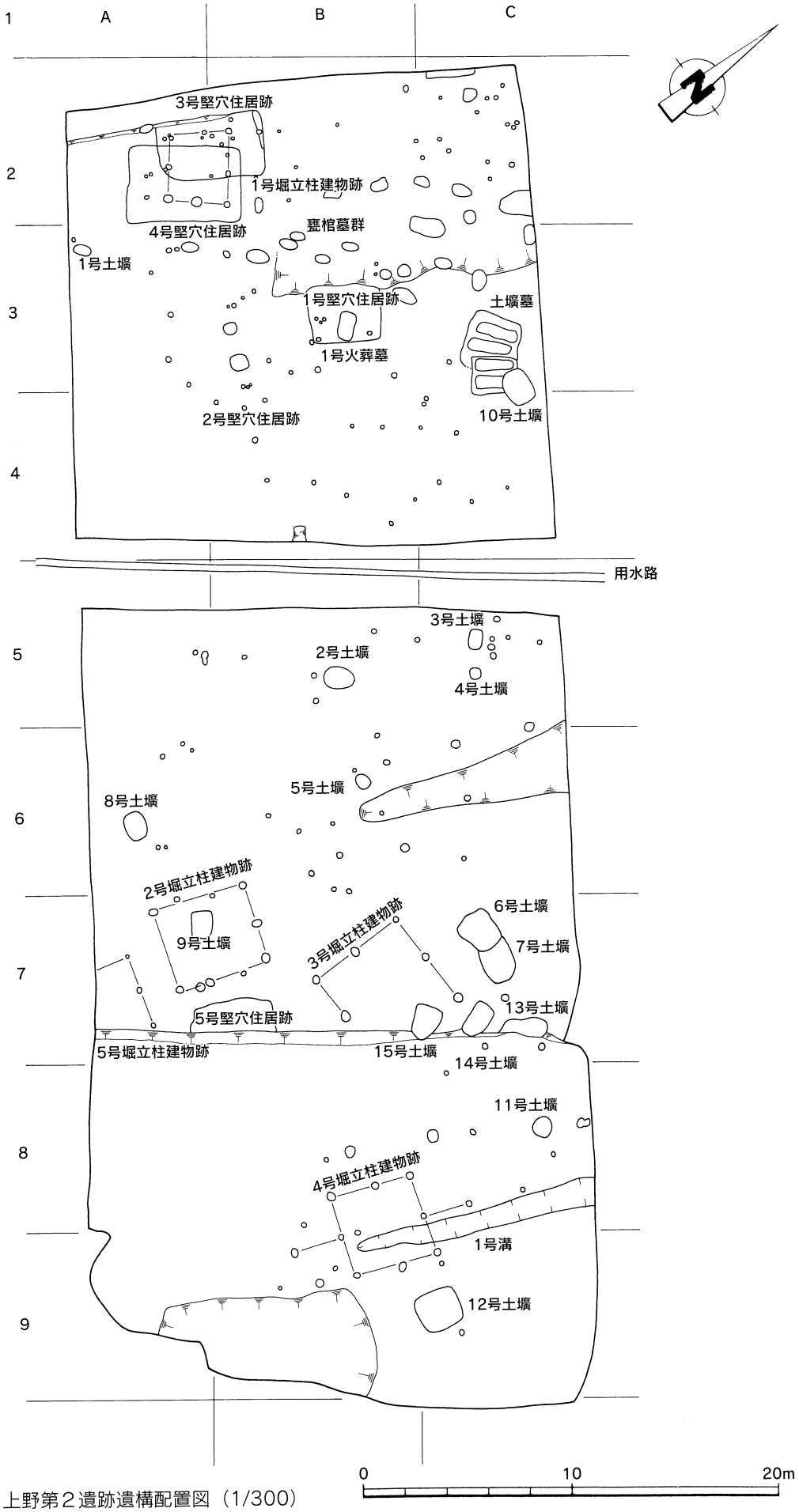
調査はまず平成12年６月５日～７日にかけて、東側をはしる市道から西側の里道付近のバイパス建設予定地内を対象として試掘調査を行った。試掘調査は、重機を使用して調査対象地域の東西方向に幅約２mのトレンチを掘削することにした。そして、調査区西側の表土（水田耕作跡土）を除去中に甕棺の一部を検出した。そのため、トレンチ部分を拡張し住居跡・甕棺片・柱穴を、調査区東側より住居跡・溝・柱穴を検出し試掘調査を終了した。調査の結果、表土（水田耕作土）の直下が遺構面であり、その遺構面も後世の攪乱により上部が削平されていることがわかった。

本調査は、試掘調査の際に遺構を検出した地域に調査区（第51図・約1500㎡）を設定し、平成12年10月24日～12月27日にかけて行われた。本調査は、まず東側から重機による表土剥ぎを行い、その後は手掘りによる遺構の検出に努めた。主な遺構は、調査区西側から甕棺墓群・竪穴住居跡・土壙墓・火葬墓を、東側からは掘立柱建物跡を検出した。その後、遺構を完掘し実測・遺物の取り上げ及び空中写真撮影を行い調査を終了した。

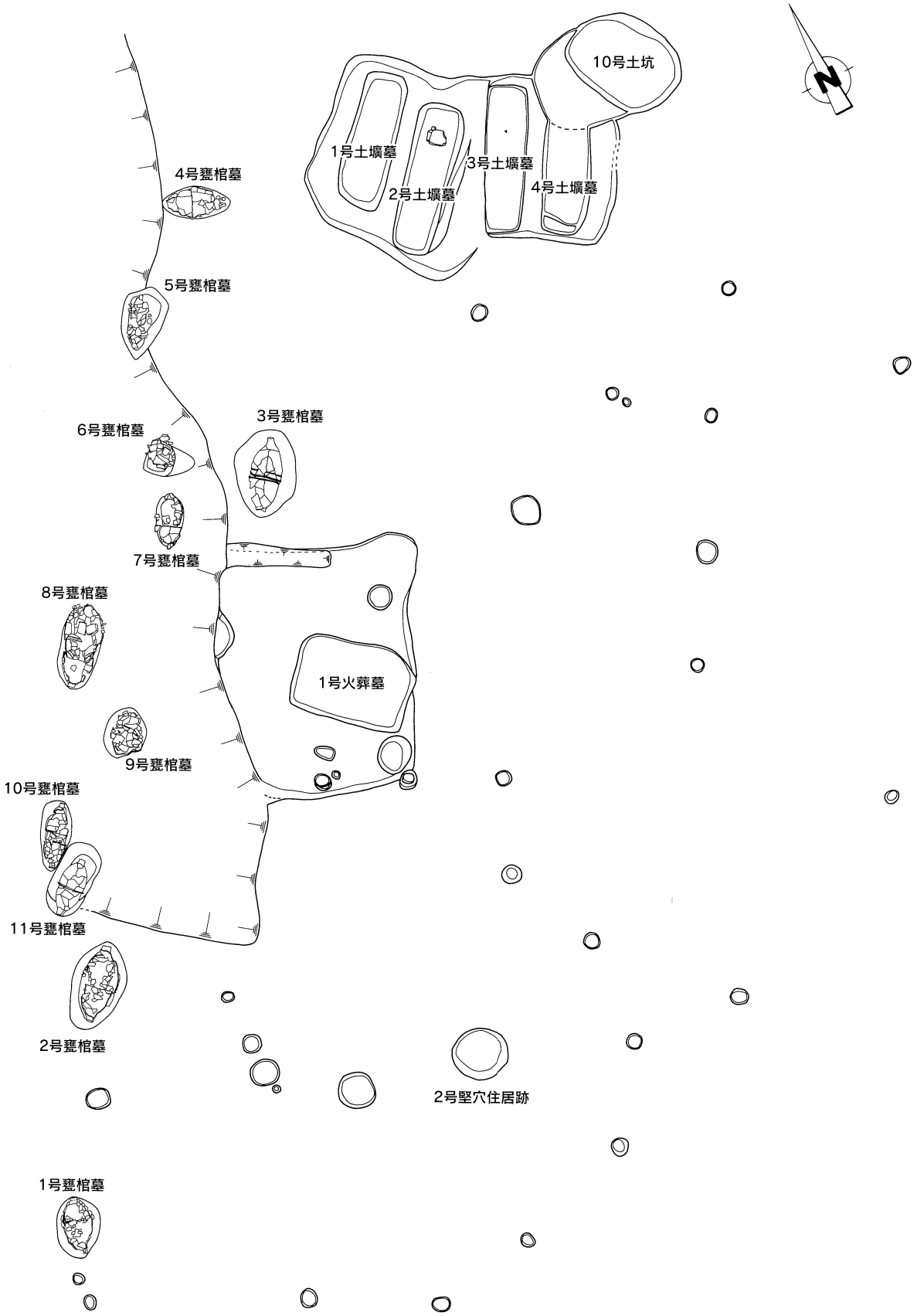


第51図　上野第２遺跡調査区位置図

第52図　上野第２遺跡周辺地形図



第53図　上野第２遺跡遺構配置図（1/300）



第54図　上野第２遺跡埋葬遺構配置図（1/80）

0　4m

第２節　調査の成果

１．竪穴住居跡

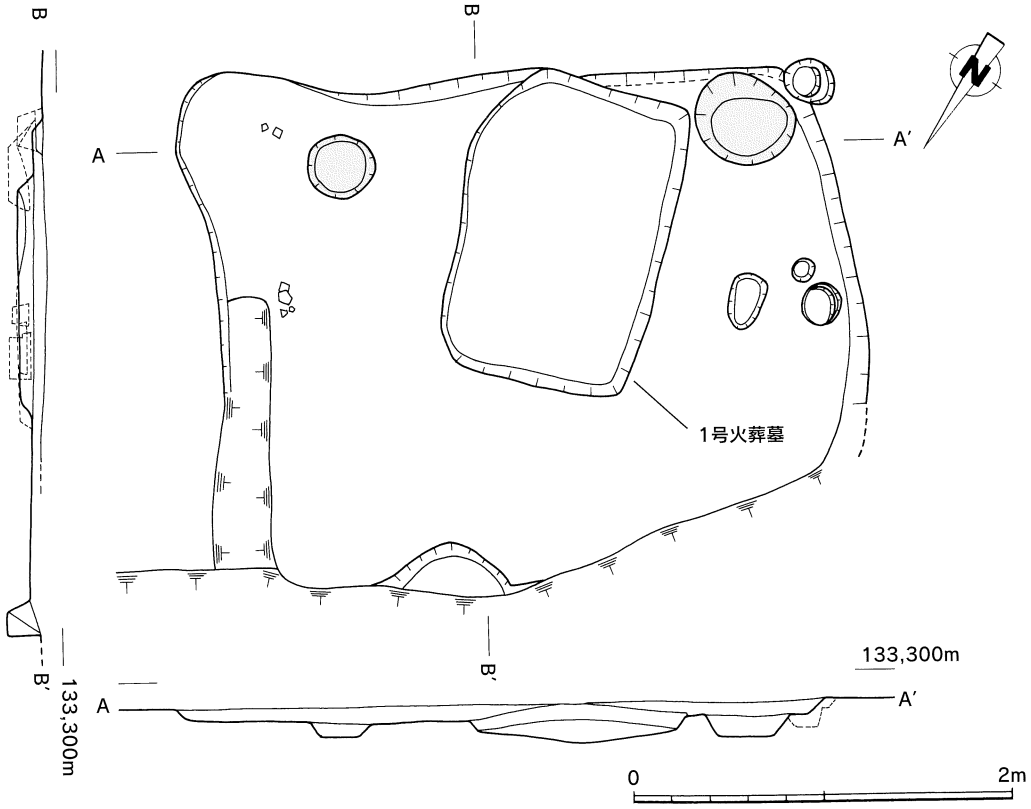
上野第２遺跡からは５軒の竪穴住居跡を検出したが、うち４軒は調査区西側の２－A・B区及び３－A・B区からであり、甕棺墓群のすぐ東側である。住居跡は、住居壁がかなり削平されており柱穴しか留めない円形住居跡も含まれている。

尚、調査区の遺構番号に関しては検出時に番号を付したため、番号が調査区全体に散財する結果となった。

（１）１号竪穴住居跡（第55図）

調査区３－B区で検出した方形竪穴建物跡であると思われるが、北西部分が削平を受けており不正形な形で検出された。建物跡は長辺約3.2m・短辺約2.6mが残存しており、主柱穴は南西側の長辺に２本残っている。柱穴の残りは浅く、竪穴も上部から削平されており住居壁は床面まで数cm程度しかない。底部はほぼ水平であり、床の張土の跡は確認できなかった。

また、住居跡内で南東側の長辺を一部切るような形で１号火葬墓を検出している。さらに、住居跡の北西側では甕棺墓群と接している。遺物は、弥生土器片が数点出土したのみである。

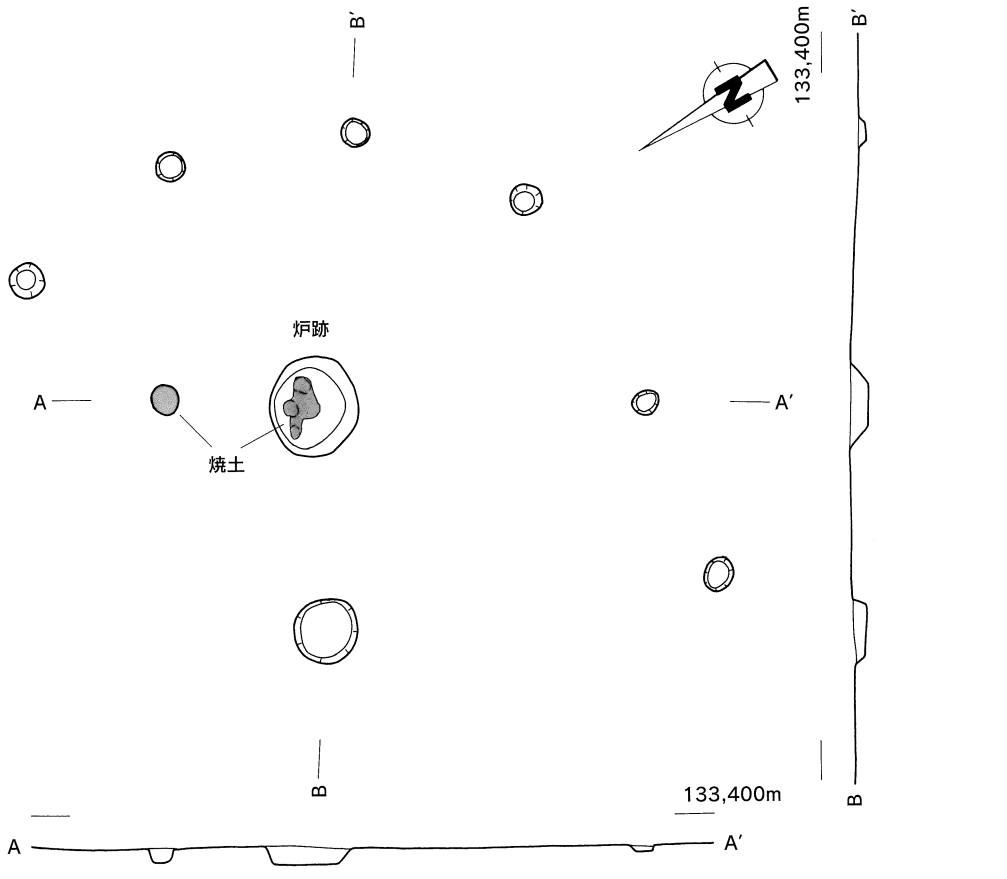


第55図　１号竪穴住居跡実測図（1/40）

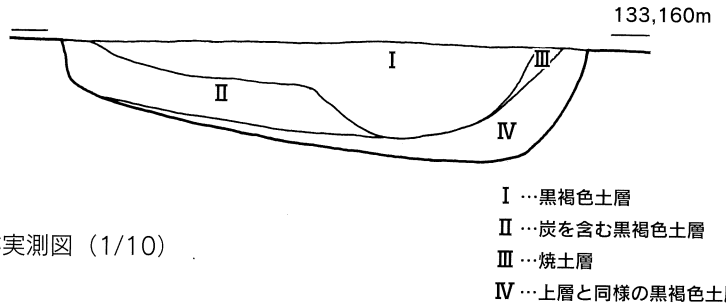
（２）２号竪穴住居跡（第56図）

調査区３・４—A区～３・４—B区の１号竪穴建物跡の南側で検出した円形竪穴建物跡である。後世の削平により、柱穴の一部を喪失しているが、他の柱穴が円形に回ることから平面形は円形を呈すると思われる。住居跡は直径約6.2mで柱穴間の距離は約1.4mで各々対をなしてほぼ等間隔に配置されていたと考えられる。しかし、柱穴の残りは浅く住居壁は完全に喪失している。

一方、竪穴の中心部には直径約0.7mの炭の混じった焼土層が確認され炉跡ではないかと思われる。また、その北側に残りは浅いが直径約0.2mの焼土を確認している。尚、この住居跡からは遺物は殆ど検出できなかった。



第56図　２号竪穴住居跡実測図（1/60）



第57図　２号竪穴住居跡炉跡実測図（1/10）

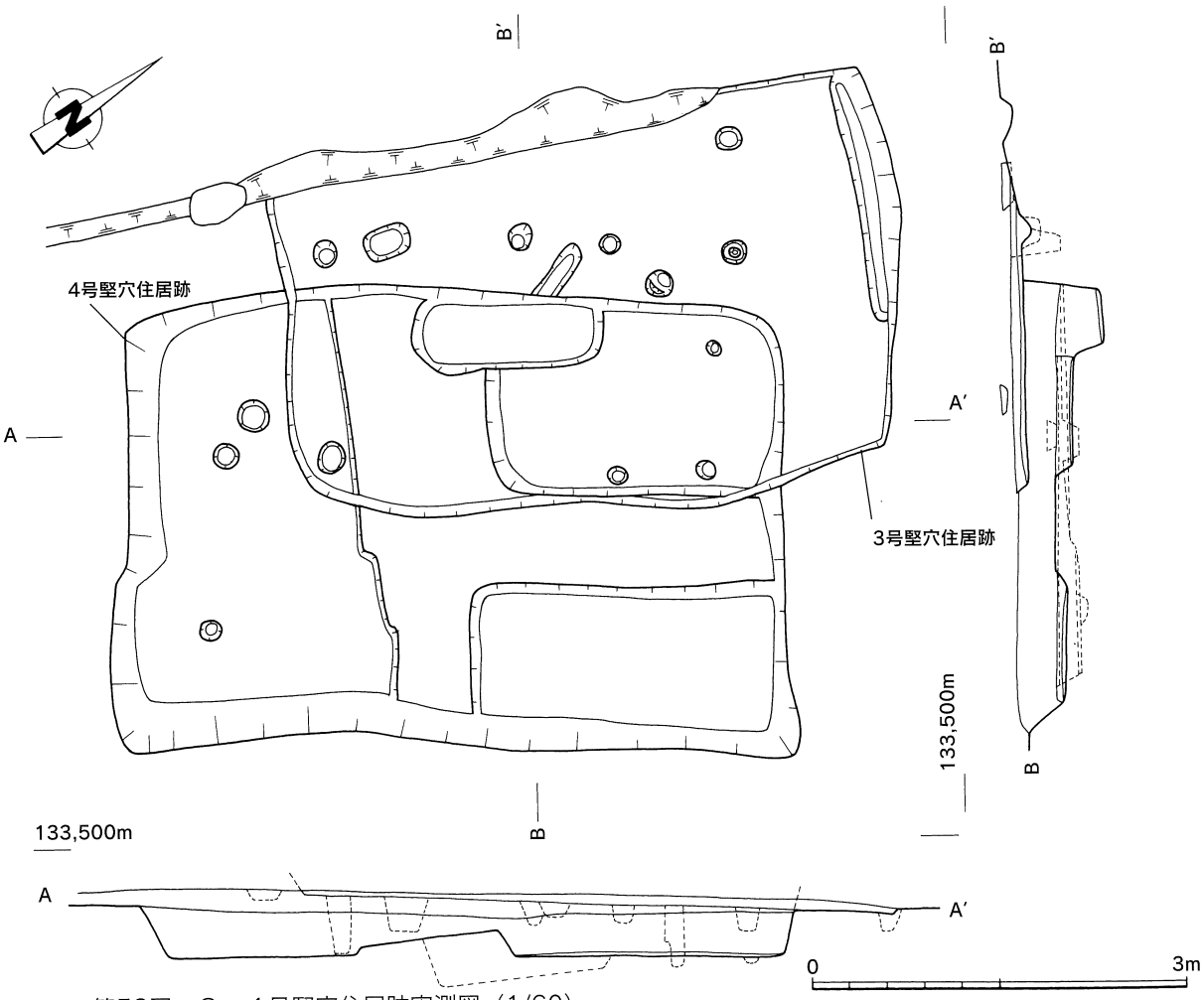
（３）３号竪穴住居跡（第58図）

調査区２－A区～３－A区にかけて、１号掘立柱建物跡を調査中に検出した長方形の竪穴住居跡である。建物跡は長辺約５m・短辺約3.2mで、北西側の長辺は後世の削平をうけて大部分を喪失している。また、住居壁も上部を殆ど削平されており床面まで10cm程度を残すのみである。柱穴の残りも浅く、遺物も殆ど出土していない。

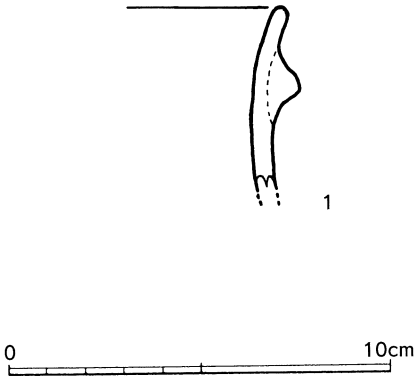
（４）４号竪穴住居跡（第58図）

３号竪穴住居跡を発掘中に床面より住居跡の一部を確認し、その後の調査で検出した隅丸長方形の竪穴建物跡である。建物跡は長辺約５、２m・短辺約３、２m・床面積16.6㎡の規模で３号竪穴住居と同レベルまで遺構の上面を削平されたと思われる。また、３号竪穴住居跡とは住居跡の北東側で交わっており、住居壁は床面まで約30～40cm程度が残っていた。

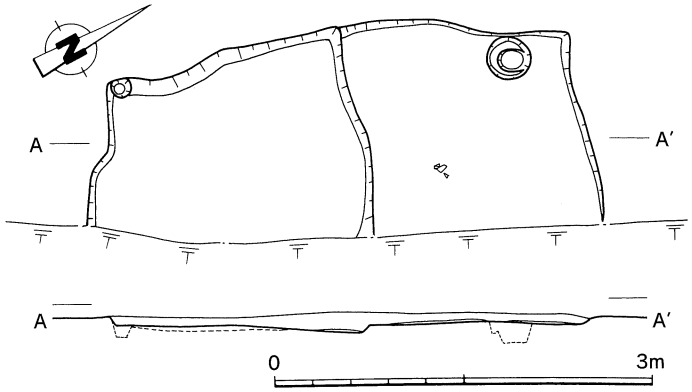
住居跡はの内部が３つの区画に区切られており、区画と区画の間が凸状に約20cm程度高くなっているのが特徴である。また、住居跡北西の長辺に接して1.4m×0.6mの長方形の土抗を有している。主な遺物は、縄文晩期土器片（深鉢口縁部・第60図）が１点出土している。



第58図　３・４号竪穴住居跡実測図（1/60）



第59図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/2)



第60図　５号竪穴住居跡実測図（1/60）

第９表　４号竪穴住居跡出土遺物観察表

※（外）外面　（内）内面（口）口縁

番号	器　種	法量（cm）			紋　様	調　整	胎　土	色　調
		口径	底径	器高				
1	深鉢口縁部	不明	不明	不明	無刻目突帯紋	（口）横ナデ	白色砂粒・石英・角閃石・長石を含む	（外）暗赤褐色 （内）明赤褐色

（5）５号竪穴住居跡（第60図）

調査区７－A区～７－B区にかけて検出した、現存する長辺約４m・短辺約1.6mの竪穴住居跡であり、南東部分を後世の削平によって喪失しており形状は不明である。住居壁は床面まで10cm程度が残っている。床面はほぼ水平であるが、床面中央部に数cmの段差があり北側部分が高くなっている。主柱穴は住居跡北隅付近に一本確認できたのみである。尚、この遺構から遺物は弥生土器片が若干出土したのみである。

２.土坑

土坑に関しては、調査区のほぼ全域で検出されており、ここでは12号土坑を除く主要なもの15について記述する。これらの土坑は６・７・１３・14・15号土坑が近接している以外は、散在しており形態もまちまちで、出土遺物も12号土坑が比較的まとまっているのを除けば非常に少ない。そのため、各土抗の性格づけを困難なものにしている。

（1）１号土坑（第62図）

調査区３－A区で重機による表土剥ぎの際に検出した。形状は、長径約1.2m・短径約0.8mの楕円形をなし、深さは10cm程度が残存していた。底部は平面であり、直径10cmの柱穴を有する。

（2）２号土坑（第62図）

調査区５－Ｂ区で、試掘中に検出した長径約1.6m・短径約１mの楕円状の土坑である。深さは約40cmが残存しており、土抗のすぐ脇に柱穴２本を確認している。埋土は表面より15cm程度が炭を含む褐色土をなしており、その下層は炭を多く含む黒色土となっている。

（3）３号土坑（第62図）

調査区５－Ｃ区で検出した、長辺約１m・短辺約0.6mの長方形をした土坑である。深さは約20cmが残存しており、底部に直径20cmの柱穴を有している。

（4）４号土坑（第62図）

調査区５－C区の３号土坑のすぐ南東側で検出した土坑で、長辺約0.7m・短辺約0.5mの長方形に近い形状をしている。深さは約20cmが残存しており、底部は南側に向かってやや傾斜している。

（5）５号土坑（第62図）

調査区６－Ｂ区にある長辺約0.8m・短辺約0.6mの不整形な土坑である。後世の削平を受けており、深さは６～８cm程しか残っていない。

（6）６号土坑（第62図）

調査区７－Ｃ区で、３号掘立柱建物跡のすぐ北側に位置する長辺約1.8m・短辺約1.6mの不整形な土坑である。土坑は７号土坑を切る形になっており、深さは約40cmで底部は北側にテラスを有し緩やかなU字形をなしている。

（7）７号土坑（第62図）

調査区７－Ｃ区で、３号掘立柱建物跡のすぐ北側に位置する長辺約2.2m・短辺約1.6mの不整形な土坑である。土抗は６号土坑に切られる形になっており、深さは約30cmあり、底部は北側にテラスを有し緩やかなU字形をなしている。

（8）８号土坑（第62図）

調査区６－A区で検出した、長辺約1.2m・短辺約0.8mの長方形の土坑である。深さは約40cmで、底部は東側が若干高くなりテラス状となり西側へと傾斜している。検出面より15cm程が粘性に欠ける褐色土層をしている。

（9）９号土坑（第62図）

調査区７－A区で検出した、長辺約1.1m・短辺約１mの四角形に近い形状をしている土坑で深さは約20cm程度が残存しており、底部は南から北へと若干傾斜している。この９号土坑は、２号掘立柱建物跡の範囲内に位置している。しかし、土坑や土坑付近から建物跡と関連するような焼土・柱穴・土坑・遺物等を確認できなかった。

（10）10号土坑（第63図）

調査区３－Ｃ～４－Ｃ区にかけて検出した長辺約1.8m・短辺約1.5mの土坑で、長方形に近い形状をしている。土抗の深さは約30cm程度で底部はほぼ水平であり、３.４号土壙墓の墓域を北東側より一部切る形になっている。

(11) １１号土坑（第63図）

調査区８－Ｃ区で検出した、直径約0.8mの円形の土坑である。深さは約15cm程度が残存しており底部はほぼ水平になっている。

(12) 13号土坑（第63図）

調査区７－Ｃ区で検出した土坑で、東側が削平を受けており長辺約1.4m・短辺約１mの不整形な長方形をなしている。深さは約30cm程度あり、底部は東側高く西側へと緩やかに傾斜している。

(13) 14号土坑（第63図）

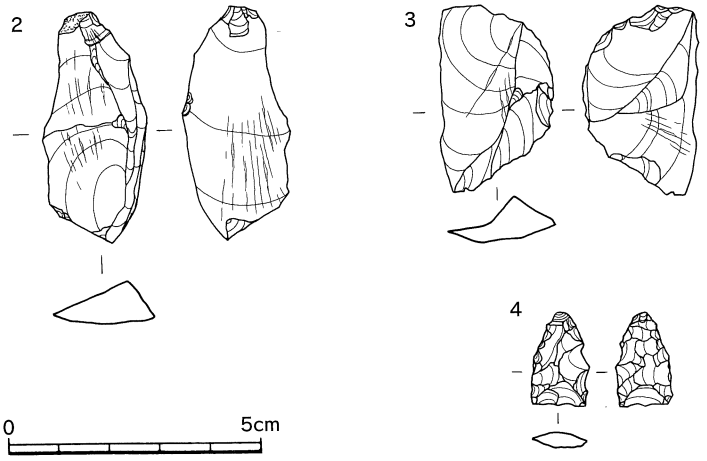
調査区７－Ｃ区で検出した土坑で、３号掘立柱建物跡のすぐ東側に位置している。土坑は東の一部が削平されており、長方形に近い形状で長辺約1.8m・短辺約1.1m深さは約40cmあり、底部はほぼ水平である。

(14) 第15号土坑（第63図）

調査区７－Ｃ区で検出した土坑で、長辺約1.7m・短辺約1.4mの不整形な形状をしている。深さは約50cmで、底部はほぼ水平となっており３号掘立柱建物跡の範囲内に土坑の約２／３が存在している。

(15) 第16号土坑（第63図）

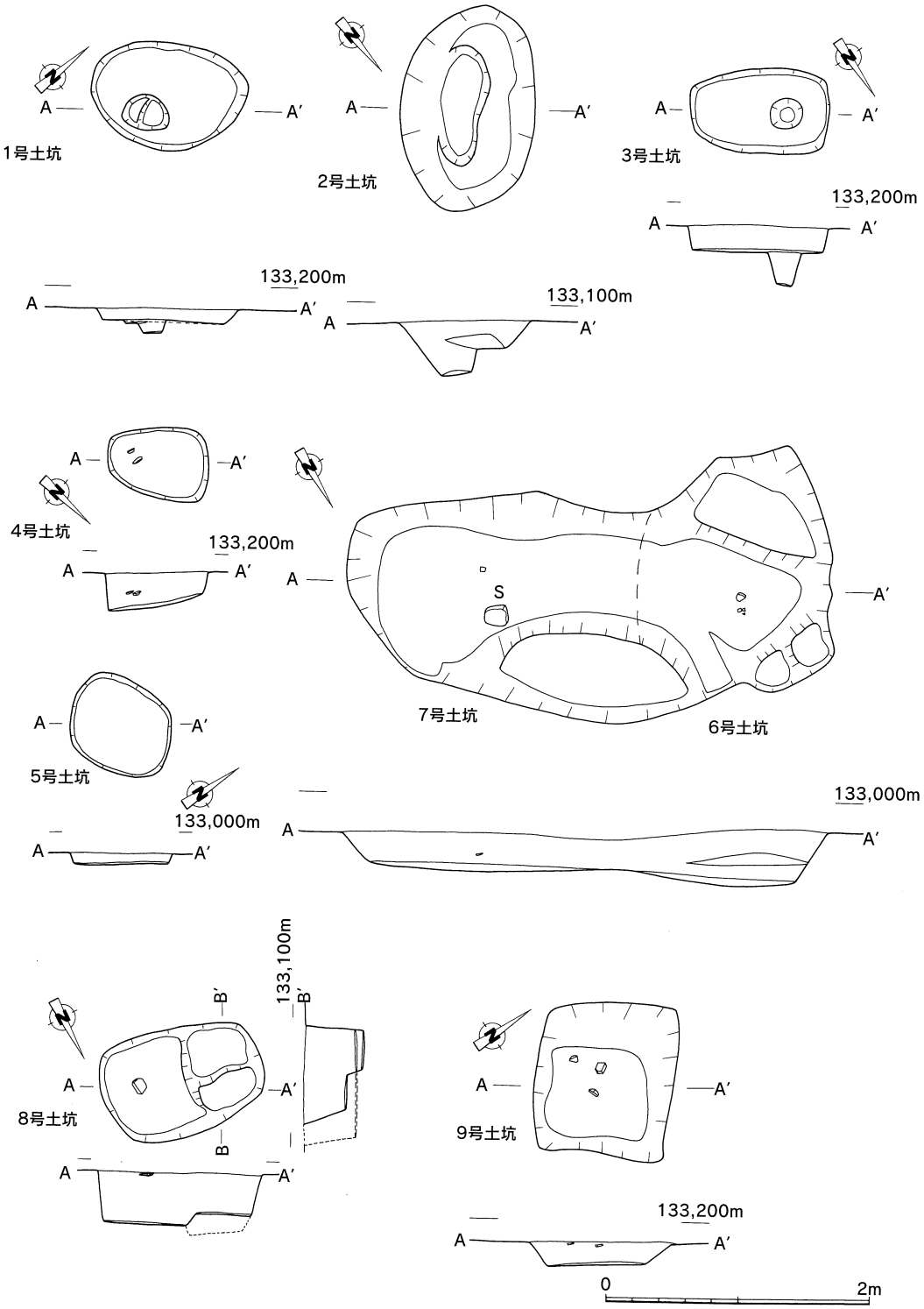
調査区７－Ｂ～７－Ｃ区で検出した、長辺約1.7m・短辺約1.1mの長方形に近い形状をしている。底部はほぼ水平であるが、北東側が一部テラス状になり高くなっている。また、土坑は甕棺墓群と並列する位置関係にある。



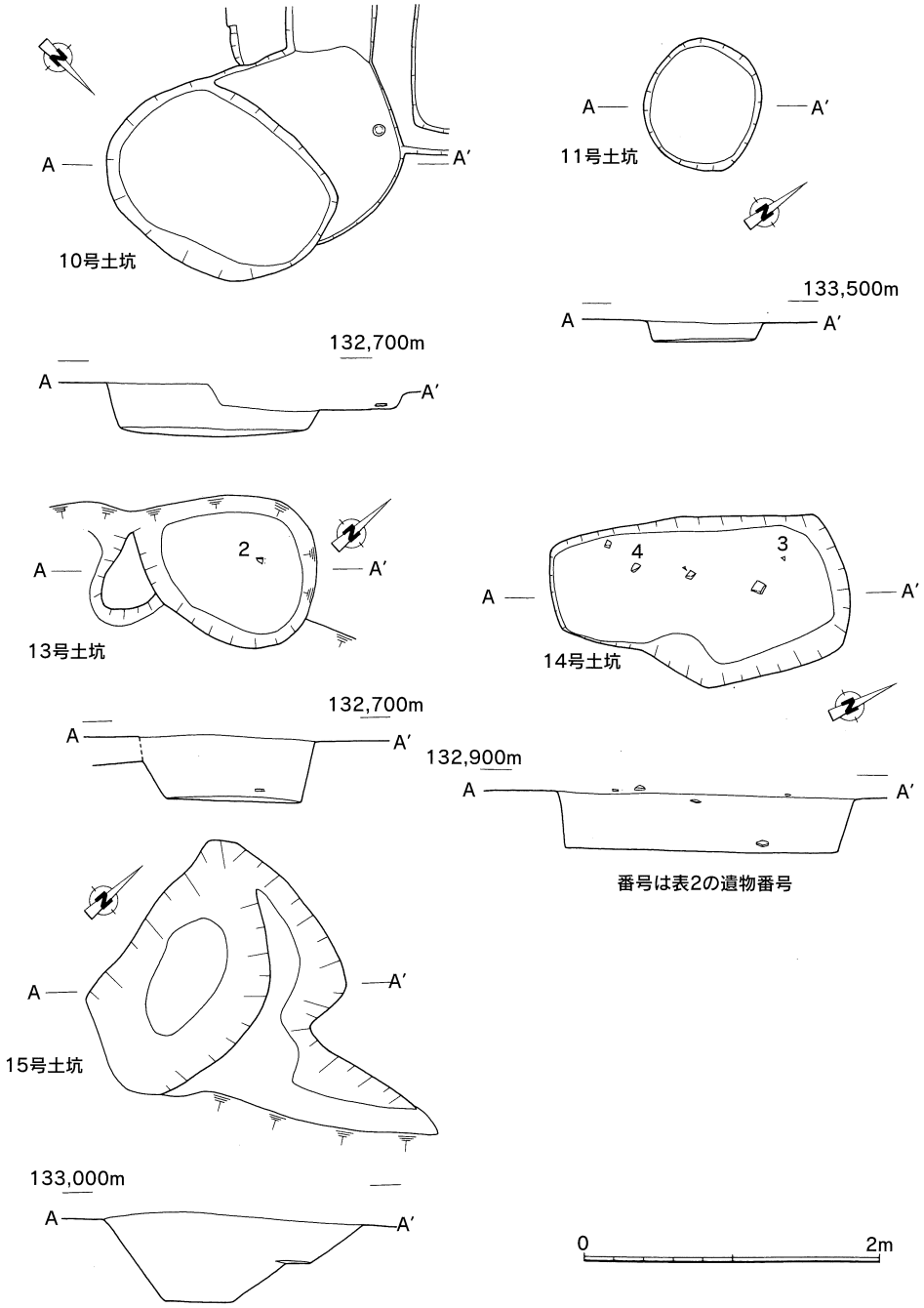
第61図　土坑出土遺物実測図（2/3）

第10表　土坑出土遺物観察表

番号	出土場所	器　種	石　材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備　考
2	13号土坑	剥　片	黒曜石	46	22	9	6.1	
3	14号土坑	剥　片	サヌカイト	19	12	3	0.7	
4	14号土坑	剥　片	黒曜石	39	36	10	5.7	



第62図　土坑実測図（1/50）（1号土坑～9号土坑）



第63図　土坑実測図（1/50）（10.11.13.14.15号土坑）

３.土壙墓

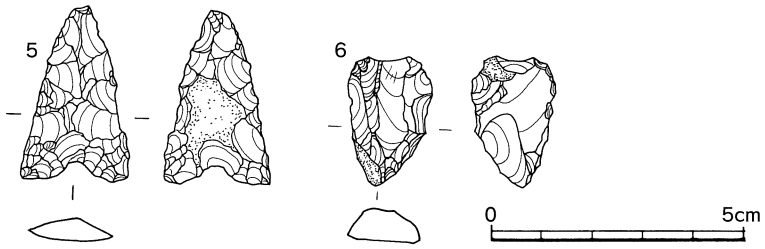
土壙墓は調査区北西の３－C区で検出し、２基で１つの墓域を形成しているのが特徴である。１・２号土壙墓の墓域は一辺が約2.5mの不整形な四角形をしており、東側の長辺を３・４号土壙墓の墓域に切られる形になっている。３・４号土壙墓の墓域は長辺約2.2m・短辺約1.8mの不整形な長方形の形状で、10号土坑により北東側の一部が削平されている。

（1）１号土壙墓（第65図）１号土壙墓は、長辺約1.6m・短辺約0.6mの隅丸長方形の形状で深さは約20cmが残っている。壁面は垂直に近く、底部は若干南西側が高くなっている。

（2）２号土壙墓（第65図）２号土壙墓は、１号土壙墓の東側に並行しており、長辺約2.1m・短辺約0.6mの隅丸長方形で、深さは約30cmが残っている。壁面は１号同様に垂直に近く底部はほぼ水平になっている。

（3）３号土壙墓（第65図）３号土壙墓は、長辺約２m・短辺約0.5mの長方形で深さは約30cmが残っている。壁面は垂直に近く、底部は中央に向かって若干傾斜している。遺物は、石鏃及び剥片石器が出土している。

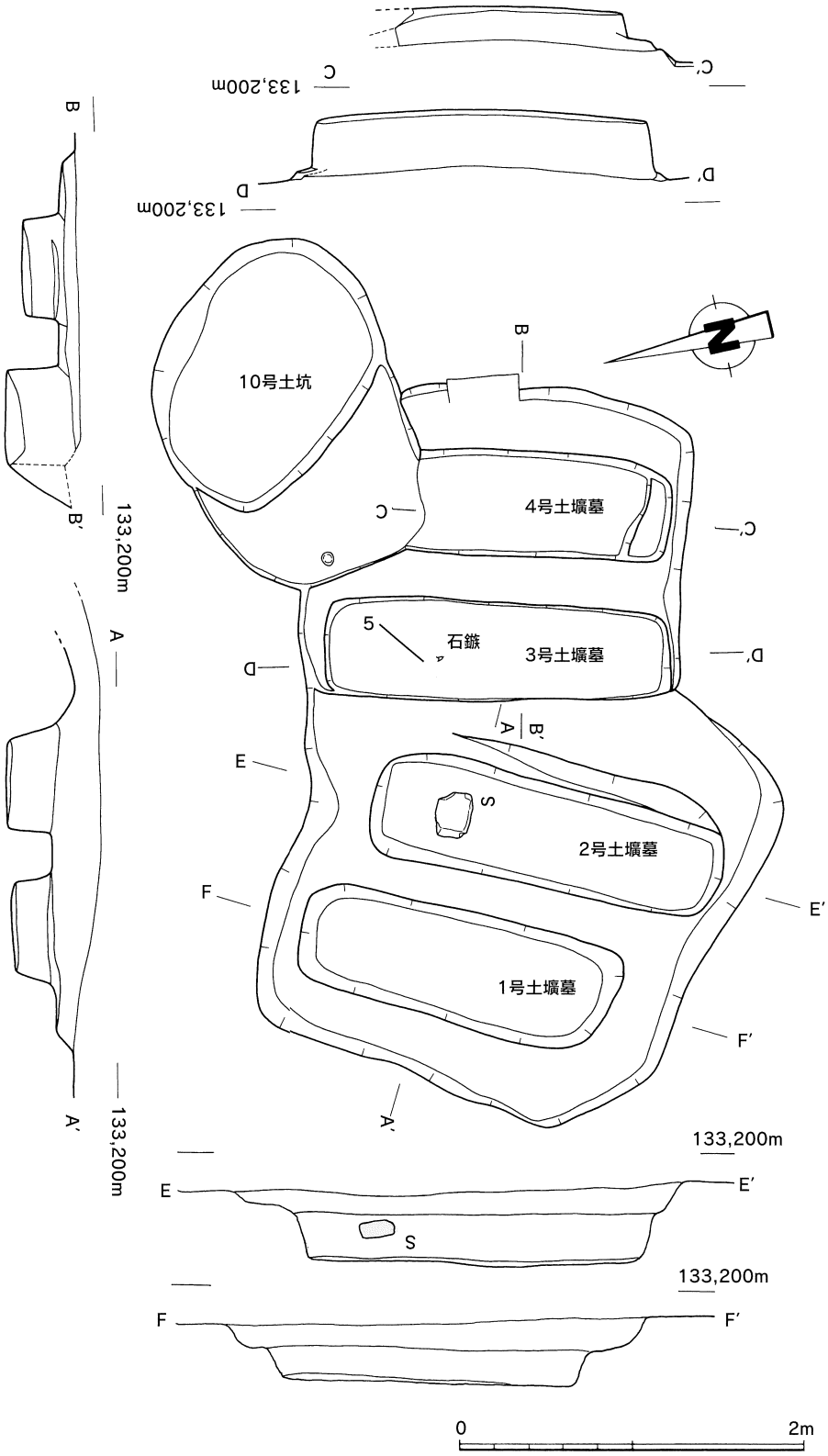
（4）４号土壙墓（第65図）４号土壙墓は、10号土坑により北東側を削平されており、長辺約1.4m・短辺約0.6m深さは約20cmが残っている。壁面は垂直に近く底部は南西側に数cm程高いテラスを有している。



第64図　3号土壙墓出土遺物実測図（2/3）

第11表　３号土壙墓出土遺物観察表

番号	器　種	石　材	長さ(mm)	幅（mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備　　考
5	石　鏃	サヌカイト	35	20	5	2.9	先端部を欠く
6	剥　片	黒曜石	27	18	7	3.7	埋土中より



第65図　土壙墓実測図（1/40）

4.甕棺墓群

今回の調査で、甕棺と墓抗がそろって残っているものを11基を検出したが、調査区２－C区より攪乱に伴う甕棺片が多数出土しており、実際にはこれ以上あったことが推定できる。

（1）１号甕棺墓（第66図）

１号甕棺墓は11基の甕棺墓群の一番南西端の調査区３－A区にあり４号竪穴住居跡のすぐ東側に位置している。同墓は後世の攪乱を受けており、墓抗及び甕棺の上部を壊されている。墓抗の規模は長径約0.9m・短径約0.7mの楕円に近い形状をしている。深さは約30cmほどが残存しており、底部は北東側から南西側へと緩やかに傾斜している。甕棺は南西側を高くして、約５°の角度を持って埋葬されており、甕棺墓の主軸方向はS－37°－Wとなっている。甕棺は上甕に小型甕、下甕に鉢型土器を使用した接合式甕棺であり、甕棺の接合部に灰白色の粘土が付着した状態で出土した。

上甕７は口縁外径より胴部が僅かに大きく、底部は厚く外端部が張り出し上げ底となっている。口縁下には一条の低い三角突帯を有し、口縁部は外側へ突出し（断面は三角形）、上端部はやや内傾気味である。器面調整は、外面に縦方向へのハケ目調整、内面にはナデ、口縁部内外面には横ナデの痕が残っている。

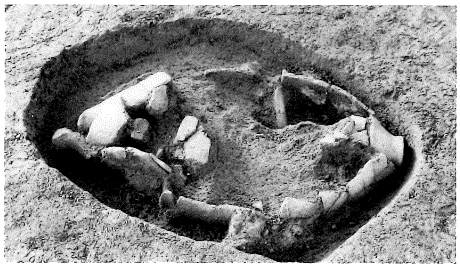
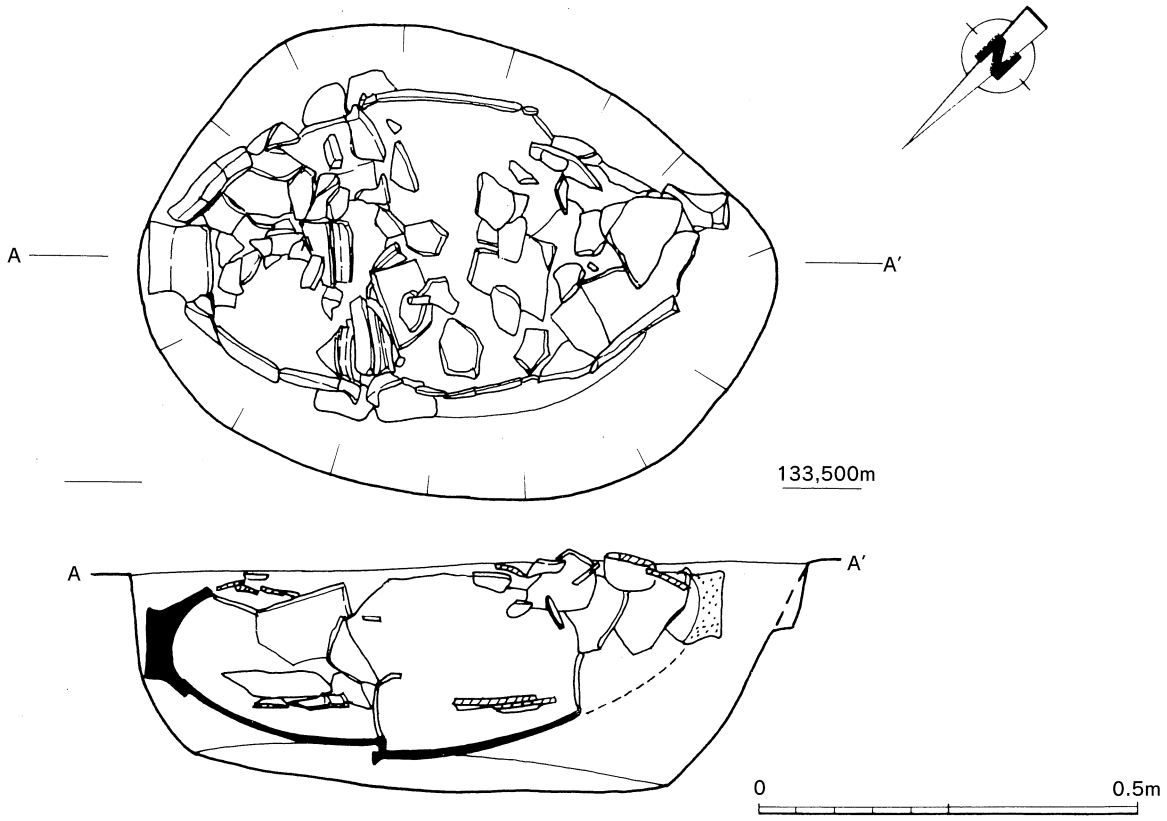
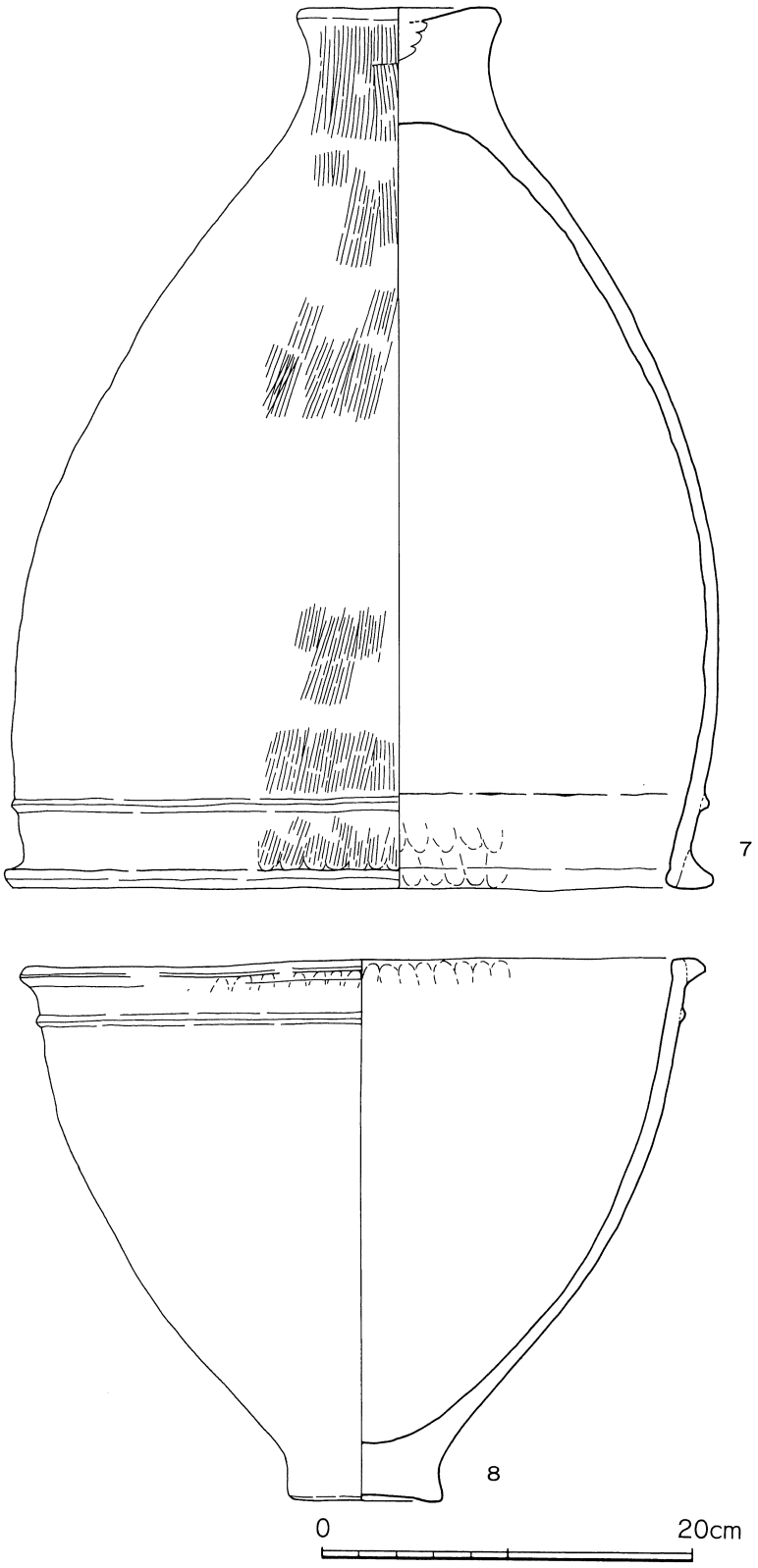


写真１　１号甕棺墓

下甕８は口縁部が最大経をなし、底部へ向かってしまっている。底部の外端部はあまり張り出さず、やや上げ底になっている。口縁下には一条の低い三角突帯を有し、口縁外端部はやや肥厚し外反して、口縁部上端面はほぼ水平である。また、外面に煤が付着した痕が確認できるが表面の損耗が激しく調整は不明である。内面にはナデ、口縁部内外面には横ナデによる調整が行われている。



第66図　１号甕棺墓実測図（1/10）



第67図　1号甕棺実測図（1/4）

（2）２号甕棺墓（第68図）

２号甕棺墓は調査区３－B区にあり、１号甕棺墓の北東側に位置している。同墓も後世の攪乱によって墓抗及び甕棺の上部が壊されていた。墓抗は、長辺約1.2m・短辺約0.7mの規模で楕円状をなしている。深さは約30cmが残存しており、底部は両端から中央に向かって緩やかに傾斜している。甕棺は南西側を高くして約４°の角度で埋葬されており、甕棺墓の主軸方位はW－35°－Sとなっている。甕棺は上甕・下甕とも小型甕を使用した覆口式の甕棺である。

上甕９は下甕より口径が10cmほど小さく、口縁外径より僅かに胴部が張り出し、底部は厚く外端部は僅かに張り出している。口縁下に一条の低い三角突帯を有し、口縁部はやや肥厚して外側へ突出し上端面はやや内傾している。器面調整は、外面に縦方向のハケ目調整、内面は横方向へのナデ、口縁部内外面には横ナデによる調整が行われている。

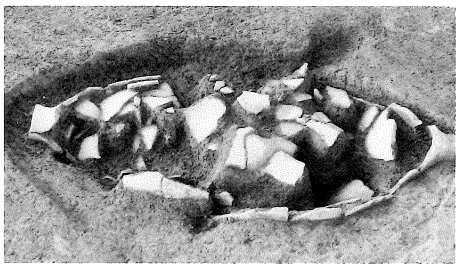
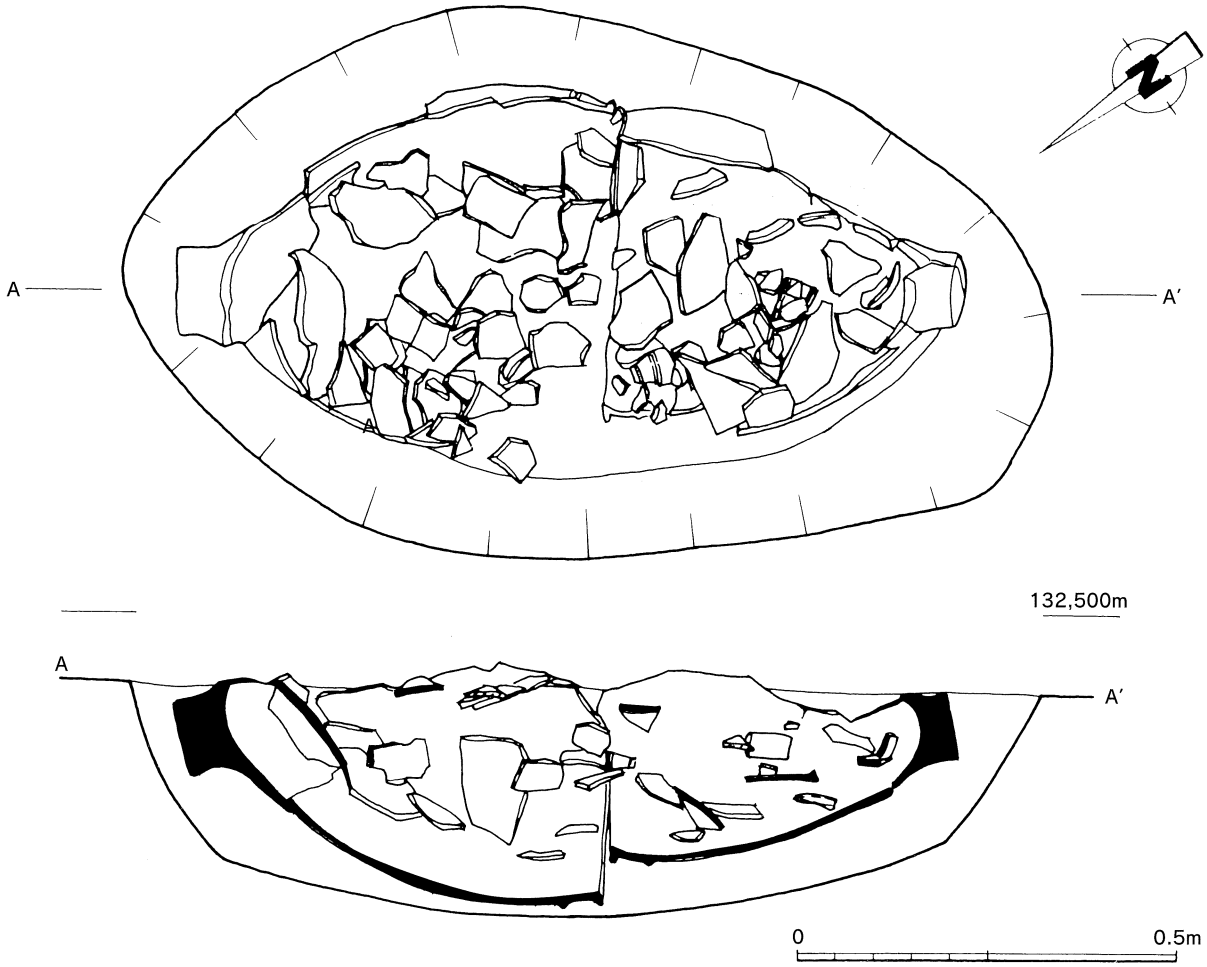
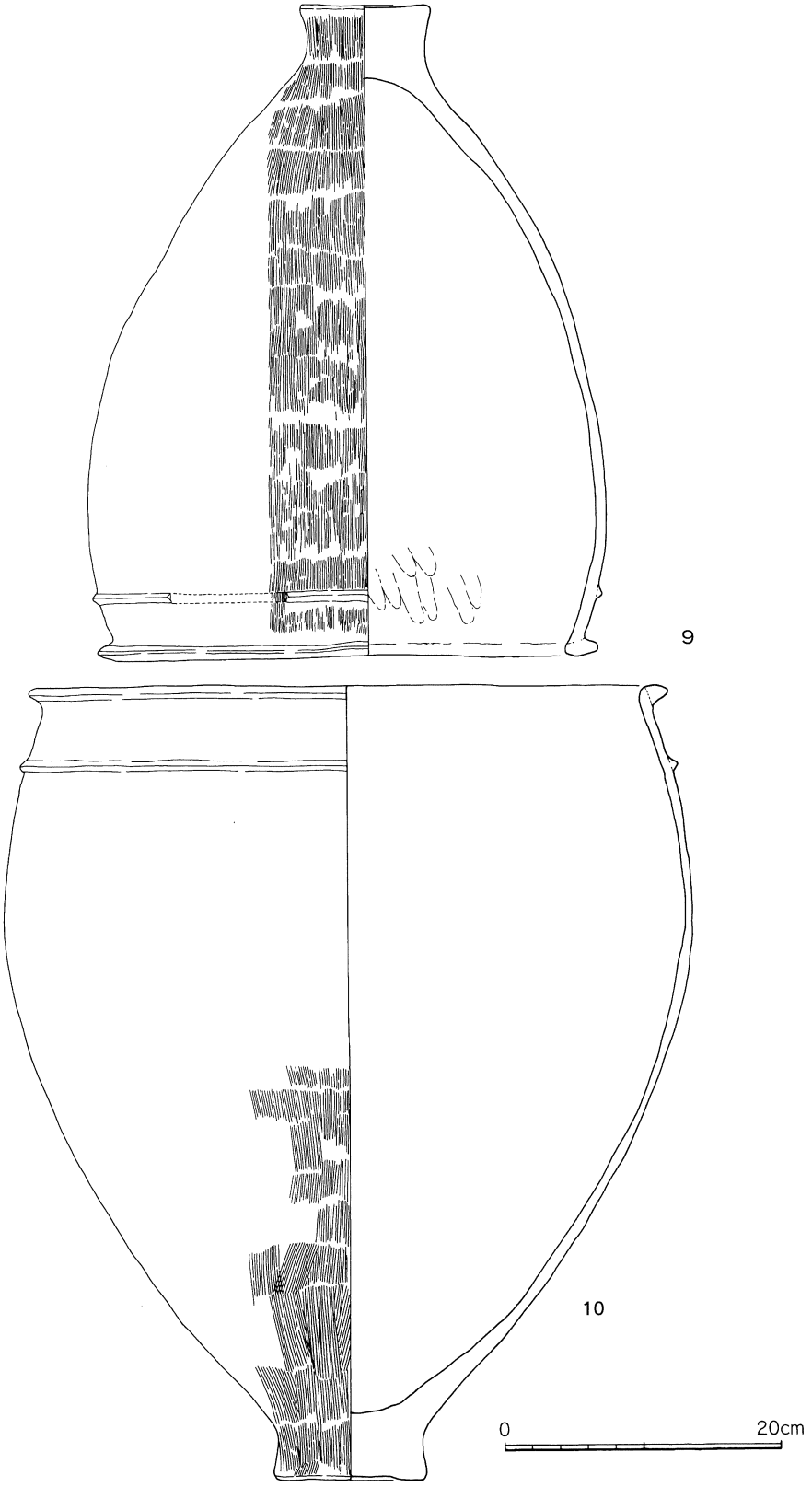


写真２　２号甕棺墓

下甕10も口縁外径より胴部が張り出し、底部が厚く外端部はあまり張り出さない。口縁下に低い一条の三角突帯を有し、口縁部は外側へ突出し（断面は三角形）上端面はやや内傾している。器面調整は、外面は縦・斜め方向へのハケ目調整、内面はナデ、口縁内外面には横ナデによる調整が行われている。また、底部は赤変している。



第68図　２号甕棺墓実測図（1/10）



第69図　２号甕棺実測図(1/5)

（3）３号甕棺墓（第70図）

３号甕棺墓は、調査区３－B区の１号竪穴住居跡の北東側に位置している。同墓も後世の攪乱によって墓抗の上部が削平されていたが、甕棺ははぼ完全な形で出土した。墓抗は、長径約1.2m・短径約0.8mの不整形な楕円状をなしている。深さは約30cmが残存しており、底部は北東側から南西側へと傾斜している。甕棺墓の主軸方位はN－30°－Eとなっており、上甕・下甕ともほぼ同じ形状の小型甕を用いた接合式甕棺である。上甕11は口縁外径と胴部最大径がほぼ同じ大きさであり、底部は厚く外端部はやや張り出し上げ底になっている。口縁下に一条の低い三角突帯を有し、口縁部は外側へと突出し上端面はやや中央が隆起している。器面調整は、外面は胴部から底部にかけて一部に縦・斜め方向のハケ目調整が、内面はナデ、口縁部内外面には横ナデによる調整が行われている。また、外面に煤が付着した痕が確認できる。下甕12は口縁外径より胴部最大経が僅かに大きく、底部は厚く外端部はあまり張り出さずに、若干上げ底になっている。口縁下に一条の低い三角突帯を有し、口縁部は外側へと突出し（断面は三角形に近い）、上端面はほぼ水平である。器面調整は、外面は表面の損耗が激しく底部付近に縦方向へのハケ目調整の痕が残る程度で、内面はナデ、口縁部内外面には横ナデによる調整行われている。また、内面には煤が付着した痕が残っている。

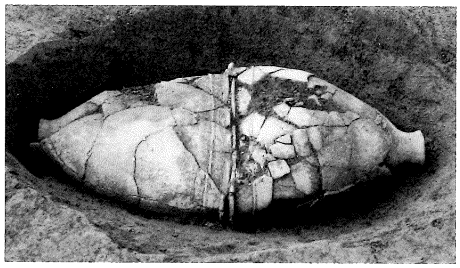
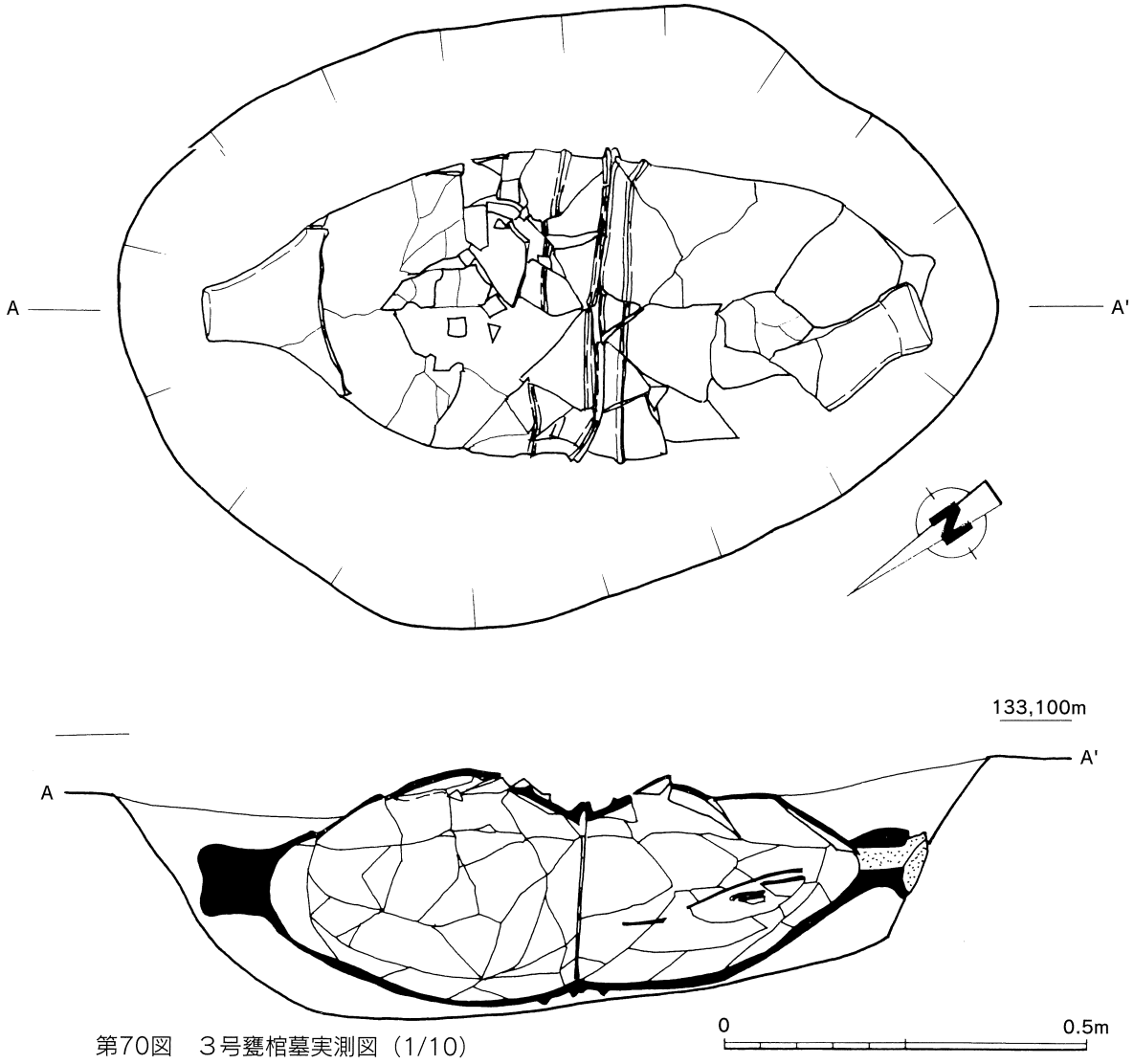
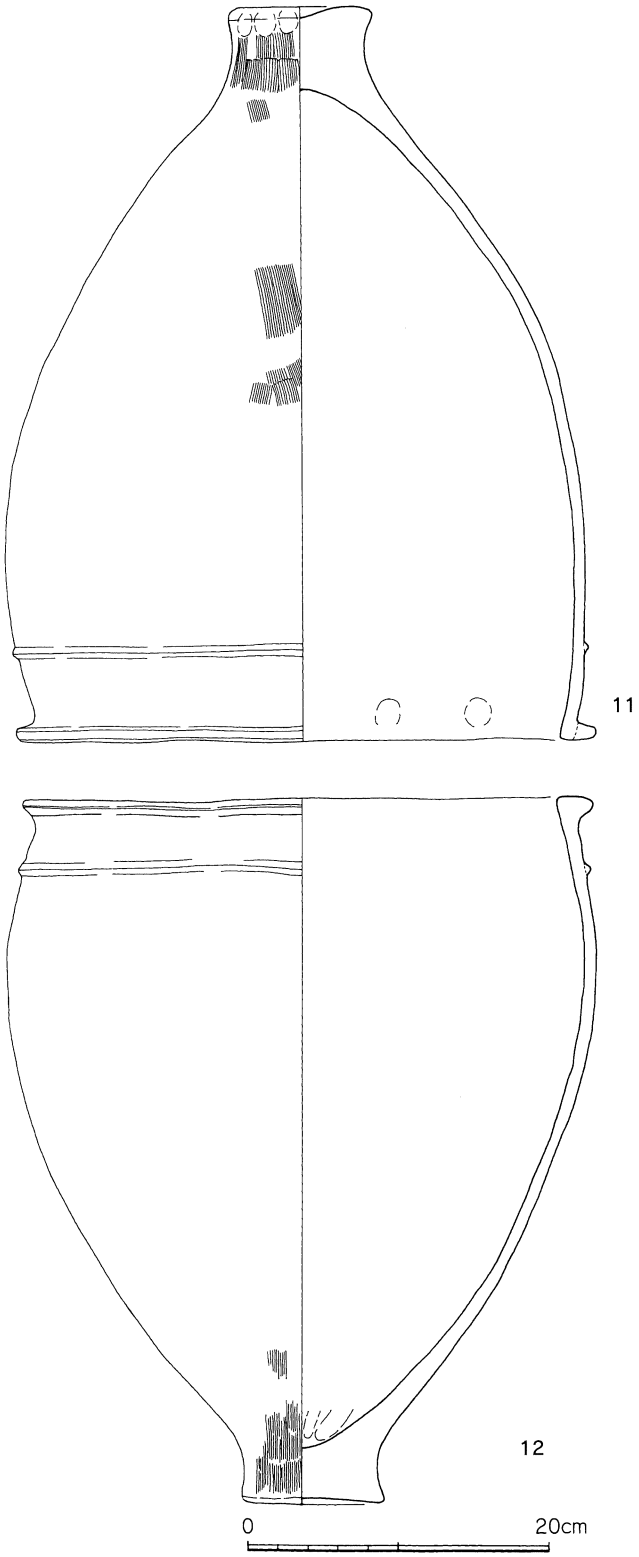


写真３　３号甕棺墓



第70図　３号甕棺墓実測図（1/10）



第71図　3号甕棺実測図(1/5)

（4）４号甕棺墓（第72図）

４号甕棺墓は調査区３－Ｃ区の土抗墓の北西にあり、甕棺墓群の一番北東に位置している。同墓も後世の攪乱により墓抗と甕棺の上部が壊された形で出土した。墓抗は、長径約１ｍ・短径約0.5mの楕円状で、深さは約20cmが残存しており、底部は浅いU字形をなしている。主軸方位はN－45°－Wとなっており、上甕・下甕とも小型甕を用いた接合式の甕棺である。

上甕13は口縁外径より胴部最大経が小さく、底部は失われており形状は不明である。下甕にある口縁下の三角突帯はみられず、口縁部は外側へ突出し（断面は三角形）上端面は中央が若干隆起している。器面調整は、外面胴部の上半分に縦・斜め方向のハケ目調整の痕が残り、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデによる調整が行われている。また、胴部下部は赤変しており、煤の付着が見られる。

下甕14は口縁外径より胴部最大径が僅かに大きく、底部は厚く外端部はあまり張り出さずやや上げ底になっている。口縁下には一条の低い三角突帯を有し、口縁部はやや肥厚し（段面がコの字状）上端面は僅かに内傾している。器面調整は、外面は縦・斜め方向のハケ目調整、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデによる調整が行われている。また、外面には煤が付着した痕が見られる。

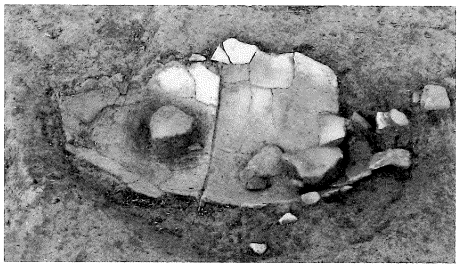
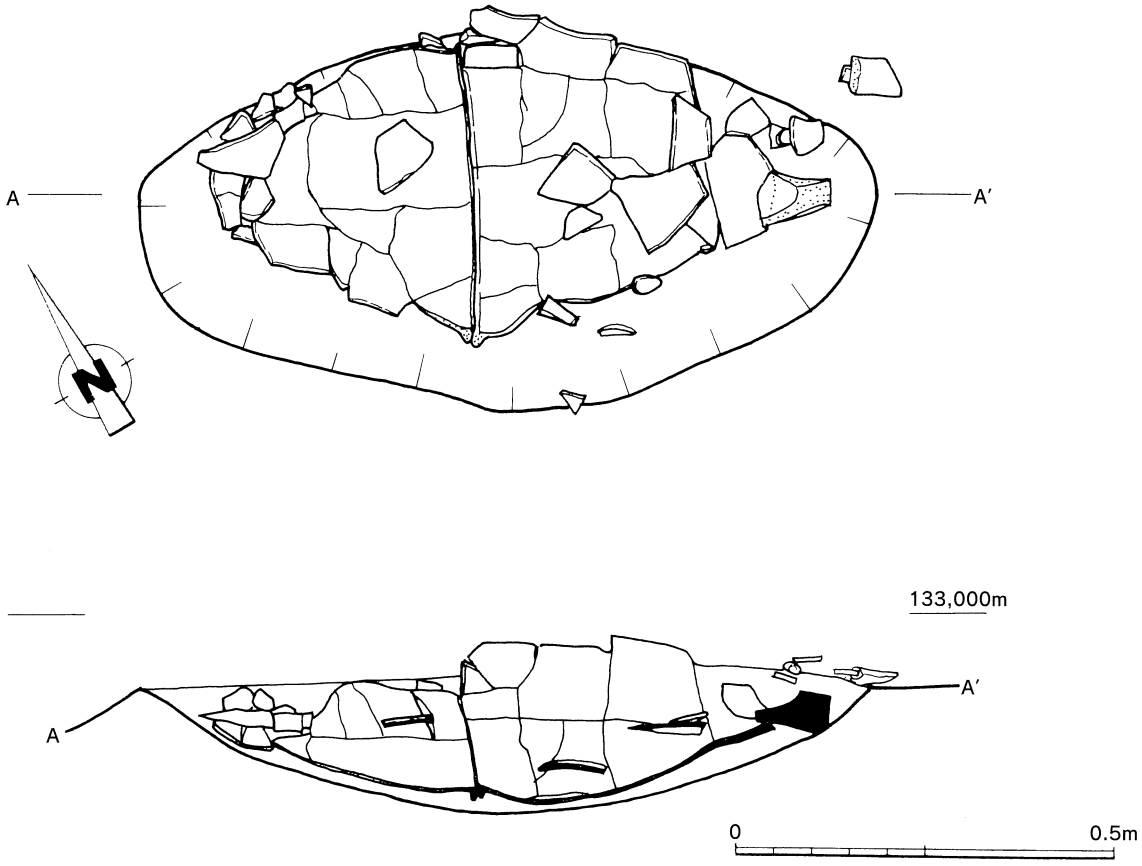
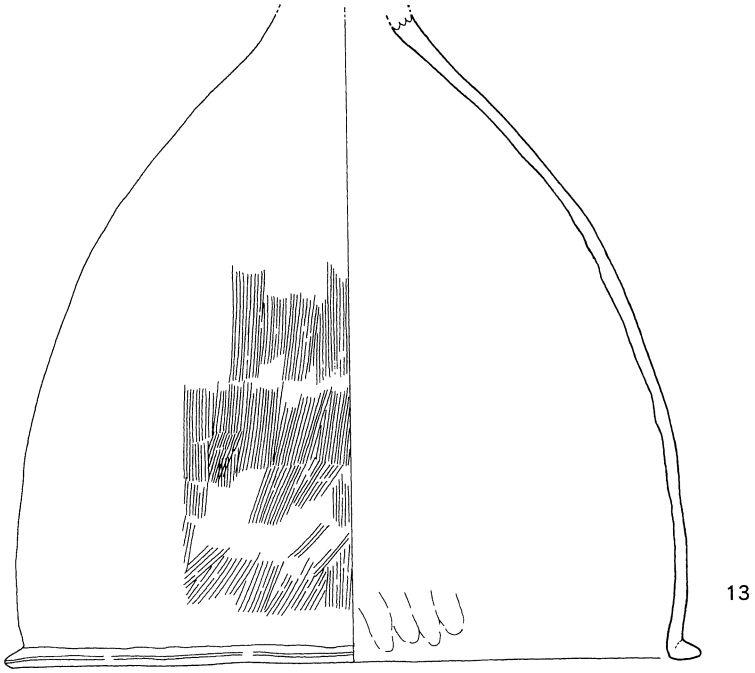
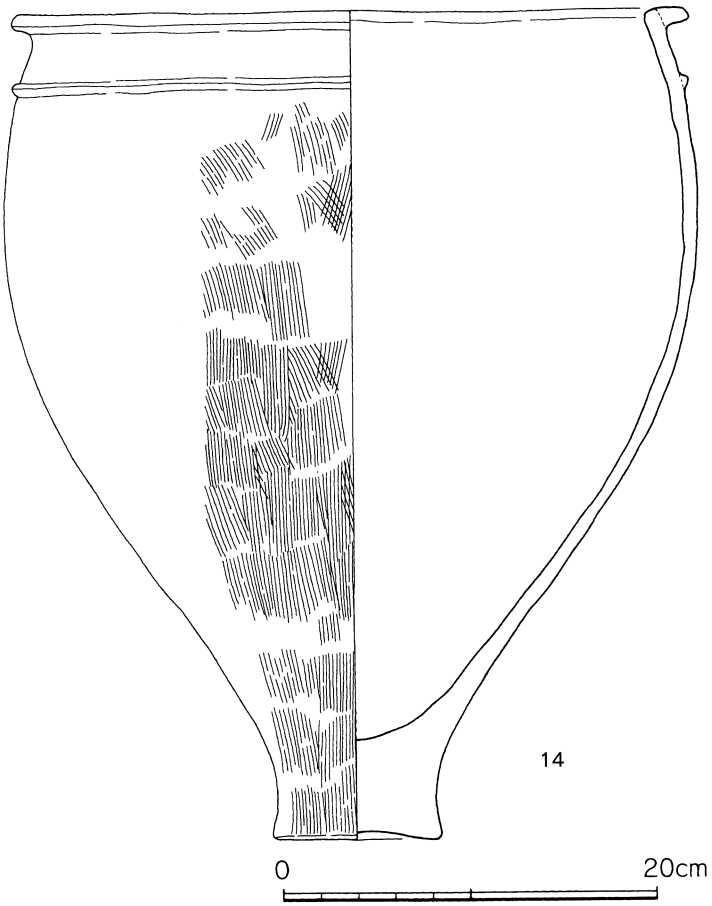


写真４　４号甕棺墓



第72図　４号甕棺墓実測図（1/10）





第73図　４号甕棺実測図（1/4）

（5）５号甕棺墓（第74図）

５号甕棺墓は調査区３－C区の４号甕棺墓の西側に位置している。同墓も後世の攪乱により墓抗と甕棺の上半分がかなり破壊されている。墓抗は長径約１m・短径約0.6mの不整形な楕円に近い形状をなしており、深さは約15cm程度しか残っていない。底部は斜面に沿って北西側が浅くなり、さらに北東側から南西側にかけて傾斜している。主軸方位は、N－40°－Eとなっており上甕・下甕とも小型甕を用いた覆口式の甕棺である。

上甕15は胴部下部が失われており、甕の口縁部から胴部にかけての部分が復元できるに留まった。上甕は口縁外径が胴部最大径より僅か大きく、口縁下に一条の低い三角突帯を有する。口縁部は肥厚し外側へ突出し（断面はコの字形）、上端部はほぼ水平である。器面調整は、外面の損耗が著しくハケ目調整の痕が散在するのみであり、内面はヘラミガキ、口縁部内外面には横ナデによる調整が行われている。

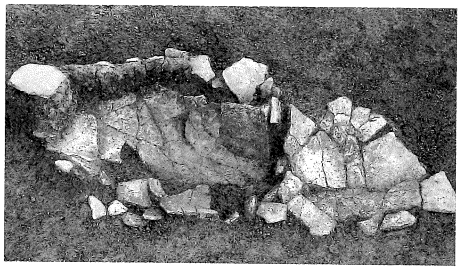
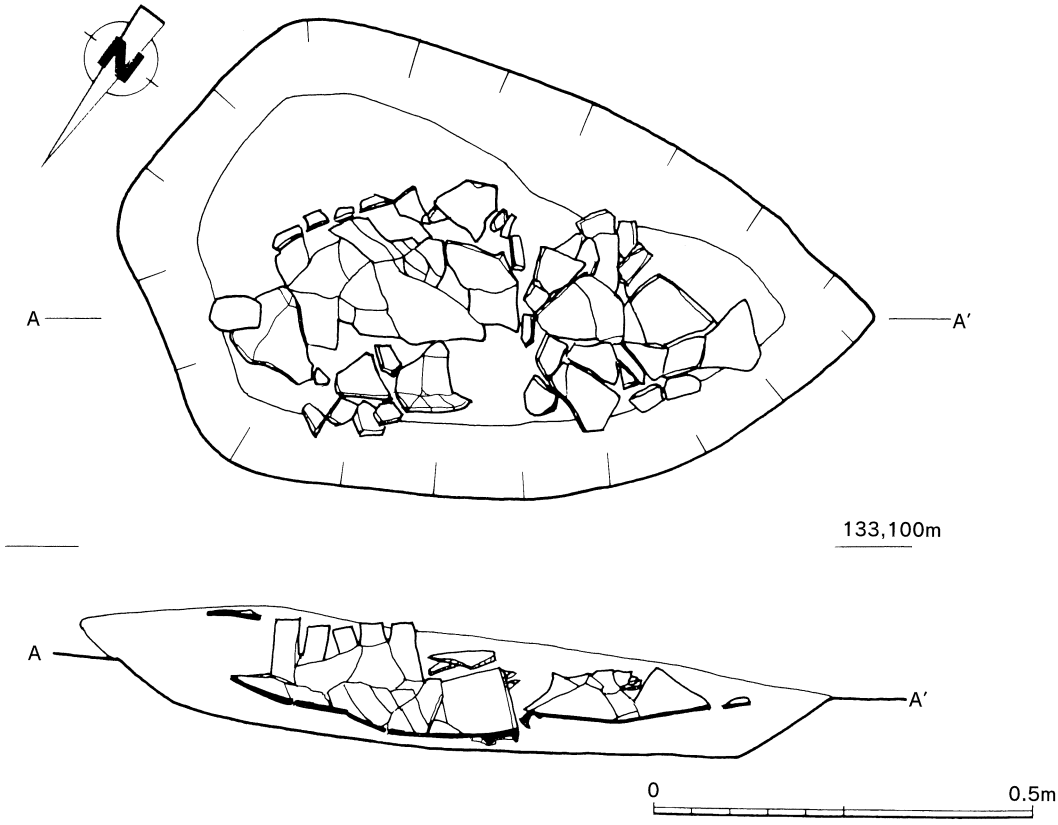
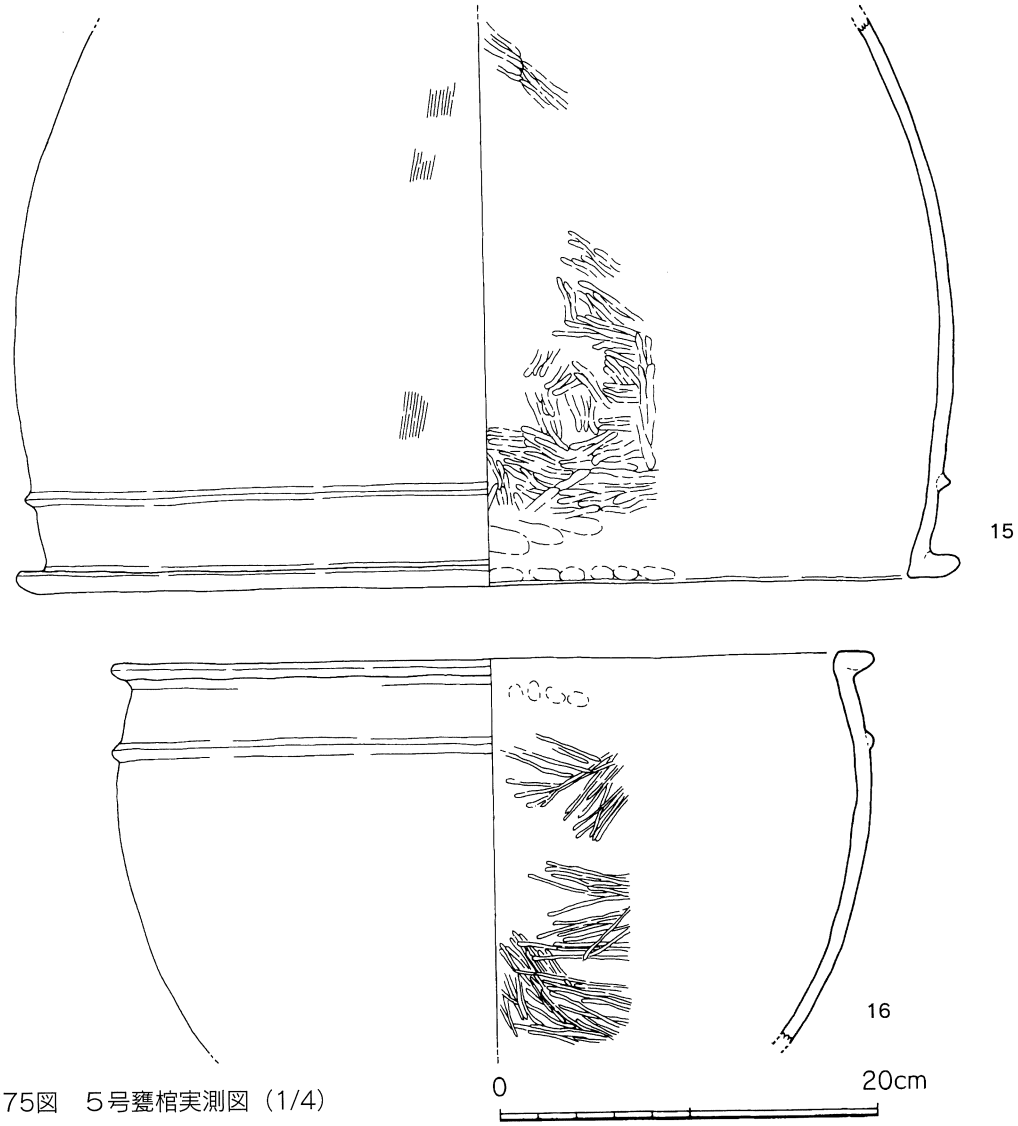


写真５　５号甕棺墓

下甕16も上甕と同様に胴部下部が失われており、甕の口縁部から胴部にかけての部分が復元できるに留まった。また、下甕も口縁外径が胴部最大径より僅かに大きく、口縁下に一条の低い三角突帯を有する。口縁部は外側へと突出し、上端部はほぼ水平である。器面調整は、外面は損耗が著しく不明であり、内面はヘラミガキ、口縁部内外面は横ナデによる調整が行われている。



第74図　５号甕棺墓実測図（1/10）



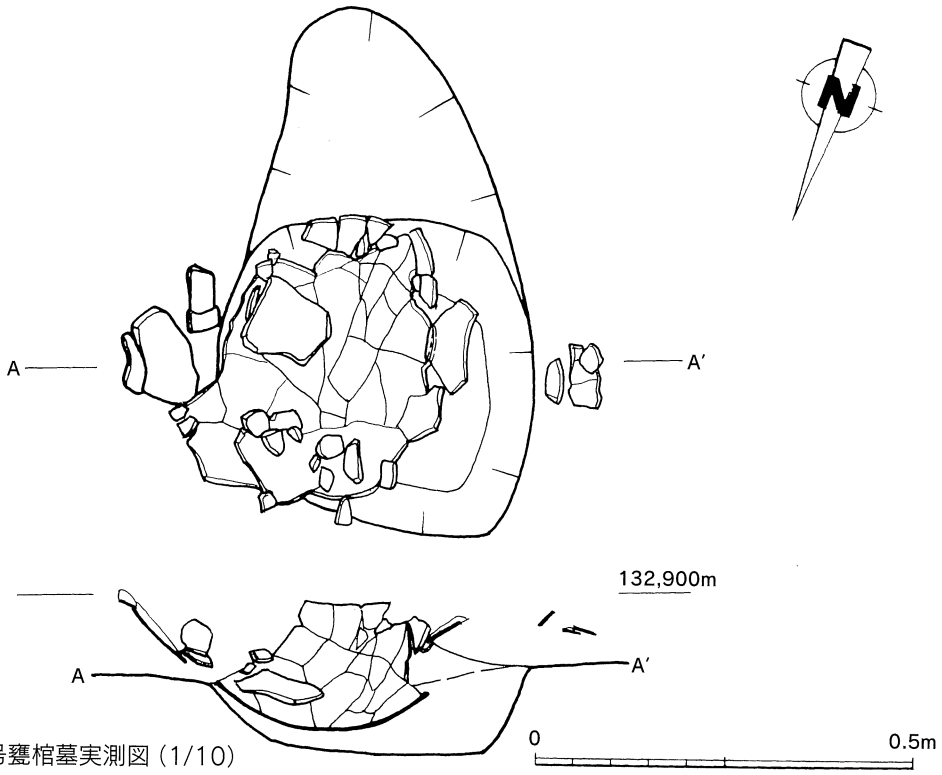
第75図　５号甕棺実測図（1/4）

（6）６号甕棺墓（第76図）

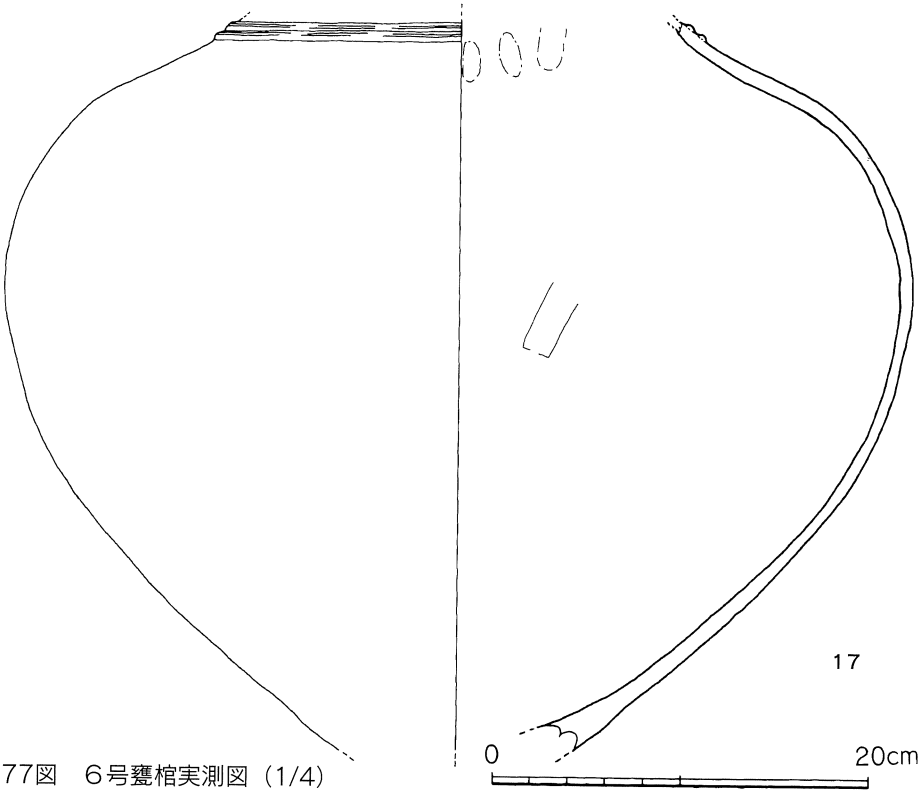
６号甕棺墓は調査区３－B区の３号甕棺の北西側に位置している。同墓も後世の攪乱によって墓抗と甕棺の上半分が破壊されている。墓抗は長径約0.6m・短径約0.4mの不整形な楕円状をなしている。底部は斜面に沿って南東側から北西側にかけて２段落ちになっており、また北東側から南西側にかけて緩やかに傾斜している。主軸方位はN－45°－Eとなっており、壺を用いた単棺式の甕棺墓である。

壺17は頸部の大部分と底部が失われており、胴部は頸部直下から大きく外反し、底部に向かってよくしまり、頸部の付け根に２本の低い三角突帯を有している。器面調整は、外面は損耗が著しく判然としない。内面には頸部の付け根から胴部にかけて横ナデの痕が残っている。

写真６　６号甕棺墓



第76図　６号甕棺墓実測図（1/10）



第77図　６号甕棺実測図（1/4）

（7）７号甕棺墓（第78図）

７号甕棺墓は調査区３－B区の６号甕棺墓の南西側に位置している。同墓も後世の攪乱によって墓抗及び甕棺の上半分がかなり破壊されている。墓抗は長径約0.7m・短径約0.4mの楕円状で、深さは約10㎝程度が残存している。底部はほぼ水平であり、浅いU字形をなしている。主軸方位は、N－32°－Eとなっており、上甕・下甕とも小型甕を用いているが上甕の破損がひどく形式は不明である。

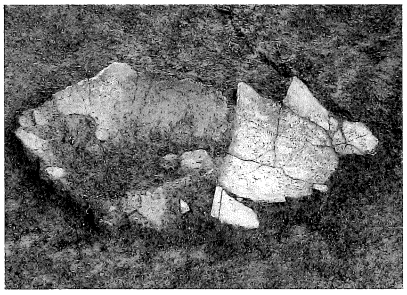
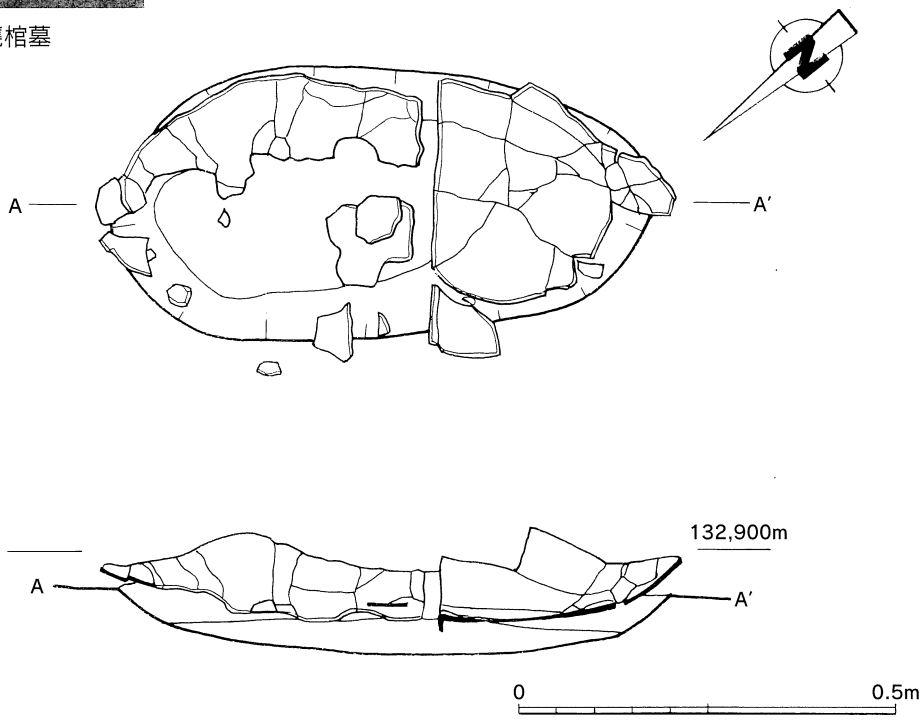
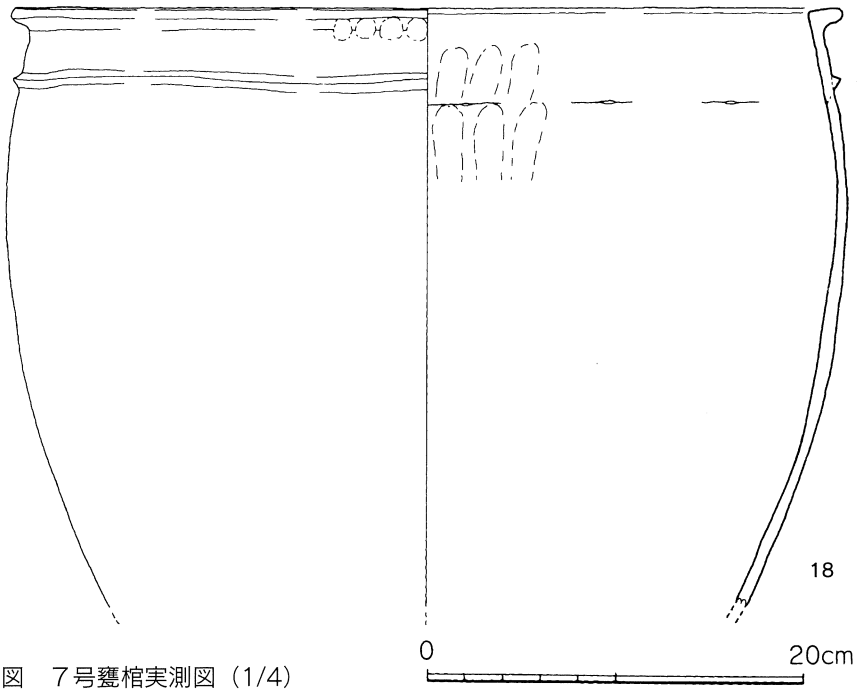


写真７　７号甕棺墓

下甕18は底部と胴部下部が失われており、口縁外径と胴部最大径はほぼ同じ大きさである。口縁下に一条の低い三角突帯を有し、口縁部は外側へ突出し（断面がコの字形）上端面はやや内傾している。器面調整は、外面は損耗が著しく判然としない。内面はナデ、口縁部内外面には横ナデによる調整が行われている。



第78図　７号甕棺墓実測図（1/10）



第79図　７号甕棺実測図（1/4）

（8）８号甕棺墓（第80図）

８号甕棺墓は調査区３－B区の１号竪穴住居の北西側に位置している。同墓も後世の攪乱によって墓抗と甕棺の上半分が破壊されていた。墓抗は長径約1.1m・短径約0.6mの楕円状をなし、深さは約20cmが残存している。底部は南西側から北東側へ傾斜しており、主軸方位はW－40°－Sである。上甕・下甕に小型甕、中甕に壺を用いた三連式の甕棺である。

上甕19は胴部最大径より口縁外径の方が大きく、底部は厚く外端部はあまり張り出さない。口縁下に一条の低い三角突帯を有し、口縁部は外側へ突出し上端面はほぼ水平である。器面調整は、外面にハケ目の痕が散在する程度で、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。また、外面には煤の付着が見られた。

壺20は頸部と底部がなく胴部のみ出土した。器面調整は、外面は損耗していたが縦・横・斜め方向へのヘラミガキ痕が残っており、内面も、同様の調整が見られた。

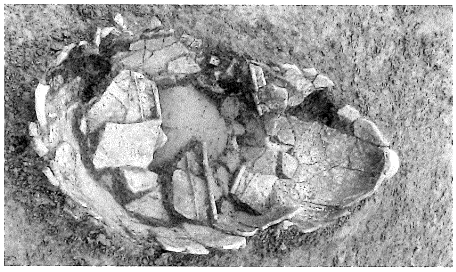
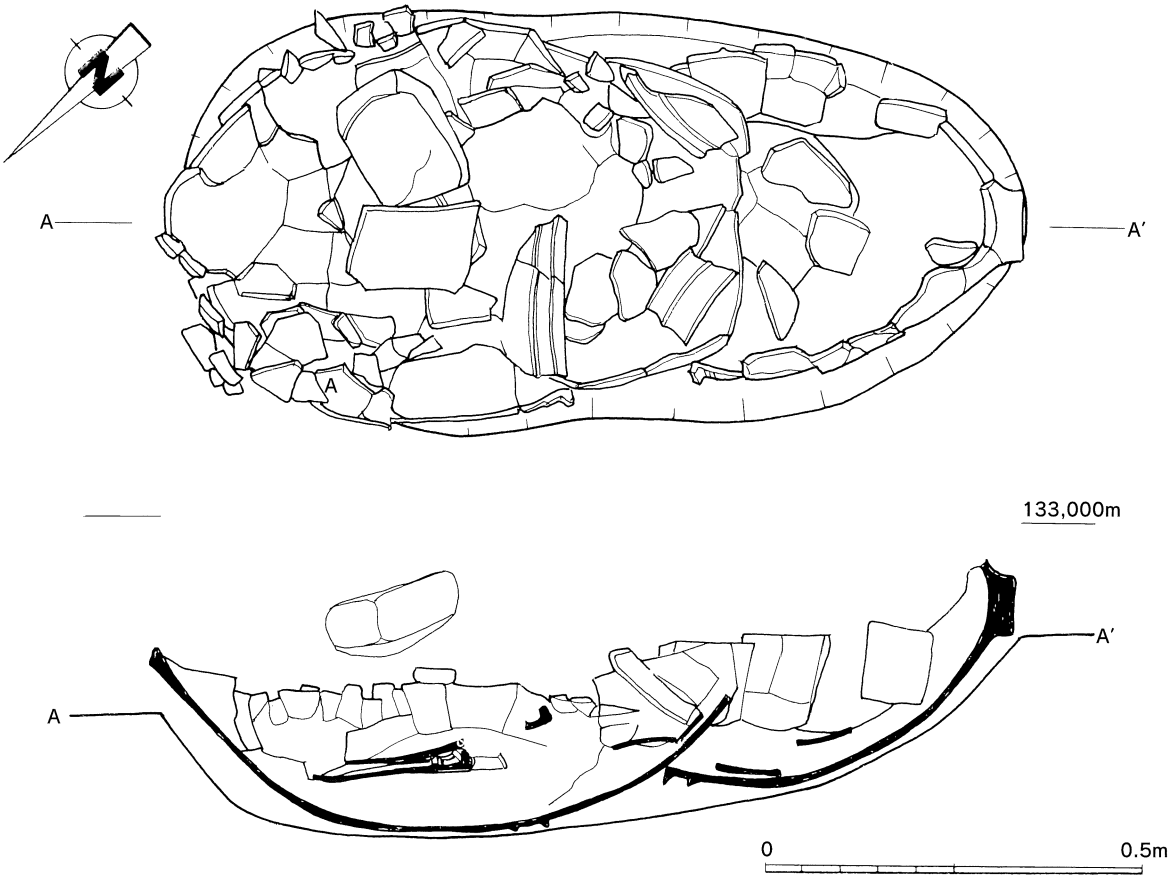
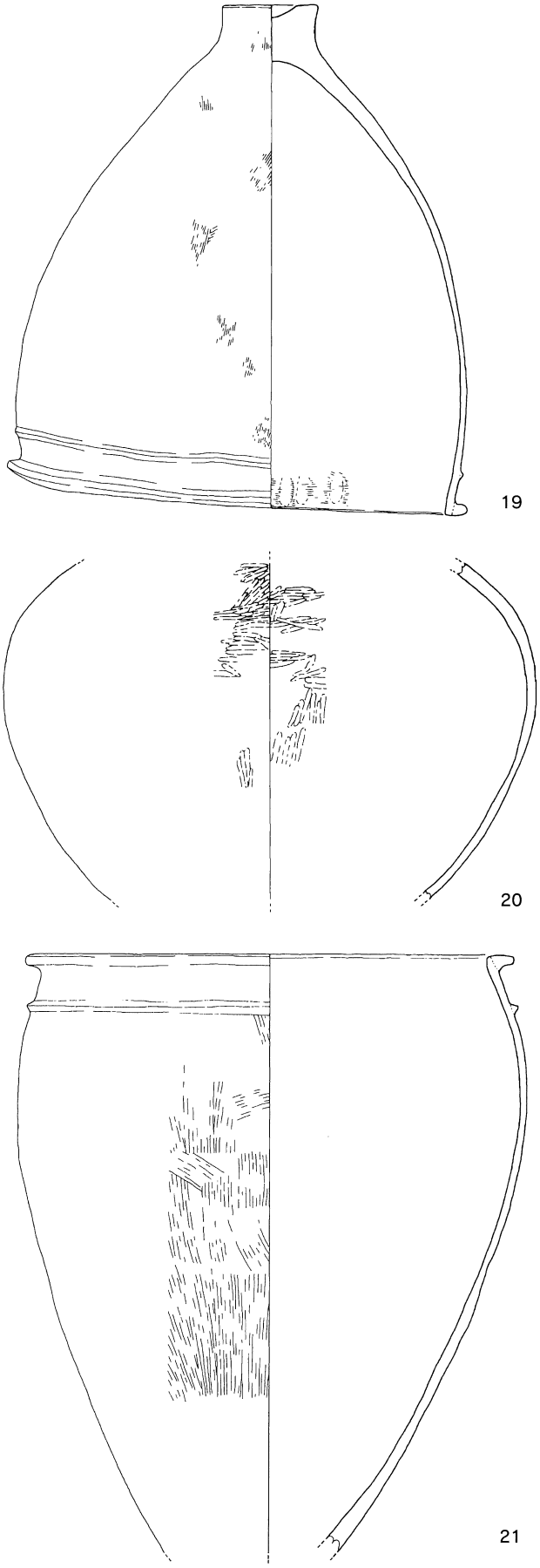


写真８　８号甕棺墓

下甕21は底部付近が失われており、口縁外径より胴部最大径が僅かに大きい。口縁下に一本の低い三角突帯を有し、口縁部は外側に突出して上端面は若干隆起している。器面調整は、外面は縦・斜め方向のハケ目痕が残っているが損耗のため他は判然としない。また、内面はナデ、口縁部内外面には横ナデの跡が見られる。また、外面には煤の付着がみられた。



第80図　８号甕棺墓実測図（1/10）



第81図　８号甕棺実測図（1/6）

（9）９号甕棺墓（第82図）

９号甕棺墓は調査区３－C区の１号竪穴住居の北西側で、南西から北東に続く甕棺墓群のほぼ中央に位置している。同墓も、後世の攪乱によって墓抗及び甕棺の上半分が破壊されていた。墓抗は長径約0.7m・短径約0.5mの楕円状をなし深さは約８㎝程度が残存していた。南西から北西にかけて緩やかに傾斜している。主軸の方位はW－40°－Sをなしている。上甕・下甕ともに小型甕を用いた覆口式の甕棺墓である。

上甕22は底部付近が失われており、口縁最大径と胴部最大径がほぼ同じである。口縁下に一条の低い三角突帯を有し、口縁部は外側に突出し（断面は三角形）上端部は水平である。器面調整は、外面は損耗が著しく縦方向へのハケ目が僅かに判別できる程度であり、内面はナデ、口縁部内外面には横ナデの痕が見られる。

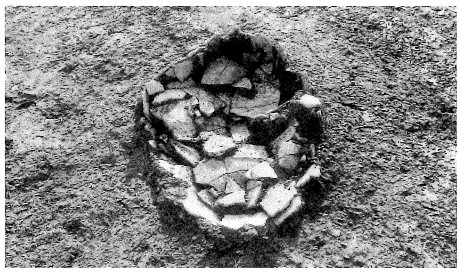
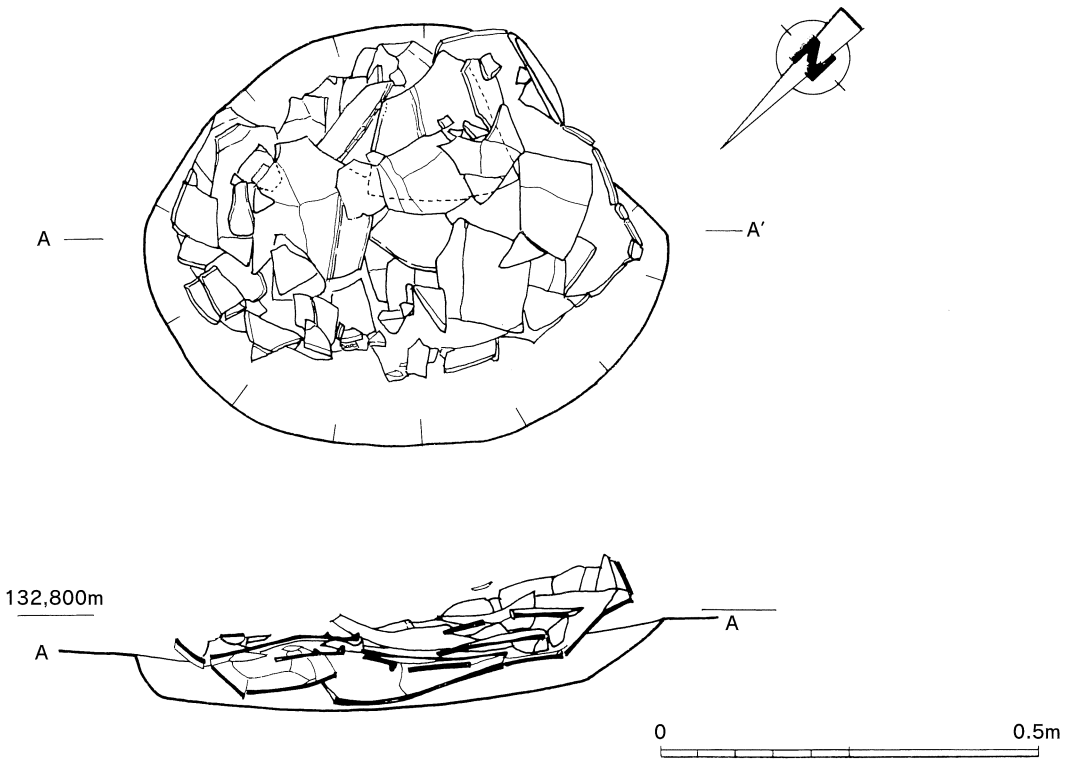
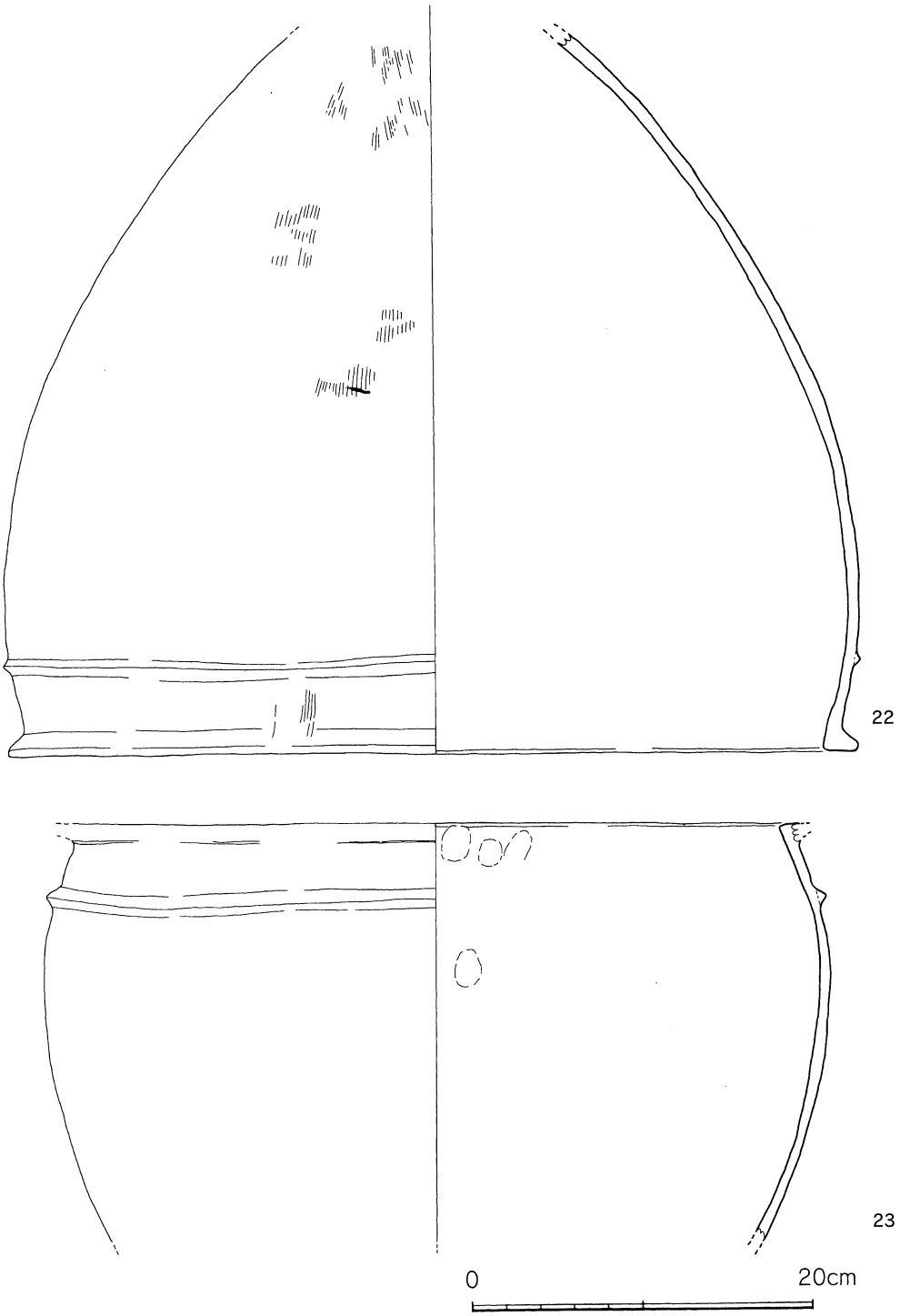


写真９　９号甕棺墓

下甕23は胴部下部及び底部が失われており、口縁部の外側への突出した部分が低く、上端部はやや内側に傾斜している。また、口縁下に一条の低い三角突帯を有する。器面調整は、外面は損耗が著しく判然としない。内面はナデ、口縁部内外面には横ナデの痕が見られる。



第82図　９号甕棺墓実測図（1/10）



第83図　９号甕棺実測図（1/4）

(10) 10号甕棺墓（第84図）

10号甕棺墓は３－B区の11号甕棺墓の墓抗と南側を接する形で検出された。同墓も後世の攪乱により墓抗と甕棺の上半分を破壊されていた。墓抗は長径約0.8m・短径約0.5mの楕円状をなし、深さは約20cmが残存している。底部は、斜面に沿って南西側から北西側へと傾斜している。主軸の方位はW－44°－Sをなしており、埋設角度は約３°で上甕・中甕・下甕とも小型甕を用いた三連式の甕棺墓である。

上甕24は口縁外径が胴部最大径より僅かに大きく、底部は厚く外端部はやや張り出し気味で上げ底状になっている。他の甕棺に見られる口縁下の三角突帯は見られない。口縁部は外側へ突出し、上端部はほぼ水平である。器面調整は、外面はには縦方向へのハケ目が、内面はナデ、口縁部内外面には横ナデの痕が残っている。また、外面には煤が付着した痕が見られる。

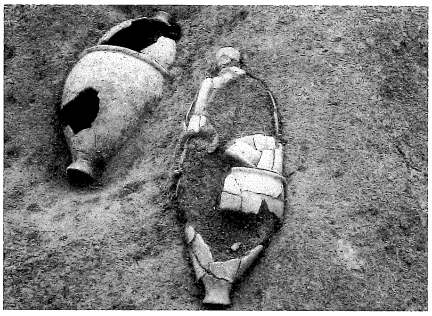
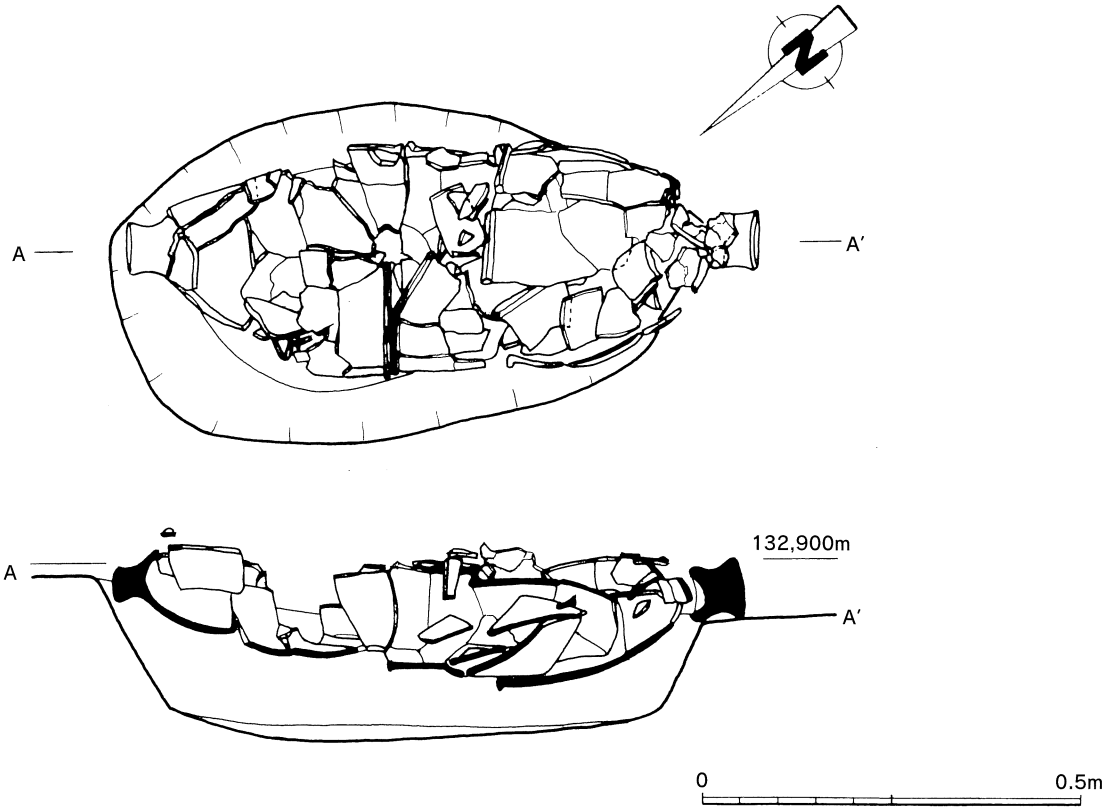


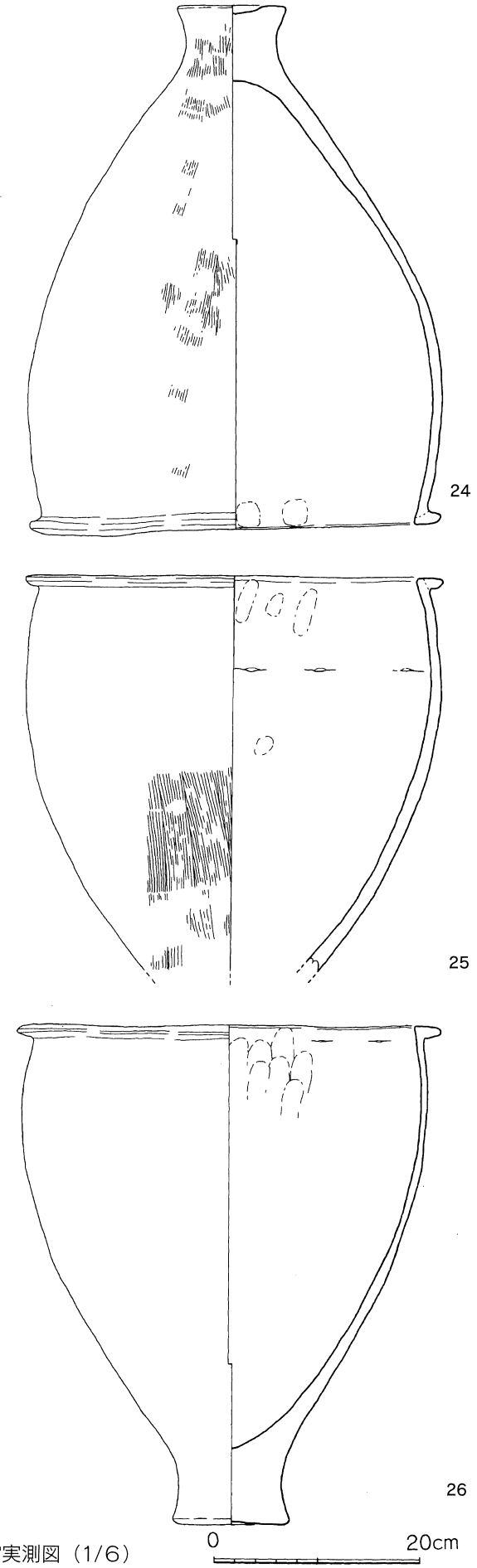
写真10　10号甕棺墓

中甕25は底部付近を欠いて使用したと思われ、口縁外径と胴部最大径はほぼ同じ大きさである。上甕同様に口縁下の三角突帯は存在しない。口縁部は外側へ突出し（断面はコの字状に近い）、上端面はほぼ水平である。器面調整は、外面に縦方向へのハケ目が、内面はナデ、口縁部内外面には横ナデの痕が残っている。また、外面に煤が付着した痕が見られる。

下甕26は口縁外径が胴部最大径より大きく、底部は厚く上げ底状にならずに外端部はあまり張り出さない。口縁部は外側へ突出し（断面は三角形）、上端部は水平である。器面調整は、外面は損耗が著しく判然としない。内面及び口縁部内外面には横ナデの痕が残っている。また、底部付近が赤片し、煤が付着した痕が見られる。



第84図　10号甕棺墓実測図（1/10）



第85図　10号甕棺実測図（1/6）

(11) 11号甕棺墓（第86図）

11号甕棺墓は調査区３－B区の10号甕棺墓の墓抗に北側が一部接する形で検出された。同墓も後世の攪乱により、墓抗の上部を破壊されていたが、甕棺はほぼ完全な形で残っていた。墓抗は長辺約0.9m・短辺約0.5mの隅丸長方形に近い形をしている。深さは約25cmが残存しており、底部は北東側が高く北西側へと傾斜しており、壁面は北西側が二段落ちとなっている。主軸の方位はN－33°－Eであり、埋設角度は約8°で上甕・下甕とも小型甕を用いた接合式の甕棺墓である。

上甕27は口縁外径が胴部最大径より大きく、底部は厚く外端部はやや張り出し上げ底状になっている。口縁部は外側へ突出し上端部は水平でり、口縁下に三角突帯は存在しない。器面調整は、外面の底部付近に縦・斜め方向へのハケ目が残り、内面はナデ、口縁部内外面には横ナデによる調整が行われている。また、外面に煤が付着した痕が見られる。

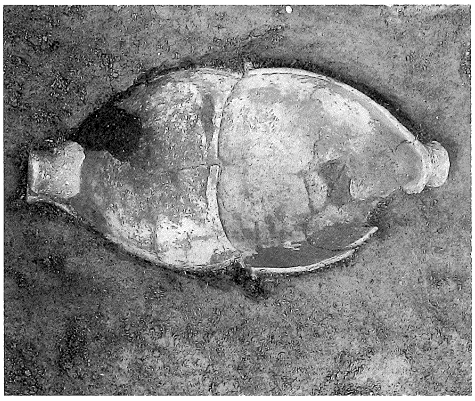
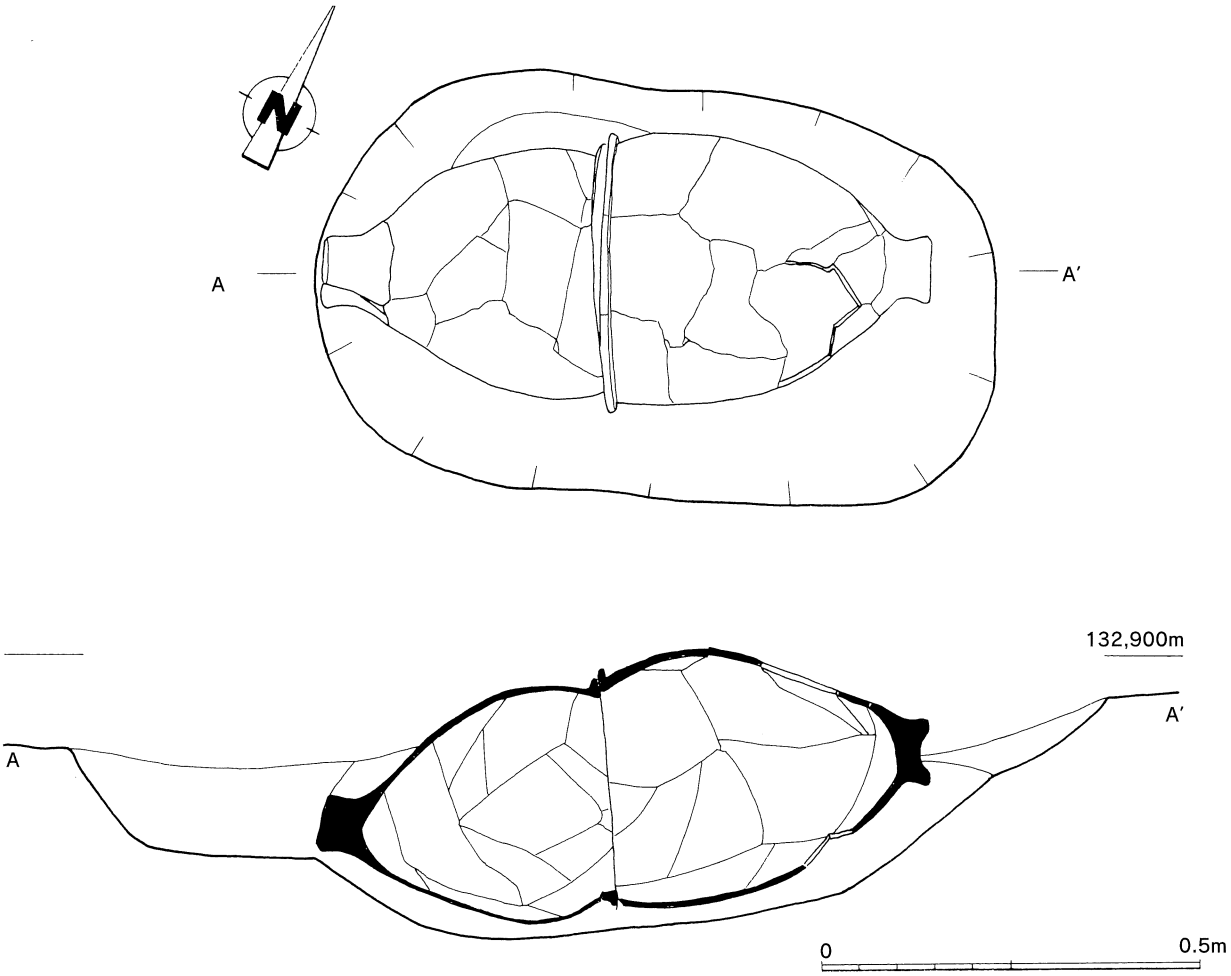
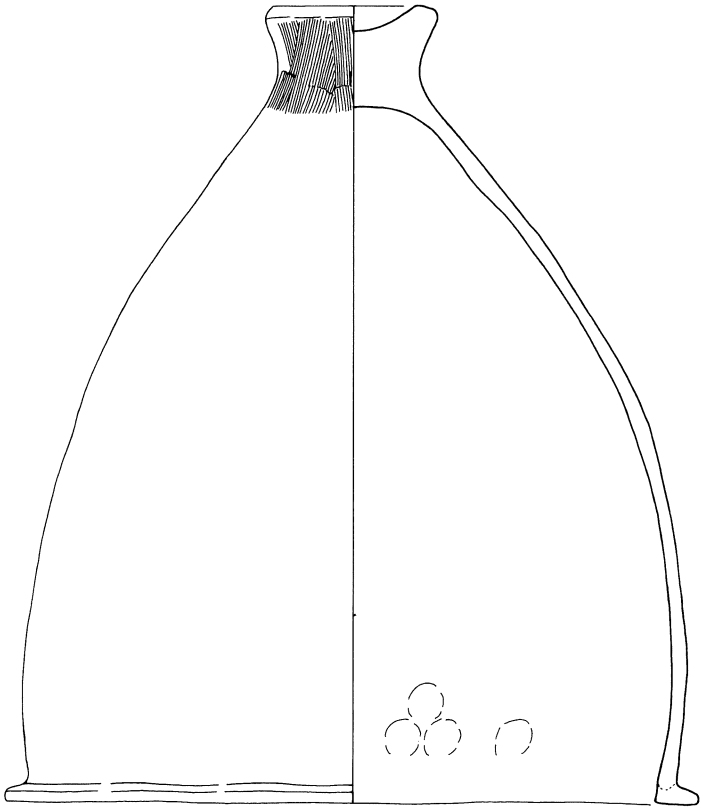


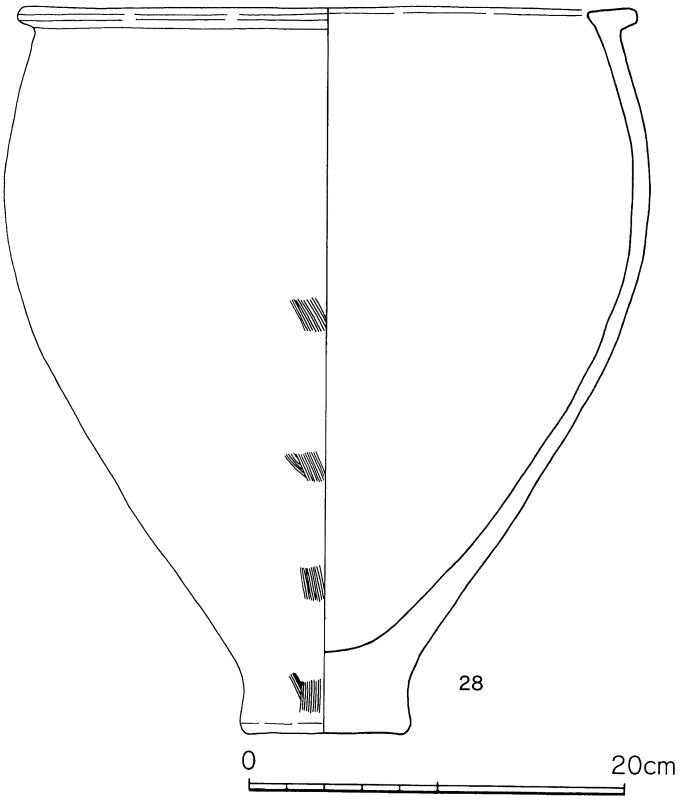
写真11　11号甕棺墓

下甕28は口縁外径よりも胴部最大径が大きく、底部は厚くほぼ水平であり、外端部は張り出さない。口縁部は外側へ突出し、上端面はやや内傾している。器面調整は、外面に縦・斜め方向へのハケ目が所々に残り、内面はナデ、口縁部内外面には横ナデによる調整が行われている。また、外面に煤が付着した痕が見られる。



第86図　11号甕棺墓実測図(1/10)

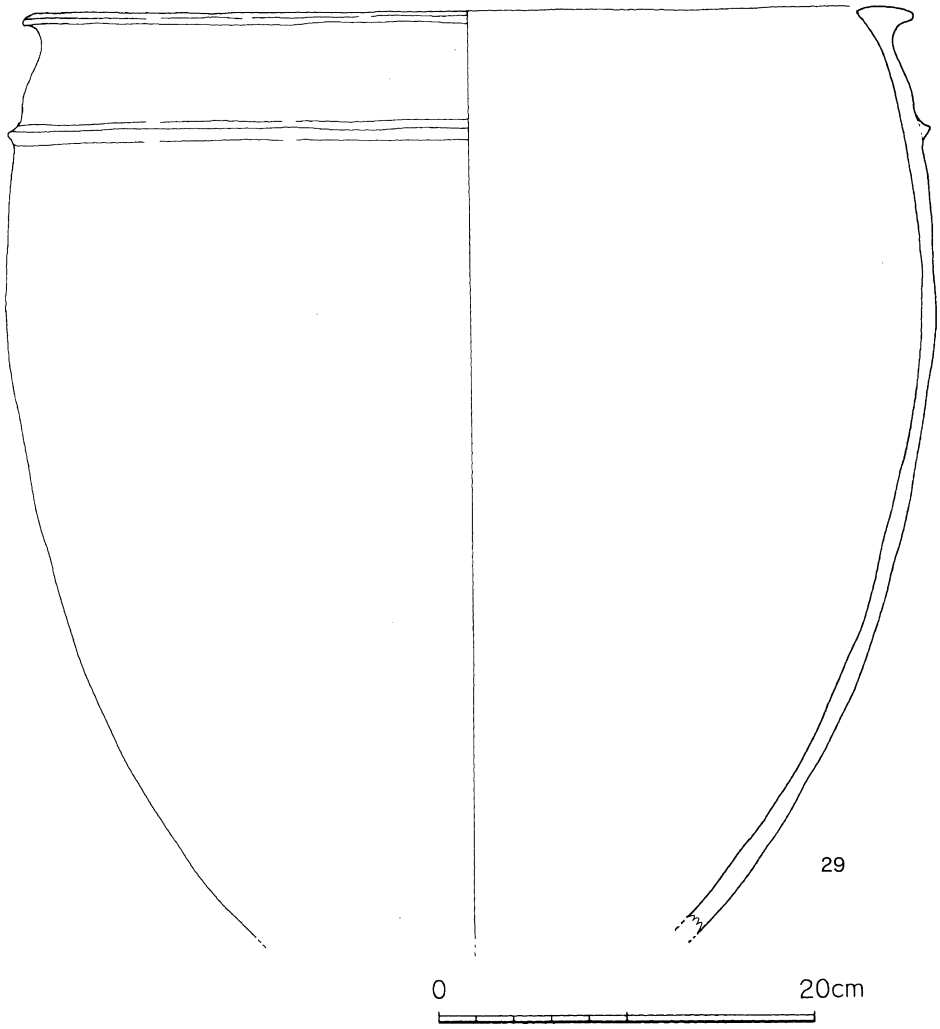




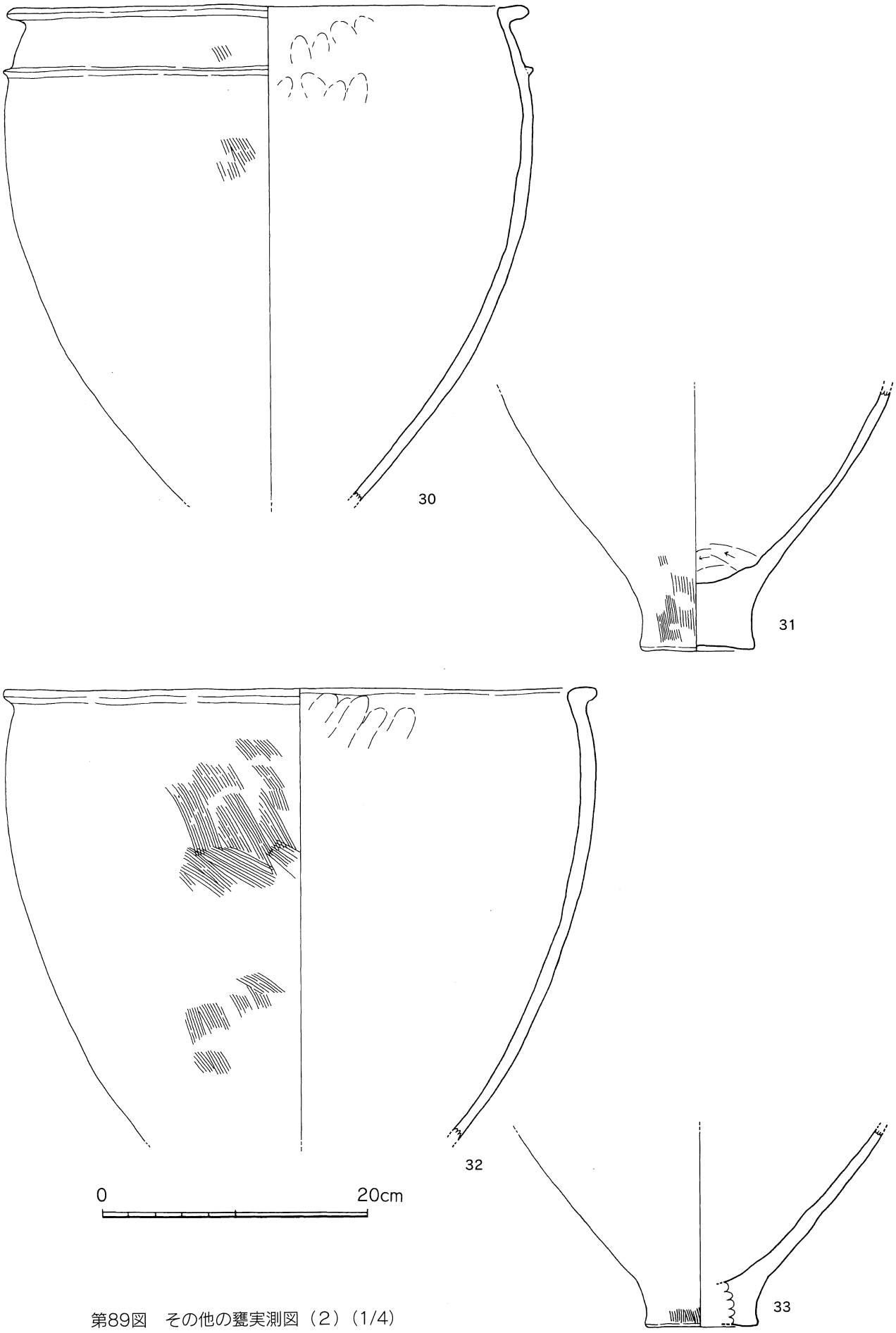
第87図　11号甕棺実測図（1/4）

(12) その他の甕（第88・89図）

以下記述する甕は、甕棺墓群から見て北側の調査区２－B～２－C区で、攪乱を除去する際に散乱した形で出土し、甕棺の一部であったと推測される。29は口縁外径より胴部最大径が大きく、口縁部は外側へ突出し（断面は三角形）上端面はやや隆起し、口縁下に一条の低い三角突帯を有している。器面調整は、外面は損耗が著しく判然としないが内面はナデ、口縁内外面は横ナデによる調整が行われている。また、外面には煤が付着した痕が見られる。30は口縁外径と胴部最大径がほぼ同じ大きさで、口縁部は外側へ突出し、上端面はやや内傾しており、口縁下に一条の低い三角突帯を有している。器面調整は、外面に斜め方向のハケ目が若干残っており、内面はナデ、口縁内外面は横ナデによる調整が行われている。31は甕の胴部下部から底部部分であり、底部は厚く外端部はあまり張り出さずにやや上げ底気味である。器面調整は、外面は縦方向のハケ目、内面はナデによる調整が行われている。また、外面には煤が付着した痕が見られる。32は口縁外径と胴部最大径がほぼ同じ大きさであり、口縁部は外側へ突出し、上端面はやや隆起している。器面調整は、外面に縦・斜め方向へのハケ目、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデによる調整の痕が見られる。33は甕の底部から胴部にかけての部分で、底部は厚く外端面は張り出さない。器面調整は、外面の一部に縦方向のハケ目が、内面はナデ、内面底部には指圧痕が残っている。



第88図　その他の甕実測図（1）（1/4）



第89図　その他の甕実測図（2）（1/4）

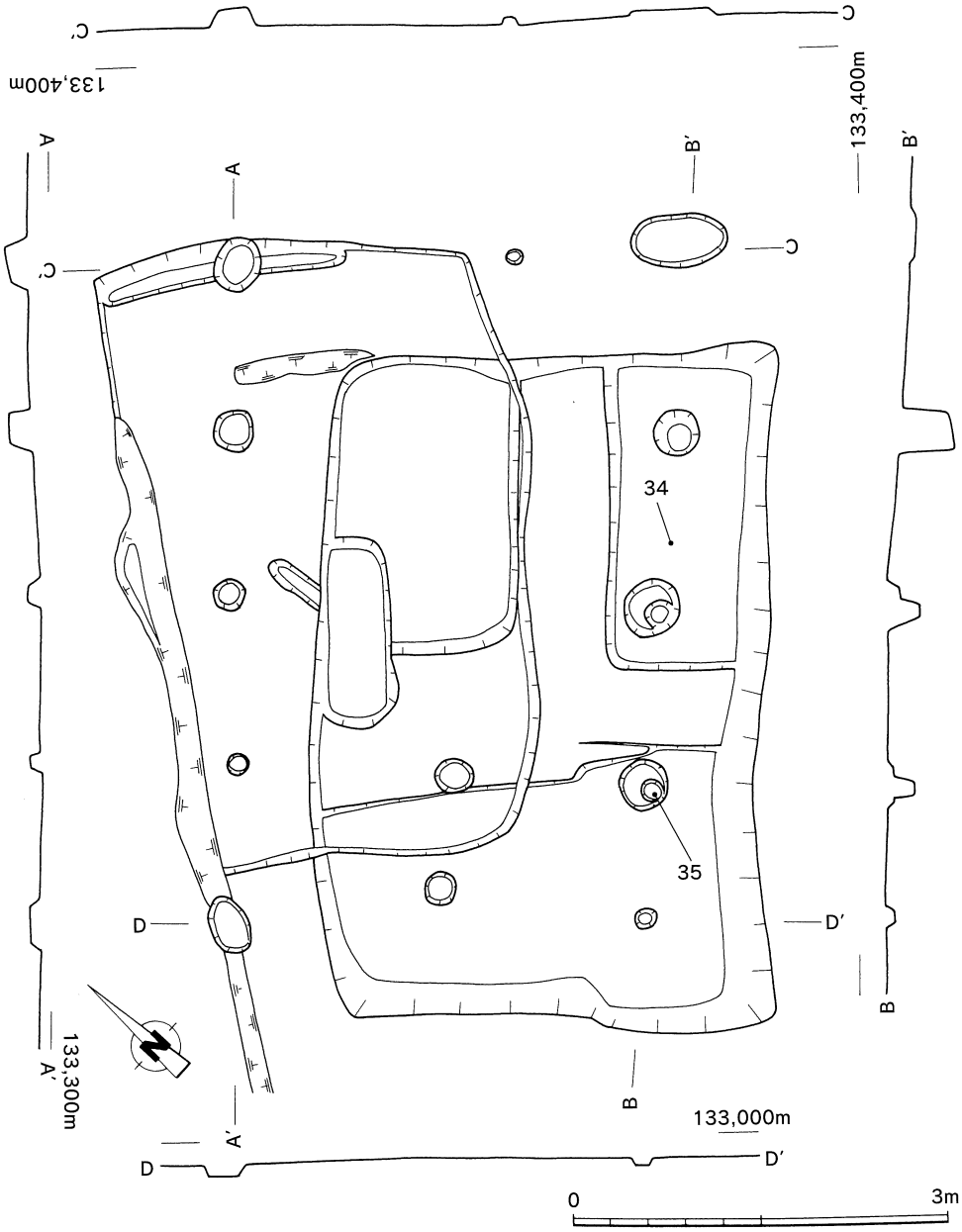
第12表　甕棺観察表

※（外）外面　（内）内面（口）口縁

番号	甕棺墓（機種）	形式	法量（cm） 口径	最大径	底径	器高	主軸方位（埋設角度）	胎土	色調	調整	備考
7	1号上（鉢）	接合式	37.0	35.0	8.3	28.9	S−37°−W（5°）	砂粒・角閃石・石英を含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐	（外）ナデ （内）ナデ （口）ナデ	煤付着
8	1号下（甕）		37.2	37.7	0.4	47.0		砂粒・長石を多く含む　角閃石を少し含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）横ナデ・ハケ目 （内）ナデ （口）横ナデ	
9	2号上（甕）	覆口式	35.8	36.5	9.0	46.2	W−35°−S（4°）	砂粒を多く含む石英・角閃石を少し含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）ハケ目 （内）ナデ （口）横ナデ	煤付着
10	2号下（甕）		45.5（復元）	49.0（復元）	0.45	7.4		砂粒を多く含む角閃石を少し含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）ハケ目 （内）ナデ （口）ナデ	底部赤変
11	3号上（甕）	接合式	38.5	38.9	9.6	48.6	N−30°−E（不明）	砂粒を多く含む石英・角閃石を含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）斜めハケ目 （内）ナデ （口）横ナデ	煤付着
12	3号下（甕）		38.0	39.2	9.3	46.3		砂粒を多く含む角閃石を多く含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）縦ハケ目 （内）ナデ （口）横ナデ	煤付着
13	4号上（甕）	接合式	37.4（復元）	36.0（復元）	不明	34.5（復元）	N−45°−W（不明）	白色砂粒・角閃石を多く含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）縦・横・斜めハケ目 （内）ナデ （口）横ナデ	煤付着 下部赤変
14	4号下（甕）		35.5（復元）	37.2（復元）	8.6	43.9		砂粒を多く含む角閃石・石英を少し含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）縦ハケ目 （内）ナデ （口）横ナデ	煤付着
15	5号上（甕）	覆口式	49.6（復元）	49.4（復元）	不明	29.5（復元）	N−40°−E（不明）	砂粒・石英・角閃石を多く含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）不明 （内）ヘラミガキ （口）横ナデ	
16	5号下（甕）		40.4（復元）	39.8（復元）	不明	20.5（復元）		砂粒・長石を多く含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）不明 （内）斜め・横ヘラミガキ （口）横ナデ	
17	6号（壺）	単棺式	26.0（復元）	48.0	不明	38.5（復元）	（不明）（不明）	砂粒・角閃石を多く、石英・長石を少し含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）横ナデ （内）横ナデ （口）不明	
	7号上（甕）	不明	不明	不明	不明	不明	N−32°−E（不明）	砂粒を多く含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）不明 （内）不明 （口）不明	
18	7号下（甕）		44.0	44.4	不明	31.5（復元）		白色砂粒・角閃石英石・長石・を少し含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）不明 （内）ナデ （口）横ナデ	
19	8号上（甕）	三連式	41.3	40.4	8.2	45.6	W−40°−S（不明）	砂粒を多く含む石英・角閃石を少し含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）縦ハケ目 （内）横ナデ （口）横ナデ	煤付着
20	8号中（壺）		不明	47.8	不明	29.9		砂粒・角閃石を多く、長石・石英を少し含む	（外）灰黄褐色 （内）灰黄褐色	（外）ヘラミガキ （内）ヘラミガキ	
21	8号下（甕）		43.6	45.4	不明	54.0		砂粒を多く含む石英・角閃石・長石を少し含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）縦・斜めハケ目 （内）指ナデ （口）横ナデ	煤付着
22	9号上（甕）	覆口式	50.2	50.4	不明	42.0（復元）	W−40°−S（不明）	砂粒・石英・長石・角閃石を多く含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）縦ハケ目 （内）不明 （口）横ナデ	
23	9号下（甕）		42.4	46.0	不明	24.5（復元）		砂粒を多く含む角閃石・石英を含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）不明 （内）ナデ （口）横ナデ	
24	10号上（甕）	三連式	26.4	26.7	7.0	34.4	W−44°−S（不明）	砂粒を多く含む長石・角閃石を含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）縦・斜めハケ目 （内）ナデ （口）指押さえ	煤付着
25	10号中（甕）		27.2	27.2	不明	25.5		砂粒を多く含む石英・長石・角閃石を含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）縦ハケ目 （内）不明 （口）横ナデ	煤付着
26	10号下（甕）		27.6	26.2	7.6	32.5		砂粒を多く、石英・長石・角閃石を少し含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）不明 （内）不明 （口）横ナデ	煤付着 下部赤変
27	11号上（甕）	接合式	38.6	35.2	9.6	42.0	N−33°−E（8°）	砂粒を含む石英・角閃石を含む	（外）淡赤褐色 （内）淡黄褐色	（外）ハケ目 （内）ナデ・指押さえ （口）横ナデ	煤付着
28	11号下（甕）		32.7	34.3	9.1	38.2		砂粒を含む石英・長石を含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）ハケ目 （内）ナデ （口）横ナデ	煤付着
29	（甕）		46.8（復元）	49.0（復元）	不明	49.0（復元）	不明	白色砂粒・石英・角閃石を多く含む	（外）明黄褐色 （内）明茶褐色	（外）ナデ （内）ナデ （口）横ナデ	
30	（甕）		39.0（復元）	39.4（復元）	不明	36.5（復元）	不明	砂粒・長石・角閃石を含む	（外）明黄褐色 （内）淡黄褐色	（外）斜めハケ目 （内）ナデ （口）横ナデ	
31	（甕）		不明	不明	8.4（復元）	19.2（復元）	不明	白色砂粒を多く含む石英・角閃石を少し含む	（外）明黄褐色 （内）明黄褐色	（外）縦ハケ目 （内）ナデ・指押さえ	煤付着
32	（甕）		44.4（復元）	44.2（復元）	不明	33.0（復元）	不明	白色砂粒を多く含む　角閃石を多く含む	（外）淡黄褐色 （内）淡黄褐色 （口）淡黄褐色	（外）斜めハケ目 （内）ナデ （口）横ナデ	
33	（甕）		不明	不明	8.4（復元）	14.2（復元）	不明	白色砂粒を多く含む　石英・角閃石を多く含む	（外）縦ハケ目 （内）ナデ		

5.掘立柱建物跡

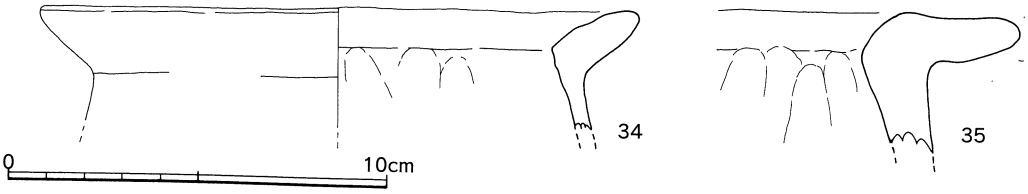
掘立柱建物跡は、全部で５棟検出している。１号掘立柱建物以外は調査区の北東側に集まっており、各建物跡とも遺物の出土が少ない。また、12号土抗についても４号掘建柱建物跡との関連で併せて記述する。



第90図　１号堀立柱建物跡実測図（1/60）

（1）１号掘立柱建物跡（第90図）

調査区２－Ａ・Ｂ区の３・４号竪穴住居跡の上で検出した２×５間の建物跡と推定される。建物跡は、長辺約６ｍ・短辺約3.6mの規模で、柱穴の残りも浅く表面の削平をかなり受けている。遺物34は甕口縁部で、口縁の形状は逆ハの字型で、内外面とも横ナデの痕が残っている。35も甕口縁部で上端部はやや凹状になっており、内外面とも横ナデの痕が残っている。



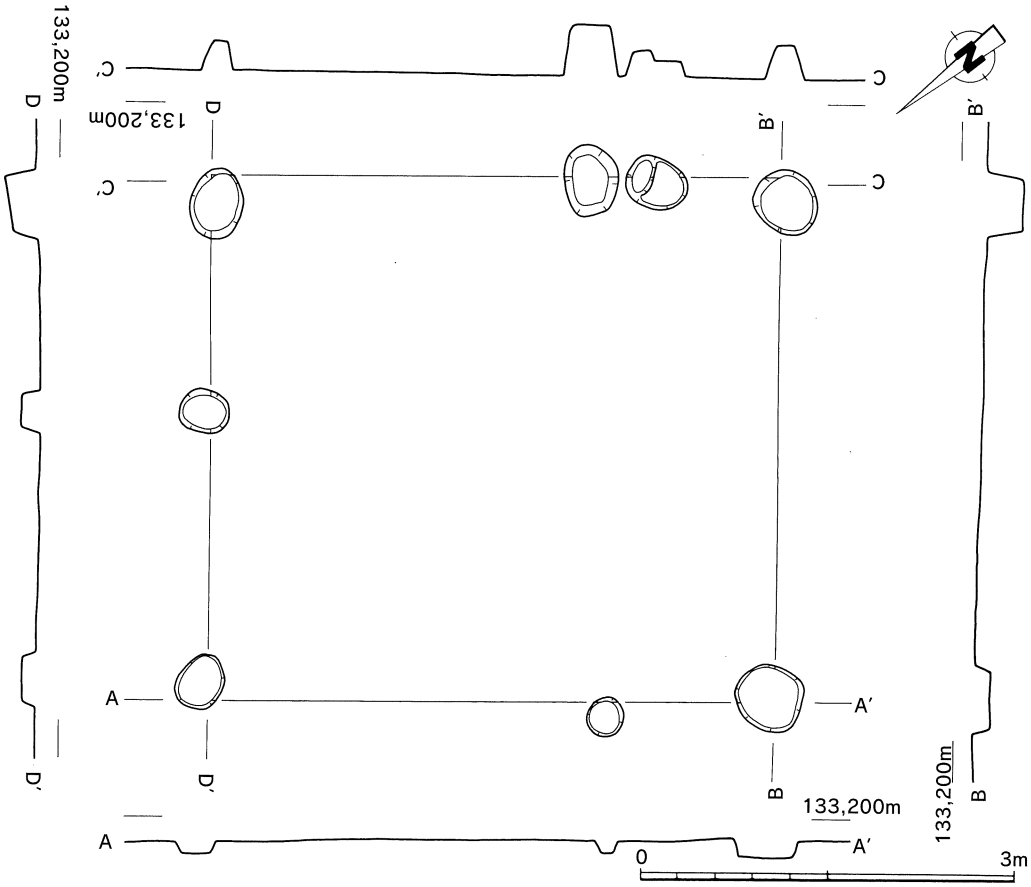
第91図　１号堀建柱建物跡出土遺物実測図（1/2）

第13表　１号堀立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）			成　形	調　整	胎　土	色　調	備　考
		底径	底径	器高					
34	土師器 甕口縁部	不明	不明	不明	不明	(外) 横ナデ (内) 横ナデ	白色砂粒・石英・長石・角閃石を含む	(外)灰黄褐色 (内)灰黄褐色	
35	土師器 甕口縁部	不明	不明	不明	不明	(外) 横ナデ (内) 横ナデ	白色砂粒・石英・長石・角閃石を含む	(外)明赤褐色 (内)　赤褐色	柱穴より出土

（２）２号掘立柱建物跡（第92図）

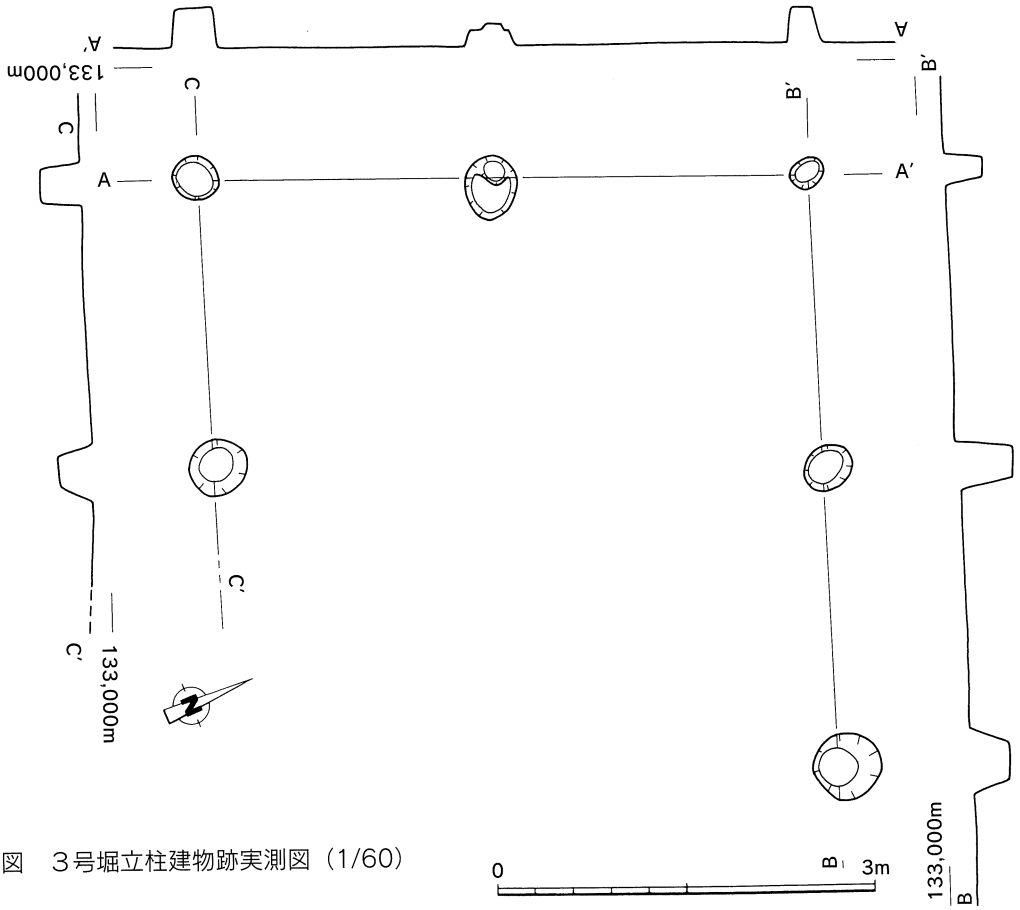
調査区６―A・B～７－A・B区で検出した２×２間の建物跡で、長辺約4.5m・短辺約3.9mの規模である。柱穴間の距離に少しばらつきがあり、柱穴の残りは浅く10～30cm程度で遺物も殆ど出土しなかった。この建物跡の範囲内で９号土抗を検出している。



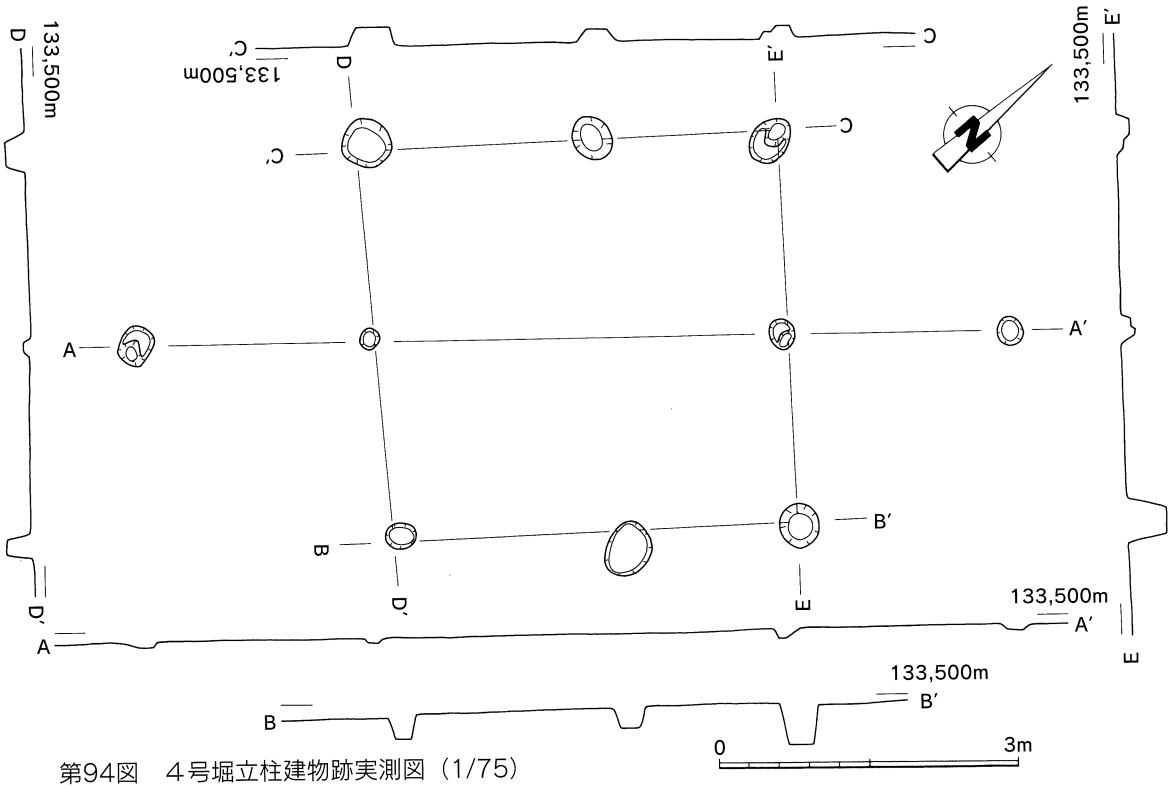
第92図　２号堀立柱建物跡実測図（1/60）

（３）３号掘立柱建物跡（第93図）

調査区７－B・C区で検出した２×２間の建物跡と推定され、長辺約4.8m短辺約4.8mの規模である。建物跡東側の一部が削平されており、柱穴の残りは約10～30cm程度で、柱穴間の距離は約2.4mである。尚、遺物は殆ど出土していない。



第93図　３号堀立柱建物跡実測図（1/60）



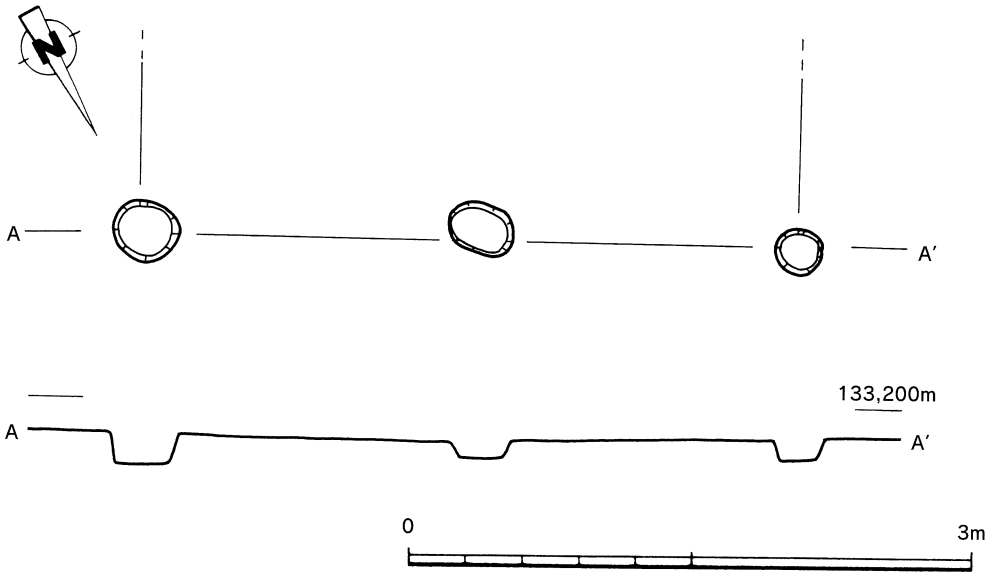
第94図　４号堀立柱建物跡実測図（1/75）

（4）４号掘立柱建物跡（第94図）

調査区８―B・C～９－B・C区にかけて検出した２×２間の建物跡で、長辺約4.2m・短辺約3.9mの規模である。柱穴間の距離は約1.8～２mで、北側と南側にそれぞれ棟持柱跡と思われる柱穴がある。柱穴の残りは浅く、遺物は殆ど出土していない。

（5）５号掘立柱建物跡（第95図）

調査区７－A区で検出した建物跡で、柱穴が東西に３つ並んでいる。建物跡の南半分は調査区外へと続くものと思われる。柱穴間の距離は約１間（180cm）で、柱穴の残りは浅く、遺物は殆ど出土していない。



第95図　５号堀立柱建物跡実測図（1/40）

（6）１２号土坑（第96図）

調査区９－C区で検出した、長辺約2.2m・短辺２mの方形隅丸に近い土坑である。深さは約50cmで、４号掘立柱建物跡のすぐ東側に位置し、礫と共に須恵器・土師器片が散乱した形で出土しており廃棄土坑であると思われる。以下、主な遺物について記述する。

36は須恵器蓋で、擬宝珠様のつまみは扁平して器高は低く端部と中央部が若干凸状になっている。天井部は、下方へ屈曲して段をなし口縁部へと続いている。口縁部のかえりはなく端部は下方に伸びている。天井部の内面には粘土ひものマキアゲ痕があり、外面には回転ヘラケズリ、口縁端部には回転横ナデによる調整が行われている。

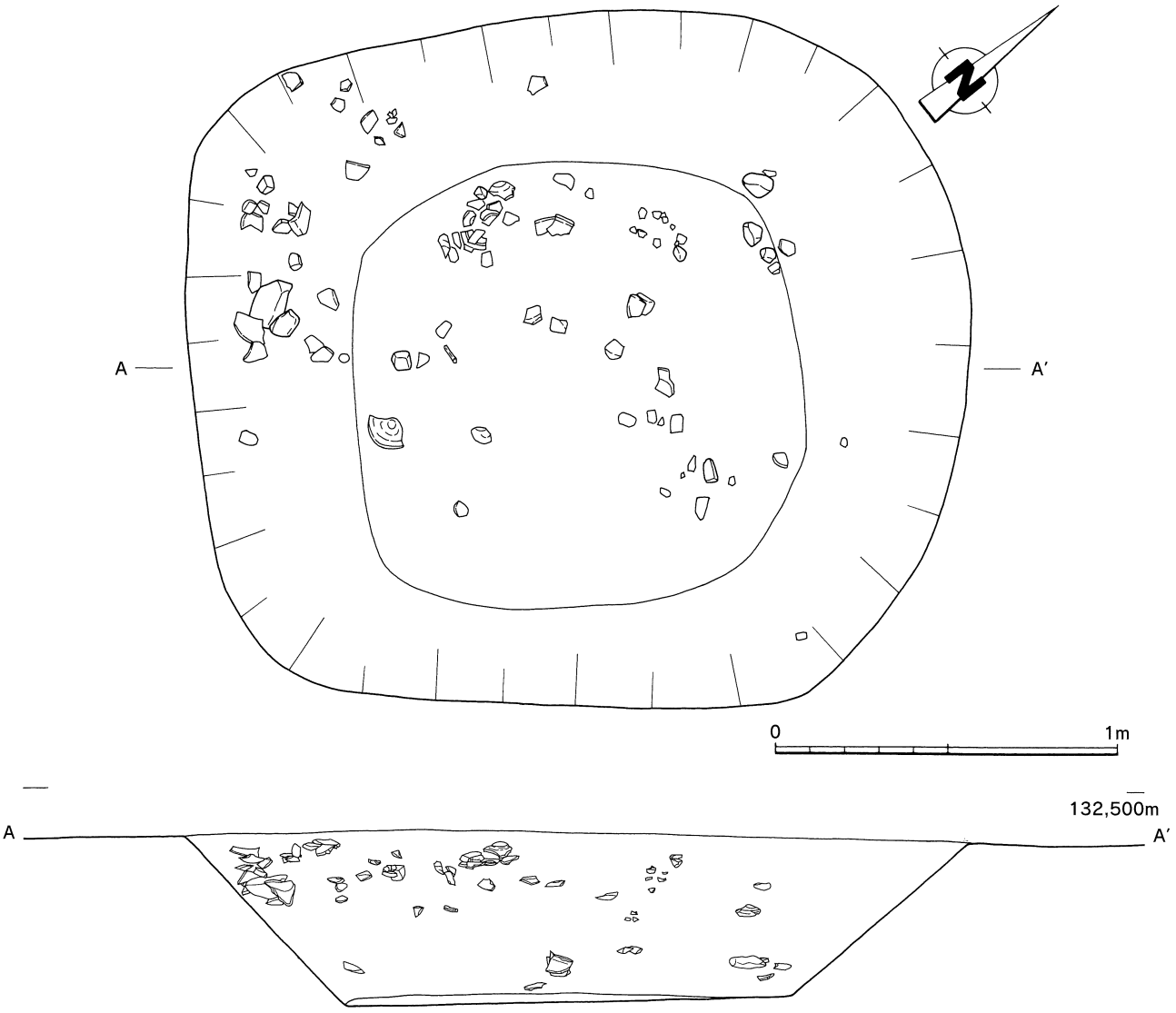
37は須恵器蓋で、残存する天井部は比較的扁平で内面には粘土ひものマキアゲ痕が、外面肩部には回転ヘラケズリ、外面及び口縁端部内面には右廻り回転横ナデによる調整が行われている。

38は須恵器杯身で、高台は底端部にありハの字形に開き内端面で設置する。口縁部はゆるやかに外反し、内面には粘土ひものマキアゲ痕がある。また、内外面は回転横ナデ、底端部は右廻り回転横ナデによる調整が行われている。

39は須恵器杯身で高台の位置は底端部近くにあり、直立に近い。底部はやや上げ底状で、内外面回転横ナデによる調整が行われている。

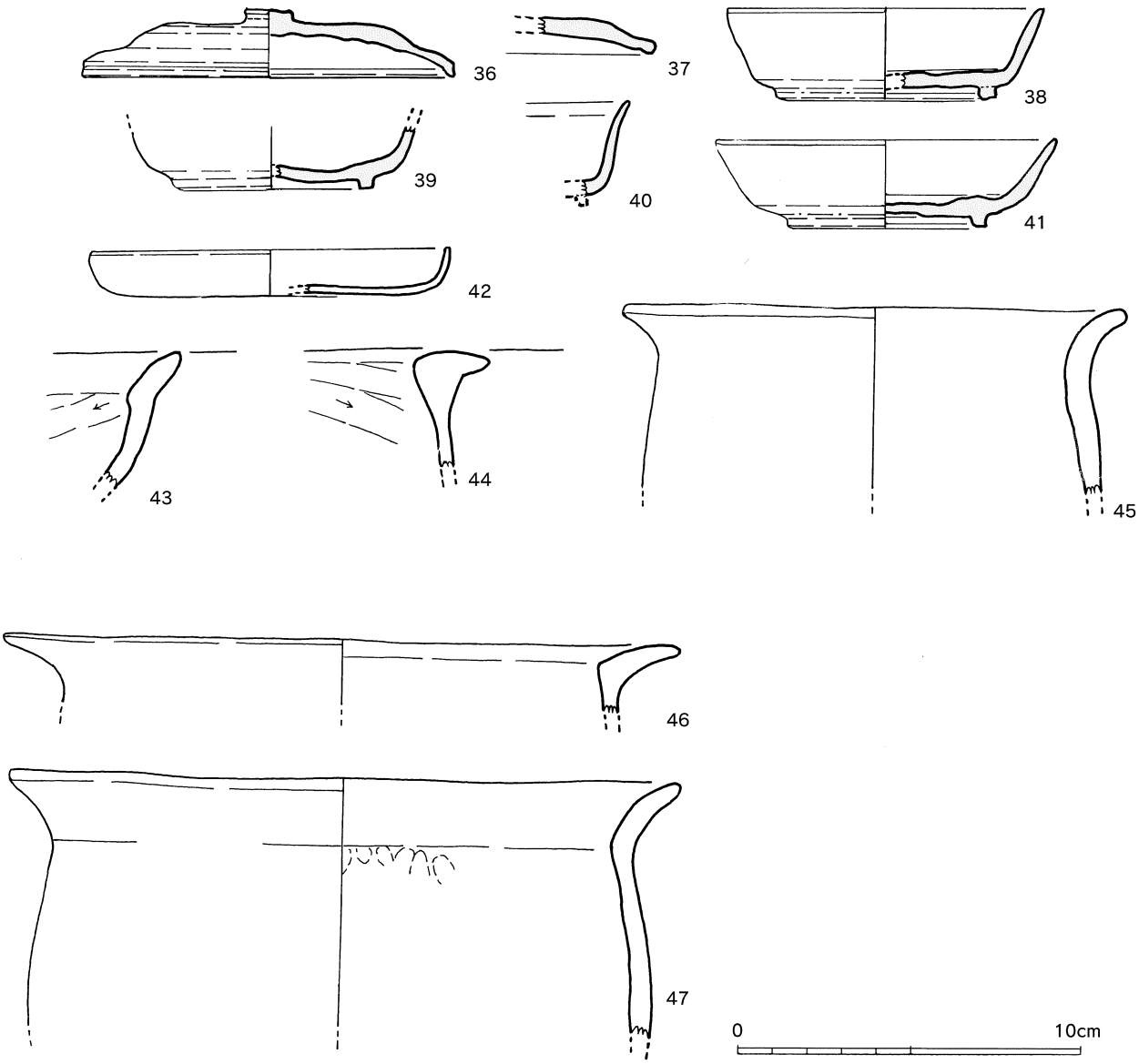
40は須恵器杯身で体部はやや外反し、口縁部にかけて逆ハの字形に開き気味になっている。内面には粘土ひものマキアゲ痕があり、内外面は回転横ナデ、底端部は回転ヘラケズリによる調整が行われている。

41は須恵器杯身で、高台はハの字形に開き外端面で設置している。内面は高台上部で一度隆起している。



第96図　12号土坑実測図（1/20）

また、内外面は右廻り回転横ナデ、底部は回転横ナデ、底端部は右廻り回転ヘラケズリによる調整が行われている。42は土師器皿で、器高は低く底部は外端部から中心に向かってやや上げ底気味になる。口縁部上端面は水平で、口縁部内外面は横ナデによる調整が行われている。43は土師器高坏口縁部で、逆ハの字形に外反している。内面は斜めヘラケズリ、口縁部内外面は横ナデによる調整が行われている。44は土師器甕口縁部で、口縁部上端面はやや隆起している。器面調整は、表面の損耗のため内面にヘラケズリ、外面にナデの跡が解る程度である。45は土師器甕口縁部で、くの字形に屈曲する。器面調整は、損耗のため内外面とも不明である。46は土師器甕口縁部で、逆L字形に近い形をしている。器面調整は、口縁部内外面とも横ナデによる調整が行われている。47は土師器甕口縁部で、くの字形に屈曲している。器面調整は、損耗のため内外面とも不明である。



第97図　12号土坑出土遺物実測図（1/2）

第14表　12号土坑出土遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）			形　成	調　　整	胎　土	色　調	備　考
		口径	底径	器高					
36	須恵器蓋	16	16	3	粘土ひものマキアゲ	(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転横ナデ (口) 右廻り回転横ナデ	白色砂粒を少し含む	(外) 黄灰色 (内) 灰黄色	灰　釉
37	須恵器蓋	不明		不明	粘土ひものマキアゲ	(外) 回転ヘラケズリ (内) 回転横ナデ (口) 回転横ナデ	白色砂粒を少し含む	(外) 黄灰色 (内) 黄白色	
38	須恵器坏身	13.5 (復元)	9.5	4	粘土ひものマキアゲ	(外) 回転横ナデ (内) 回転横ナデ (底) 右廻り回転横ナデ	白色砂粒を少し含む	(外) 黄灰色 (内) 黄灰色	灰　釉
39	須恵器坏身	不明	不明	不明		(外) 回転横ナデ (内) 回転横ナデ (口) 回転横ナデ		(外) 黄灰色 (内) 灰黄色	
40	須恵器坏身	不明	不明	不明		(外) 回転横ナデ (内) 回転横ナデ (底) 右廻り回転横ナデ	砂粒をあまり含まない	(外) 黒褐色 (内) 黄灰色	灰　釉
41	須恵器坏身	14.6	8.4	3.7	粘土ひものマキアゲ	(外) 右廻り回転横ナデ (内) 右廻り回転横ナデ (口) 右廻り回転横ナデ (外) 右廻り回転ヘラケズリ	砂粒をあまり含まない	(外) 黄灰色 (内) 黄灰色	
42	土師器皿	15.0 (復元)	11.0 (復元)	2.0		(外) 横ナデ (内) 横ナデ (口) 横ナデ	砂粒をあまり含まない	(外) 橙　色 (内) 橙　色	
43	土師器高杯口縁部	不明	不明	不明		(外) 不明 (内) 斜めヘラケズリ (口) 横ナデ	砂粒を多く含む	(外) 明赤褐色 (内) 橙　色	
44	土師器甕口縁部	不明	不明	不明		(外) ナデ (内) ヘラケズリ (口) 横ナデ	砂粒を多く含む	(外) 橙　色 (内) 橙　色	
45	土師器甕口縁部	22.0 (復元)	不明	不明		(外) 不明 (内) 不明 (口) 不明	砂粒を多く含む	(外) 明赤褐色 (内) 橙　色	
46	土師器甕口縁部	29.6 (復元)	不明	不明		(外) 不明 (内) 不明 (口) 横ナデ	砂粒を多く含む	(外) 暗褐色 (内) 暗褐色	
47	土師器甕口縁部	39.2 (復元)	不明	不明		(外) ナデ (内) 不明 (口) 不明	砂粒を多く含む	(外) 赤褐色 (内) 明赤褐色	

6.溝状遺構　1号溝（第53図）

調査区外から、4号掘立柱建物付近で消失する南北方向へ伸びる溝で、調査区内の全長は約12mあり、最大幅は約1.4m、深さは最深23cmで底部は浅いU字形をなしている。遺物は殆ど出土していない。

7.火葬墓　1号火葬墓（第55図）

調査区3－B区の1号竪穴住居跡内で、住居跡の南東側を一部切る形で検出した。火葬墓は、長辺約1.6m・短辺約1.1mの隅丸長方形に近い形で、検出面からの深さは12cm程である。埋土は炭を多量に含む黒褐色土で、床面は凹凸があり壁面まで堅く焼きしまっている。壁面は北側はややなだらかに、南側はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土しておらず詳細な時期は不明であるが、中世以降であると思われる。

第３節　小　結

上野第２遺跡の調査では生活遺構として竪穴住居跡・掘立柱建物跡が、埋設遺構としては甕棺墓群・土壙墓を検出した。遺構の時期は、伴出遺物から弥生時代と奈良時代の２期に分かれる。以下、時代別に遺構・遺物について簡略に述べることとする。

弥生時代

竪穴住居跡は全部で４つ検出した。４つとも壁面・柱穴の残りが浅く、遺物の量が少ないことが共通しており、２号竪穴の炉跡以外は住居内の当時の日常生活を窺う遺構が検出されなかった。４号住居跡は住居内が３つのスペースに区画されており、区画された部分よりも区画と区画の間が高くなっているという特徴がある。

甕棺墓群は全部で11基を確認している。使用されていた甕の外面には煤が付着してるものが多く煮炊き用を転用したことが伺える。甕型土器の特徴は器高が40㎝前後であり、口縁部の断面が三角形またはコの字状に近い。また、底部は厚く上げ底状で、底端部は外へあまりはみ出さないことが共通している。これは北部九州一帯で出土する「須久式土器」のB系譜（遠賀川以西系）と類似しており、時代は弥生時代中期初頭頃と思われる。

土壙墓は４基を検出しており前述したように形状は隅丸長方形で、２基で１つの墓域を形成する特徴がある。主な遺物は３号土壙墓で石鏃が１点出土しているが、埋土中より人骨・副葬品の出土はなかった。時代は他の遺構の展開時期から見て弥生時代中期頃と思われる。

奈良時代

掘立柱建物跡は５棟のうち４棟を調査区東側で検出したが、どのような目的の施設であったか遺構や遺物より明確な答えはでてこない。また、廃棄土坑である12号土坑は出土した須恵器の蓋杯の特徴から時代は８世紀中頃で、掘立柱建物跡もほぼ同時期のものと思われる。

今回の調査により、甕棺墓群が北東の調査区外へと土壙墓と共に墓域を形成していることが予想される。また、掘立柱建物跡に関しては「日田バイパス」に伴う他の遺跡発掘調査からも検出されており、相互の関連性を検証することが必要であろう。今後、この地域全体が開発に伴い遺跡の全容が明らかになることも考えられ、上野第２遺跡の集落の展開や墓域の範囲が解明されることに期待したい。

＜参考文献＞

「後迫遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（18）大分県教育委員会2001
「小迫辻原遺跡Ⅰ」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（10）
大分県教育委員会1999
「上の原遺跡の調査Ⅱ」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（27）
福岡県教育委員会1993
「須久式土器の再検討」田崎博之　九州大学文学部史淵第百二十二号　昭和六十年（1985）
「陶邑Ⅲ」大阪府文化財調査報告書第30号　大阪府教育委員会1978
「日田市高瀬遺跡群の調査２」一般国道210号日田バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　大分県教育委員会1998